

# 大雪山から育まれる文献書誌集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

## 第2集



写真文化首都

北海道・東川町

## ふるさとの山、大雪山の文献書誌

東川町のエリアに大雪山国立公園の主峰・旭岳がすっぽり入っています。ふるさとの山、大雪山は、アイヌの人々がカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭の意味）と呼んでいた特別な山です。豊かな自然はさまざまな野生の命を育み、町から眺める姿は雄大で美しく、日本を代表する名山のひとつです。

自然が豊かな山であると同時に、さまざまな人がかかわり、多くの本や研究が残されてきた大雪山です。人とのかかわりを視点にすると、日本一の「文化の宝庫」ともいえます。北海道が蝦夷地と呼ばれていたころから多くの探検家が歴史的な紀行文を残し、明治時代の文士が名文を残して、大雪山は徐々に全国に知られていきました。

高山植物、動物、昆虫、地質、火山、気象、雪の結晶などそれぞれの分野の研究者が登り、研究成果を発表しています。登山、縦走、冬山、スキーなど登山記やガイドブックは古典的な名著が多く、そして最新版としてこれからも発行され続けていくことでしょう。優れた写真家たちが心血を注いだ素晴らしい写真集にも恵まれています。そして、これからも写真家たちは大雪山を撮り続けることでしょう。

大雪山の文献書誌を東川に集め、多くの人に読み、親しんでいただき、「文化の宝庫」を全国に発信していきたい。そのような目的で、どのような本が東川にはあるのか、「目録」を作りました。ふるさとの山への知識を深めていくきっかけになることを願っています。

## 目 次

### 文献書誌集に寄せて

『旭岳のギンザンマシコ』……………	大橋 弘 一 ……	1
『遠くにあってほしい場所、隔絶された白い世界・旭岳』…	柏 澄 子 ……	2
『大雪山を聖地として』……………	塩谷 秀 和 ……	3
『「大雪山讃歌」を出版して』……………	高澤 光 雄 ……	4
『大雪山に抱かれて』……………	春 菜 秀 則 ……	5
『移住者の体感時間』……………	林 拓 郎 ……	6
『遥かなる山稜』……………	本 村 勝 伯 ……	7

東川に移住した笹川良江さんの貴重な資料 ……………	8
---------------------------	---

大雪山文献目録 ……………	9
---------------	---

インデックス ……………	44
--------------	----

絵はがき ……………	51
------------	----

### 大雪山関係機関、団体の紹介

あさひかわジオパークの会 ……………	53
一般社団法人 ひがしかわ観光協会 ……………	54
ナキウサギふぁんくらぶ ……………	55
山のトイレを考える会 ……………	56

われらの大雪山（愛山溪新聞社歌）……………	表3
-----------------------	----

## 旭岳のギンザンマシコ



### 大橋 弘一

#### 経歴

1954年東京都生まれ。札幌市在住。野鳥写真家。新聞・雑誌連載、テレビ・ラジオ出演、執筆活動等、生態系保全を訴え多彩に活動。その一環として2003年より北海道自然雑誌『faura』編集長を務める。おもな著書に『庭で楽しむ野鳥の本』『散歩で楽しむ野鳥の本』（以上、山と溪谷社）、『北海道野鳥ハンディガイド』『北海道野鳥観察地ガイド』（以上、北海道新聞社）、『鳥の名前』（東京書籍）など。（公財）日本野鳥の会・SSP日本自然科学写真協会各会員。早大法学部卒業。

今から25年ほど前のこと。野鳥写真家としての活動を始めて間もない頃の私は、毎年7月に大雪山系旭岳での取材を定例化しようと考えていた。目的はギンザンマシコだ。

高山の鳥を撮るためには高山へ行かなければならない。しかし、つらい登山はできるだけしたくない。そう考えると、ロープウェイで一気に標高1,600mのハイマツ帯へ行ける旭岳が最も効率的に（本当は「楽をして」だが）高山の鳥を撮影できる場所だと思えた。

日本で「高山鳥」と呼ばれる鳥はライチョウ、イワヒバリ、カヤクグリ、ギンザンマシコの4種しかない。ホシガラスやサメビタキなども含める考え方もあるが、高山の厳しい自然環境の地だけを子育ての場と定め生命をつないでいる鳥を一般に高山鳥と呼ぶ。

これらの高山鳥のうちでも最も撮影のチャンスが少ないのがギンザンマシコである。日本では北海道でしか繁殖せず、とにかく個体数が少ない。大雪山系にいることははっきりしていても広大なハイマツ帯のどこに現れるかわからない。登山道以外に足を踏み入れることのできない山岳地帯にあって、出会えるかどうかは運次第だと思われた。

日本で初めて大雪山系でギンザンマシコの繁殖が確認されたのは1975年のことだという。文献でそのことを知って以来、当時東京在住だった私にとってギンザンマシコは北海道を象徴する存在として憧れの鳥になった。その赤く大きな姿に出会えば登山の疲れも吹っ飛ぶという話を聞き、まだ見ぬギンザンマシコへの思いは膨らむばかりであった。

ついに旭岳で初めてギンザンマシコに出会えたのは1991年7月。目論見通りロープウェイに乗り姿見の池の遊歩道を歩いてのことだった。小鳥と呼ぶには大柄などっしりとしたその姿はまさに北海道の高山の申し子に見えた。ノゴマやカヤクグリの個体数が多いことにも感動した。以来、ギンザンマシコと夏の旭岳の鳥たちは私の心を捉えて離さない。



ハイマツの梢にとまるギンザンマシコ(雄)。鮮やかな紅色の姿は存在感抜群だ。2014年7月、旭岳姿見の池自然探勝路で撮影

## 遠くにあってほしい場所、隔絶された白い世界・旭岳



柏 澄子

経歴

1967年千葉県千葉市生まれ。山岳ジャーナリスト。主な著作は『ドキュメント山の突然死』『山登りの始め方』など。ほか、webや山岳雑誌に山岳ガイドやクライマーのインタビューを連載、クライミングのフィルムを作るチームに参加など。この秋は若手クライマー達とネパールヒマラヤへ向かう。

<https://www.facebook.com/sumiko.kashiwa>

初めて東川町を訪れたのは、10年ほど前の冬。羽田空港から新千歳に飛び、列車で北上した。旭川駅から旭岳温泉に向かって、宿泊者用の無料バスが出ていたのには驚いた。スキー板に登山道具と大荷物を抱えた私たちは、旭岳温泉のバス停に降り立った。雪に閉ざされ、音のないとても静かな土地だった。以来、毎冬のように仲間と一緒に訪れ、旭川空港からレンタカーも使うようになった。するとあんなに遠く感じた旭岳温泉が、東京の自宅から正味3時間で到着することがわかり、それにも驚いた。しかしそれでも、旭岳が遠くの土地である印象が変わらなかったのは、そこは雪一色の世界であり、一切の雑音が断たれ、登っては滑り、登っては滑り、美味しいごはんを食べて温泉に入って寝て、そしてまた登っては滑ることだけを繰り返す、私にとっては極楽のような場所だからだろう。冬になると旭岳へ行くことを繰り返す私を見て、ある人は言った。「強風になるとロープウェイは止まるし、効率よく滑れないでしょう」。そんなことはまったく気にしていなかった。荒天で山に上がれないのは当然。そんなときは、温泉三昧読書三昧の罰が当たりそうなほど贅沢な時間を過ごしていた。宿のご主人が、クロスカントリースキーコースを整備していることに気づいたのは、2度目の冬だった。ワールドロペットマスターでもあるクロカンの専門家であることや、トップ選手たちが集まることも知った。私がクロカンを始めたのはそれから5年以上経ってから。山に上がれない日はクロカンを楽しむようになった。

最近になって東川町の方々に文献書誌集のことを教えていただき、古今東西問わずさまざまな分野の専門家が旭岳を目指し、通い続けたことを知った。そうかみんな惹かれるのかと思った。日本中の山を歩き回った田部重治や大島亮吉も旭岳を愛した。高山蝶の研究家であった田淵行男が成果を残したのは北アルプスだけではなかった。『大雪の蝶』という分厚い写真集がある。雪の結晶について研究した中谷宇吉郎も、この極寒地を貴重なフィールドと認識していた。穂高岳を描き大成した足立源一郎の作品には、大雪山もある。これはまた、読書の楽しみが増えた。

個人的なことであるが山の近くに仕事場を持ちたいと考え、この冬はあちこち好きな土地を移動しては、そのことを考えている。さっそく12月に東川町を訪れたが、すぐにここは移住先ではないとわかってしまった。私にとっては、初めて旭岳温泉のバス停に降り立った時の印象が強すぎるのだ。自分が住むところから時間をかけてやってきて、日常から隔絶された特別なときを過ごす場として、とっておきたい。そんな贅沢な我儘が理由だ。東川町にある旭岳と旭岳温泉は、私にとっては近しくて遙か遠くにあり、そして遠くにありながらも近しく思える場所である。

# 大雪山を聖地として



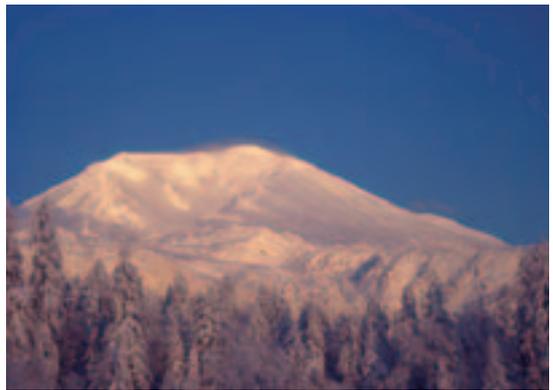
## 塩谷 秀和

### 経歴

1949年銭函に生まれ、手稲・函館・森町で育つ。17歳で放浪の旅を始め、12年間に亘りヒッチハイクと野宿を重ね、北海道から沖縄を何度も往復する。各地の森や沢を歩き山に登り、沖縄の島々では海に潜り魚を突く。1988年「大雪山ネイチャーガイド」（山岳・自然ガイド）を始める。著書「大雪山の四季」（実業之日本社1998年）他。北海道山岳ガイド協会副会長。東川町在住。

初めて大雪山に登ったのは、放浪の旅を始めて2～3年たった頃だろうか。記憶も定かではないが広々とした高山帯は、我々の祖先が歩いてきたかもしれない、シベリアのツンドラ地帯と同じように感じられた。遙かな昔を思い出すような、懐かしいような感情が込みあげ、今にも霧の中からマンモスが現れるのではないかという思いに捕らわれてしまった。知床から西表島までの山や森を歩き回ったが、これ程のスケールで野生が残っている場所を私は知らない。

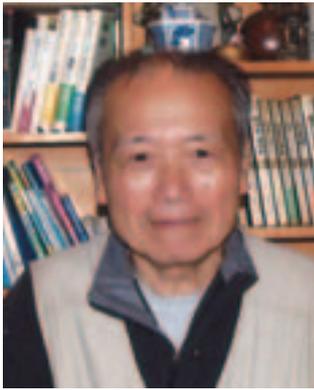
40数年前の大雪山はまだ登山者も少なく、広大な風景を独り占めしているような気分させられたものだ。その頃の私の登山は計画もなく、山に居られるだけ居るといふもので、避難小屋に残していった食料を頂いたり、小屋を修理したりというような気ままなもので、食料が尽きたら買い出しに下山する事もよくあった。山頂には行ってみるが、目的はできるだけ多くの時間を山で過ごすということで、ただ景色を眺めて座っているだけでもよかった。登山道を外れて偵察に行ったりもしたが、足跡を残さないように気を使ったものだ。道内の山に登り歩いたが、最も多く登ったのはやはり



大雪山ということになる。いつしか、暮らすのなら大雪山麓でと考えるようになり、すでに東川町民となって35年もたってしまった。大雪山麓で暮らし始めた時から、私にとって世界の中心は大雪山であり、日々仰ぎ見る聖地として大雪山は鎮座している。百年前に大雪山の土地払い下げをしてはいけぬ、国家が霊域として保護すべき土地であると喝破した人物がいる。大雪山を汚すことなく後世に残そうという熱い思いが

人々に引き継がれてきたに違いない。意識するしないにかかわらず、大雪山麓に暮らす人々にとって大雪山こそが聖地なのだ。人間が自然界の頂きにいるとの思いは錯覚にすぎない。圧倒的な自然の前で人はそれを自覚するしかないのかもしれない。人は自然に属しているのだから。

# 「大雪山讃歌」を出版して



## 高澤光雄

### 経歴

1932年江別町字美原で出生。1941年に札幌郡白石村に移住。戦後、学校の遠足で札幌の円山に登り山の醍醐味を知る。高校に進学し山好きな先生に引率され山に登る。1951年に丸善(株)札幌支店に入社。1968年に札幌山の会を組織し登山技術を研修しながら険悪な山を目指す。深田久弥、今西錦司らの知遇をえて北海道の山に同行。刺激を受けながら「北海道登山史年表」の調査作成に没頭、数々の講演を行う。2015年『大雪山讃歌』四六判 229頁、北海道出版企画センターより出版。

東川町が大雪山の資料を収集し、平成26年3月に「大雪山から育まれる文献書誌集」を出版された。そこに拙著が5冊も列記され、「愉しき山旅」から引用し、「高校3年の旭岳登山で松山温泉の佐藤門治に助けられ、勇駒別温泉で工藤虎男、速水潔らと知り合うなどさまざまな山仲間との出会いを書いている」と評され驚いた。

その時に世話になった方は忘れられない。その恩義に報いようと、収集してきた大雪山の古い絵葉書や諸資料を東川町に寄贈した。昨年が国立公園指定から80周年の節目であり、私は山岳雑誌などに発表してきた大雪山系の紀行文を纏め「大雪山讃歌」として出版することにした。



序文は東川町長の松岡市郎様、巻頭は「写真で見る探検・登山・保護への歩み」として、古い写真の一部は東川町から提供された。寛政2(1790)年から最上徳内、間宮林蔵、松浦武四郎らが踏査・測量で奥地へ入山。小泉秀雄、大島亮吉、大町桂月らが続々と大雪山に登り名文を遺す。

昭和26年9月26日に襲った台風15号で、大雪山一帯の樹林が大被害を被り、林道は奥地へと開削された。それが登山道となり石狩岳やトムラウシ山などは容易に登れるようになった。旭岳と黒岳にロープウエーが敷設され、登山は大衆化された。

最高峰旭岳に測量技官館潔彦が一等三角点を設置したのが明治33年9月。平成12年に測量記念百周年記念イベントが東川町公民館で催され、所蔵品を展示して「旭岳測量前後と館潔彦にふれて」を講演したのでこれも載せ、館の北海道での測量の足跡を網羅した。

主な紀行文だが、記載年月は登った時のもの。昭和25年7月「初めての大雪山」、36年7月「勇駒別温泉から旭岳を経て愛山溪へ」、37年3月「冬の十勝岳」、48年9月「遭難寸前の大雪山クワウンナイ川遡行」、49年12月「正月の永山岳、愛別岳、当麻岳」、平成3年9月「紅葉の東大雪山縦走」、4年9月「十勝・大雪縦走記」、8年7月「高山植物の咲き誇る北大雪の比麻良山」、15年6月「高山植物盗掘で入山が厳しい扇沼山」、24年10月「然別湖の白雲山」など。未踏だった通称「オッパイ山」の西クマネシリ岳は、アイヌ伝説を詳記した山本多助翁の著書を調べ、昨年9月末に取材で登ってきた。人物伝は「雪城山と大島亮吉」「初期の大雪山案内人として活躍した成田嘉助翁」「大雪山天人峡温泉を繁栄させた佐藤門治の俳句」「大雪山登山史年表の詳録者吉田友吉氏を偲ぶ」など。

# 大雪山に抱かれて



## 春菜秀則

### 経歴

北海道胆振管内むかわ町生まれ。ぶらり放浪の末、大雪に住み着く。ロッジ・ヌタプカウシペを経営。



旭岳に通って四十六年、ほとんど半世紀になってしまいました。そして、此処に住み着いて三十五年も経ちました。日々、自然の息吹が漂っている中で生活出来るなんて！

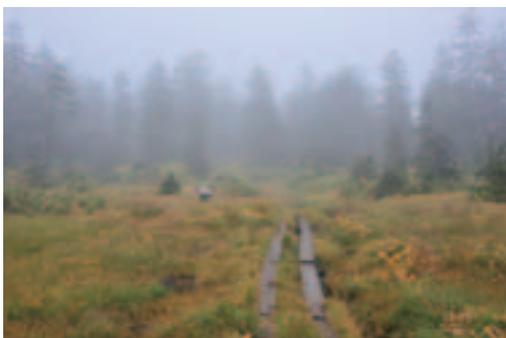
友達と旭岳スキー滑降の時に、必ず立ち寄るところがあります。赤エゾ松の木々に囲まれた湿原、天女ヶ原です。深い森の中で青空を見上げ、「直行さんの世界だ！」と叫ぶのです。坂本直行画伯の『冬の針葉樹林（天女ヶ原にて）』は、まさに此処で描かれたのです。

旭岳温泉がまだ勇駒別（ゆこまんべつ）と呼ばれていた頃、遅い秋の寒い早朝、古ぼけた僕の店の前で、一人のお爺さんが、折りたたみの椅子に座って旭岳をスケッチしていました。温かいコーヒーを一杯持って行くと、カップで両手を暖めながら、「あなた、良いところに住んでいるね！本当に良いところに！」

この方は、ヒマラヤの画文集で有名な藤江幾太郎画伯でした。僕は、その言葉を生涯忘れることはないでしょう。

裾合の真ん中に……中岳温泉ゆ～らゆら～と唄う「裾合のうた」かの有名な愛山溪倶楽部の歌「われらの大雪山」北大山岳部の「山の四季」等、大雪の山々を唄った歌は数々ありますが、僕達の仲間も、時間を掛けてマニアックな曲を沢山書いています。トムラウシをたたえたり、霧の中の高山植物に心揺れたり、甘い山のにおい、重い荷物に喘ぎ、汗の臭いまでして来ます。

天女ヶ原

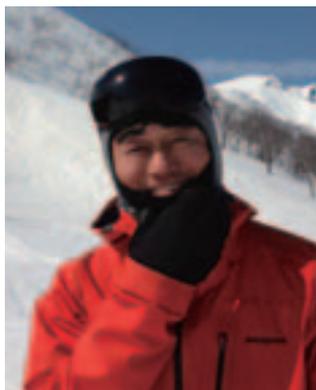


僕達のテーマでもある此の山懐の中で、自然と一体となって、笛を吹き、ギターを弾き、ラッパを鳴らし、机を叩き、手拍子を取り、踊り狂って、時には盃を交わし、語り合い、そして又唄う。これが「大きな森の小さな音楽会」なのです。

随分昔の話ですが、勇駒別川に掛かる橋の上や草むらで、夢遊病者のように試験管を空中にかざして、空気を採集している人がいました。時には取り出した椅子に腰掛けておもむろにヴァイオリンを奏でます。又立ち上がって踊るように瓶を振りかざし…、後で分かったのですが、彼は空中に降る宇宙線を集めていたのです。

このように大雪山には色々な人々が集います。既に絵や画文集、歌、詩、などたくさん出回っていますが、大雪山に対する想いは、形をかえて、世の中にどれほど出ていることでしょう。

## 移住者の体感時間



### 林 拓郎

#### 経歴

1961年 広島県呉市出身。フリーランスライター。大学入学をきっかけに上京。在学中から編集者としてバイク雑誌制作に携わる。20代後半でスノーボードに出会ってからは取材の場を雪山へと変更。以降、スノーボードを主軸に雑誌記者として活動。近年は雪山を歩いて滑る、山スノーボーディングに傾倒。滑る楽しさと自然の豊かさを融合したストーリーの描き出しに情熱を注ぐ。2014年、東川町に移住。



住み慣れた東京を離れ、東川町に移住してきて約1年。20年以上にわたってスキーやスノーボードの雑誌制作をお手伝いしてきましたが、取材の中で巡り会った風景や雪質から、いつかは北海道へという想いを抱いてきました。行くならスキー場の多いニセコか、仕事の利便性を考えて札幌か。家族とも宝くじが当たったら、という夢を思い描くのと同じわくわく感を持って移住先を考えてきました。けれど話し合ううちに、どうせ住むなら北海道らしいところがいい。玄関を出たら大地が広がり、遙か彼方に雪をかぶった山が連なるようなところがいいと、望みは高まる一方。やれ星のきれいなところがいい、美味しい水が飲めるところがいい。もちろん冬には滑りたいのだから、いい山が近くなければいけないと、理想を語り合うのが日課になっていました。

そうして先入観を取り除いて地図を眺めてみれば、北海道の真ん中には大雪山系が横たわっています。しかも旭岳は北海道最高峰。その標高と極限まで乾いた雪を意識し始めたたん、滑り手としての気持ちは一気にこの地へと引き寄せられていきました。おりしも、2013年のモンベル高輪ビルの落成式に出席させていただいた際、松岡東川町長のお話をうかがう機会に恵まれました。そこで町長は「東川町には上水道がありません」とお話しになったのです。大雪の山が雪と雨をたたえ、その水が暮らしの中に沸き上がってくる全戸地下水の町。そのエピソードが後押しして、我が家の移住先は訪れたこともなかった東川町へと絞り込まれました。そうなれば、あとは実行あるのみ。居と住民票を移すまで1年かからなかったのは、仕事する場所を選ばないフリーランスの強みだったかもしれません。果たして移住してみれば、山も水も町も人も、すべてが素晴らしく想像以上でした。何よりも四季を通じて大雪の山々はもちろん、晴れば遠く十勝岳連峰まで見渡せる。夏の爽やかな風に、秋の愁いを含んだ夕焼けの光に、冬の凜と澄み切った朝の気配に、そして早春のまろみを帯びた陽光に浸りながら、この山の美しさに触れるたびに、柔らかな幸福感が胸の内側に沸き上がってきます。

この一年、毎日のように来て良かったねと語り合う生活は、驚くほどの早さで過ぎていきました。北海道の生活は東京に比べれば遙かにゆったりしています。けれど、幸福に満たされた時間は思っているよりもスピーディーです。移住初年度。東川での生活は、今まで味わったことのない速度感で春を迎えました。

# 遥かなる山稜



## 本村勝伯

### 経歴

1973年生まれ。幼少の頃から大雪連峰を望み育つ。スキーに没頭した後、13歳頃に出会ったスノーボードに夢中になる。その後、ハーフパイプのプロ選手として活動を行う傍ら山岳地帯に興味を抱き徐々に活動の場を移す。2003年 FIELD EARTH 設立。スノーシェルを製作後、世界初の立体形状スキーやスノーボードを製作。2011年 株式会社 BAYON CREATIVE 設立。同社 代表取締役 <http://www.field-earth.com>

 BAYON CREATIVE

30代の始め「遥かなる山稜」と題した言葉で綴った写真展を開催した。それまでに、四季折々の大雪の山を撮り溜めておいたフィルム写真と、その頃強く感じていた自然への想いや青き悩みで重ねた言葉の個展は、当時の自分と向き合うには必要だったのかもしれない。様々な想いから生まれる悶々とした気持ちの答えを探しに日々向かった大雪の山々。そして、これから続くであろう人生とを重ねた想いが写真展の題名に込められていたものだった。

幼少の頃から両親と親しんだ山旅からはいつしか離れ、また、再開した頃には冬季登山や山岳滑走など挑戦の場として生きる意味や価値を確認する対象となっていた。多くの経験を重ねる時間は自身の考えをより深く強く形成するには難しくない。実際の体験からのみ実感できる感覚は普段の生活にも生き続けている。当時は人間社会の矛盾や人が自らの行為で自然や生活を脅かし、豊かな気持ちを持ち難くなっていることに強い疑問を抱いていた。

自然環境や人の意識がより良い方向に向かうには、自然に触れ感じ想うことが大切なのではないかと考えるようになる。また、押し付けの知識では本質も伝わらない。頭で考えるのではなく感じること。純粋に楽しむことから生まれる気持ちを願い、自然と繋がることのできる「ひと・もの・こと」を主に出来ることから始めようとの想いから、FIELD EARTHという名前に山のロゴを作り活動を始めた。

20代後半の一人旅。原始ヶ原から愛山溪への山旅は強く心に刻まれている。多くを感じたこの地から伝えるため、ブランドのロゴは実際に歩いた大雪十勝連峰をシルエットにした。また、当時、口ずさんでいた「フィールドアース」の言葉に込められている「多くの方々が人間社会だけではなく、その外側の世界の自然に触れることが少しでもできるのであれば、きっと、全てが良い方向へ向かうはず。」との想いをそのままにブランド名とした。

ある穏やかな秋。その日は美瑛富士避難小屋でのテント泊だった。夕陽色に染まる石垣山の稜線まで登る頃、とても優しい風が背中から吹き抜け、黄金色の草花を揺らしながら遠くオプタテシケ方面へと流れていった。その時、ふっと、「この稜線を流れる優しい風のように人生を歩んでいきたい。」と感じた。挑戦の場として向かっていた山での新たな想い。そんな時に浮かんだ言葉が「遥かなる山稜」だった。

あの頃抱いていた想いは、大雪山の大きな懐で様々な感じ方や価値観を育み自身の生き方や考え方を形成させた。今でも多くの思いを感じさせてくれている大雪連峰は心の中に存在し続けている。

# 東川に移住した笹川良江さんの貴重な資料

祖父、太田龍太郎の大雪山国立公園建白書など

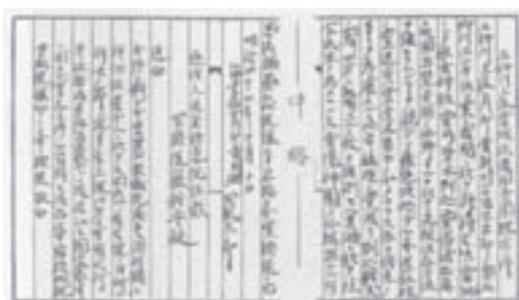
大雪山国立公園に貢献した人として、明治時代に霊山碧水を国立公園として保護すべきと、時の大臣に建白した愛別村長、太田龍太郎を真っ先に挙げる人が多い。太田の直孫、笹川良江さんは、祖父が守った大雪山の麓に暮らしたいと東川町に移住して3年になる。

太田は文久3年、熊本藩士の長男として生まれ、安場保和（後に男爵）に実子の如く育てられた。安場が明治30年に北海道庁長官となったことから太田も北海道庁に勤め、以後、北海道で活躍することになる。笹川さんが大雪山国立公園70周年の年に出版した「大雪山国立公園生みの親、太田龍太郎の生涯」にこれらのことを詳述している。



太田龍太郎（笹川良江所蔵）

後藤新平総裁に送った嘆願書の控え（笹川良江所蔵）



旭川から北見や十勝へ抜ける道路開削、鉄道敷設が国にとって重要なことであると太田は思い立ち、うっそうたる原生林に覆われていた奥地を探検してルートを構想した。霊山碧水と命名したところが現在の層雲峡で、開発目当ての民間資本が入ることを怖れた太田は明治44年、「石狩川上流霊域保護国立公園

経営の件」を友人の逋信大臣兼鉄道院総裁、後藤新平に建白した。国立公園という認識がなかったころで太田には先見の明があった。

鉄道敷設では、後藤の伊豆熱海の静養先で北海道地図に赤ペンで鉄道敷設のポイントを示したところ快諾となり、鉄道院技師らが愛別に特派された。この調査にも太田は同行し、「北海道の奥の院探検」を書き残し、これは命がけの大冒険物語でもある。

笹川さんは、国立公園建白書の控えを保管しているのをはじめ、この国立公園経営のことは本道選出の衆議院議員、浅羽靖とも相談して進めている旨が付記されており、その裏付けとなる浅羽代議士と太田が交わした書簡を祖父の遺品から探し当てた。

後藤大臣に説明した際に使った北海道地図もあり、上質の和紙に、鉄道敷設ルートや村名などを書き入れた、鉄道史資料としてお宝級の資料といえる。奥地を探検したときの写真など、東川町には笹川さんが保管する大雪山国立公園生みの親の資料が多く存在している。

——— 笹川良江さんの談話を聴いて



笹川良江さん（太田龍太郎研究家）  
電話 0166) 73 - 5268  
携帯 090 - 2259 - 3053

# 大雪山文献目録について

## 1、定義

ここに記載する大雪山文献目録（以下、文献目録という）は、大雪山域の文献を収録することを目的とし、以下の基準に従って収集したものである。

## 2、収録地域範囲

ここに記載する文献目録の地域範囲は、原則として十勝連峰、東大雪連峰を含む大雪山国立公園地域とするが、周辺地域を含むこともある。

## 3、収録年代

文献目録は近代以降、すなわち明治維新以降、現代に至るものとする。

## 4、文献目録の分類

収集した文献目録は次のように分類する。

### 1、総記

辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など全般にわたるもので、2以下の分類に属さないものとする。総記は更に次のように分類する。

1-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

1-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 2、研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告書類とする。研究書は更に次のように分類する。

2-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

2-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 3、実録

事実をありのままに記したもので、登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション類を含む。実録は更に次のように分類する。

3-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

3-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 4、人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など、人物を主題としたものとする。人物誌は更に次のように分類する。

4-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

4-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 5、案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子など、初心者から熟達者までそれぞれを対象とした各種の案内ガイドブックを含む。案内書は更に次のように分類する。

5-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

5-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 6、図録類

写真集、画集、図集、画文集（図画が半数以上）、各種図録。イラスト、スケッチ、マンガ類を含む。図録類は更に次のように分類する。

6-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

6-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 7、文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど、文学に関わるものとする。文学書は更に次のように分類する。

7-1、文献の総てが大雪山に関するもの。

7-2、文献の一部が大雪山に関するもの。

### 8、紙誌、部会報

新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物、もしくはそれに準じて刊行されているものとする。私的刊行物、不定期刊行物を含む。通常、紙誌、部会報における大雪山文献は、その一部なので次のように分類する。特集記事、連載、シリーズ物も同様である。

8-1、新聞紙面に大雪山関連の記事が掲載されているもの。

8-2、雑誌上に大雪山関連の記事が掲載されているもの。

8-3、部報、会報、機関誌などに大雪山関連の記事が掲載されているもの。

### 9、その他の文献

上記1～8に分類し難いものはその他の文献とし、次のように分類する。

9-1、大雪山に関する小冊子パンフレット類、絵はがき類（セット物、袋入り）、チラシ類、または複写物で、表題を付けて綴じてあるもの、もしくは袋に入れて表題を付け整理されているものとする。1葉の絵はがきは原則として含まない。

9-2、直接に大雪山文献とはいえないが、間接的に関連づけられるもの。

9-3、大雪山に関する音楽、映像など、CD、DVD類、もしくはそれに準ずるもの。

上記分類は、岩見沢市緑が丘 5-166「大雪山房」清水敏一さんにお問い合わせしました。

## 総記

辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など

### 1-1 総記 (全てが大雪山)

#### 001 ウッドペッカー vol.1

「大雪山自然観察講座」を記録する会 / 大雪山自然観察講座を記録する会 (東川町教育委員会内)  
1984 / 460 -ダ

大雪山自然講座が三年目を迎えた 1983 年、記録を残すことになり、講座の日程、講師の解説の内容、参加者のレポートを 1 冊にまとめた。公民館での夜間講座が 7 回、天人峡地区や旭岳温泉地域などでの野外講座が 4 回開かれた。講師は佐藤文彦、石川信夫、大山明、野呂一夫、小菅正夫、佐藤忠雄。

#### 002 ウッドペッカー vol.2

ウッドペッカー Vol.2 1985 編集委員会 / 大雪山自然観察講座を記録する会 (東川町教育委員会内)  
1985 / 460 -ダ

大雪山自然観察講座の内容が盛りだくさんになり、前年の講師陣に新たに吉田友吉、山本牧、塩谷秀和、佐々木仁、中谷泰治らが加わり、講座の記録もイラスト図解、写真が豊富になり、読み物として面白く、充実した第一級の講座記録集となった。「大雪山文献書誌集」の先駆けともいえる講座の参考文献の紹介と、座談会が巻末にある。

#### 003 ウッドペッカー vol.3

大雪山自然観察講座を記録する会 / 大雪山の自然観察講座を記録する会、東川町、環境省東川自然保護官事務所  
2010 / 460 -ダ

大雪山自然観察講座を始めて 30 年となる節目に記録誌 3 号を発行した。1981 年から始めた講座の日程、内容を全て再録し、講座の思い出スナップのカラー写真、講師の言葉を池永甍次、佐久間弘、勇駒別駐在の初代レンジャー、二橋愛次郎から歴代のレンジャーを紹介している。

#### 004 大雪山 <sup>カムイミンタラ</sup> 一神々の遊ぶ庭を読む

編者 写真文化首都「写真の町」東川町、執筆 清水敏一、西原義弘・写真 大塚友記憲 / 新評論社  
2015 / 291 -シ

大雪山を素材にした物語を通じて、大雪山と東川を全国に発信しようと町が編者となった本。執筆は岩見沢在住の「大雪山房」主宰、清水敏一と東川町企画総務課町史編さん室が担当。天人峡地域に自生するハゴロモホトトギスの命名の由来、登山者が稀だった大正時代に霊峰旭岳登山を八回もしていた東川村の女性のことなど、17 話を盛り込み、カバーやグラビアは大塚友記憲の大雪山の写真を使った。

#### 005 中央高地 登山詳述年表稿

吉田友吉 / 私家版  
1994 / 786 -ヨ

著者が昭和 40 年ごろから書き留めてきた登山史年表を、古希記念に私家版で出し、「同好の方々に誤謬や脱落を指摘してもらい、より正確な資料にしたい」と送った稀少本。

#### 006 ナキウサギの聲が聞きたい

監修 川道武男 / 日本評論社  
1999 / 489 -ナ

副題に「小さな NGO の悪戦苦闘物語」とある通り、「ナキウサギふぁんくらぶ」の誕生のきっかけから全国的な保護運動へ広がっていった活動のエピソード、ナキウサギ裁判の経過、そして後半は、鳴き声の分析、貯食の観察記録、世界のナキウサギの種類など、生態が良く分かる。

### 1-2 総記 (部分が大雪山)

#### 007 郷土資料事典—北海道・観光と旅

編 人文社観光と旅編集部 / -  
1966 / 291 -キ

都道府県別シリーズの北海道編で、各市町村別に紹介している。特に「旭川市と大雪山国立公園」の項があり、周辺市町村も含めて詳しく紹介する。巻頭に概要、巻末に各種資料がある。北海道出身の著名人(現存者)一覧もあり興味を引く。特別付録として「北海道庁管内巡覧記」(明治 28 年)がある。巡覧記は今でいう案内記である。

#### 008 敬山愛林 秀岳荘創業 50 周年記念誌

編集 高澤光雄 / 秀岳荘  
2005 / 786 -ケ

北海道の山の店「秀岳荘」が発行した記念誌「山の仲間と五十年」について、同社に礼状などの書簡が数多く寄せられ、それらに新聞、雑誌での紹介記事を交え、「書信・書評集」として発行した。表題は同社の経営理念標語。

#### 009 決定版 日本の探鳥地 北海道篇

BIRDER 編集部 / 文一総合出版  
2004 / 488 -ニ

北海道篇は道央、道南、道北、道東の 4 地域に分け、60 カ所の探鳥地を選び、観察できる鳥、観察に適した時期、必要な装備などを紹介している。大雪山は黒岳・層雲峡で高山性の鳥からカワガラスなど溪流の鳥が見られる。旭岳は、ロープウェイ終点の姿見駅前のハイマツ帯から周辺の遊歩道を歩くだけで、カヤクグリやノゴマの姿と声をふんだんに楽しめ、時にはあこがれのギンザンマシコを見ることが出来る。他に然別湖の紹介も。

- 010 **国立公園図鑑**  
 監修・環境庁自然保護局国立公園課、編集・財団法人国立公園協会／大蔵省印刷局  
 1995／629－コ  
 名の通り全国の国立公園を写真と解説で紹介する図鑑である。指定年月日、面積、関係都道府県名のほか、景観や動植物の写真、景観の特色、ワンポイント・アドバイスをしている。
- 011 **コンサイス日本山名事典（修正版）**  
 編 徳久球雄／三省堂  
 1979／291－コ  
 コンパクトながら内容が充実している。山名のほか、山群名、峠名、高原名も含めて1万3千項目を収録し、主要な山には概念図や鳥瞰図も挿入している。山名考、地名考の囲み記事があり、参考になる。大雪山は概念図入り、ヌタカムウシュペ（大雪山）、ヌタフカウシベ（石狩岳）からも引くことができる。旭岳の項では、大雪山火山群の主峰であり、北海道の最高峰云々の説明文が続く。熊ヶ岳、荒井岳、松田岳などの小さな山も立項している。
- 012 **再発見 ふるさと北海道**  
 編 北海道新聞社／北海道新聞社  
 1986／291－サ  
 北海道再発見のカラー写真集。山や自然とともに、祭りやイベント、登山など、人との関わりを表現する。大雪山系の写真も素晴らしい。デスカパー・ジャパン、ふるさと再発見、一村一品運動時代の写真集である。巻末に資料編があり、一村一品も掲載している。
- 013 **三省堂日本山名事典**  
 編修 徳久球雄、石井光造、竹内正／三省堂  
 2004／291－サ  
 コンサイス版をさらに充実させ、新しい視点の異なった山名事典として編集している。収録項目数2万5千、ヌタカムウシュペの項はさすがにもうない。山、峠のほか、山脈、高地、高原、丘陵名も立項している。GPSに対応して、経度、緯度も付記してある。巻末の「山名考」には、山名の由来、アイヌ語源の山、十二支の山などの記事がある。全国の富士山名には美瑛富士もある。
- 014 **新日本山岳誌**  
 編著 日本山岳会 ナカニシヤ出版／  
 2005／291－シ  
 日本山岳会が創立百周年記念に出版した。高頭氏が『日本山嶽志』を上梓してから百年目に当たる。約2,000ページ、4,000山を収録した山岳百科事典。大雪山域の山々は、「北見山地」の項に含めて紹介説明している。
- 015 **世界山岳百科事典**  
 編 岩間正夫／山と溪谷社  
 1971／786－セ  
 山名、地名、人名、技術、用具、山岳書、主な山岳会、部会報など、山岳関連のあらゆる項目（アイウエオ順）を、網羅的にまとめた事典。図版、写真も豊富、索引、解説を含めて1千ページに及ぶ。一例を大雪山にあげると、旭岳、大雪山、大雪山国立公園、天人峡、羽衣の滝、勇駒別温泉などをそれぞれ別項で記述している。以降、これ以上の山岳事典の刊行はない。
- 016 **増補 大日本地名辞書 第八巻**  
 吉田東伍／富山房  
 1885／291－ヨ  
 初版は1909年、地名辞典の古典である。新潟県生まれの吉田は独学で歴史地理学者となる。一時期、積丹半島・アメリカの道庁支所の書記をしており、北海道ゆかりの人物でもある。本書の石狩國上川郡の欄に、オプタテシケ山（ケルンニ）、忠別岳（ヌタカムシュペ山）、石狩岳、石狩水源（大雪山）、十勝國河東郡の欄に、然別湖、ウベベサンケ岳、同十勝國上川郡の欄に、十勝岳、石狩岳などの項がある。
- 017 **十勝の森林鉄道**  
 小林實／森林舎  
 2012／656－コ  
 著者は十勝の鉄道史、軌道史を研究する郷土史家。副題に「森とともに生きた幻の鉄道を捜して」とある。新得、音更側の東大雪の風倒木処理などに活躍した森林鉄道音更線などの盛衰史。
- 018 **日本山岳ルーツ大辞典**  
 監修 池田末則、編著 村石利夫／竹書房  
 1997／291－ム  
 山名と所在地、名称の由来、主な山には高山植物や景勝地を紹介している。富士山は別格の山として、巻頭30ページにわたって解説する。都道府県別、アイウエオ順に配列、1万3千山、1千ページ以上の大冊である。旭岳を例に挙げると、「大雪山火山群の主峰、この山は群を抜いて高いので、日の出を拝光できる山ということ」。そして高山植物、姿見の池、天人峡、羽衣の滝、敷島の滝を紹介している。
- 019 **日本三百名山**  
 編集 荒井魏／毎日新聞社  
 1997／291－ニ  
 深田久弥の「日本百名山」や「日本山岳会編日本三百名山」を元に全国の301山を選び、北海道から九州まで10地域に分けて、地域ごとに山名の五十音順に照会している。トップを飾るのが旭岳。所在地は東川町、神々の遊ぶ庭などと紹介している。グラビ

アページにも富士山に次いで2ページめに旭岳の夏姿が載っている。大雪山は他に石狩岳、十勝岳、トムラウシ山など7山。

020 日本山名総覧

武内正 / 白山書房  
1999 / 291 ー タ

「1万8千山の住所録」の副題が付いている。山名を頭にヨミ、標高、所在市町村名を記した文字の羅列で、説明・解説はゼロ。しかしこれがまたきわめて面白い。北から南へ、都道府県別に並べ、北海道は北部、西部、中部、東部に分け、大雪山は中部に書いてある。境界の山には複数の市町村名を記載。興味深いのは各種の分類表で、北海道の標高順では上位を大雪山系が独占しているのは当然としても、全道市町村別山数順位では、上川町が60山で1位、東川町は17山で23位。ちなみに旭岳は全国に7山あり、最高峰は北アルプスの旭岳(富山県)だが、三角点のある最高峰は大雪山旭岳である。

021 日本地名大辞典・北海道

編 渡辺光、中野尊正、山口恵一郎、式正英 / 朝倉書店  
1974 / 291 ー ニ

収録した地名は、行政地、自然(山、湖沼、河川など)、集落、交通経済(道路、峠、鉱山など)観光地、歴史地を含めて総項目1万3千。50音順なので大雪山関連は各所にたくさん立項している。

022 日本地名大百科

編 秋庭隆 / 小学館  
1996 / 291 ー ニ

地名で引く百科事典というべき本で、挿入の写真、挿絵、地図はオールカラー。都道府県名、市町村名、山、高原、滝、史跡名勝など、あらゆる地名、名称をアイウエオ順に引くことができる。一例をあげると、「旭岳」「旭岳温泉」「大雪山」(写真と鳥瞰図で大きく説明)「天人峡」(羽衣の滝の写真あり)、「東川町」「羽衣の滝」(桂月命名とある)など、それぞれ別に立項しており、見て楽しく、使って便利な事典。

023 日本の山(山溪カラー名鑑)

山と溪谷社 / 山と溪谷社  
1981 / 291 ー ニ

全国の山岳を紹介する約600ページの分厚い名鑑。大雪山関係は、美瑛町水沢ダムから写した大雪山連峰遠望を皮切りに旭岳、トムラウシ山、十勝岳など22ページにわたって前田真三、白旗史朗、市根井孝悦らの写真で紹介している。

024 日本の山

山と溪谷社 / 山と溪谷社  
1969 / 291 ー ニ

全国の山岳、高原、滝、溪流などをカラー写真と解説で紹介し、造山運動など山の成りたち、山の鳥、野生動物、近代登山の歴史、伊藤秀五郎の寄稿「北の山」余禄など、盛りだくさんの図鑑。大雪山の写真は志賀芳彦、白旗史朗らが担当。成松岳人撮影の「羽衣の滝」が美しい。

025 日本動物大百科

川道武男 / 平凡社  
1996 / 482 ー カ

全11巻の1巻。エゾナキウサギ、エゾキウサギ、エゾリス、エゾシマリス、エゾモモンガ、エゾタヌキ、オコジョ、エゾクロテン、ヒグマなど北海道全域に生息している。エゾナキウサギの項の写真に「大雪山はわがすまい」として、緑岳の岩場での「瞑想」ポーズを使っている。

026 日本野鳥紀行

蒲谷鶴彦 / 小学館  
1998 / 488 ー カ

野鳥の鳴き声CD付き。大雪山の野鳥と鳴き声はミソサザイ「ピイツィッピュルル」、ノゴマ「チュイーチュチュチュ」、ギンザンマシコ「ピーピーピュルピュル」、ルリビタキ「ピッヒューロヒューロ」。キタナキウサギの紹介も。

027 復刻版 日本山嶽志

編著 高頭式 / 野島出版  
1970 / 291 ー ニ

高頭は越後(新潟県)の資産家、日本山岳会創立者の一人で第2代会長。『日本山嶽志』を編さん、1906年に博文館から発行しており、本書はその復刻版。彼が精魂を傾けた大著で、1,400ページ、収録した山岳は2千座を超える。大雪山は未知の山域であり、「十勝火山群」の項に、石狩嶽(別称・ヌタプカフシベ)とオプタテシケ(別称・男嶽女嶽)があるだけで、いずれも登路不詳とある。本書には日本山岳会編「越後の旦那様」(高頭仁兵衛小伝)が別添されている。

028 北大山岳館 蔵書ガイド

編 北大山岳館運営委員会 / 北大山岳館運営委員会  
2010 / 019 ー ホ

北大山岳館は道内一の山岳書を収蔵する。稀少、貴重な文献も多い。本書はそのなかから選んで、書影と著者略歴、内容を解説したもので、小泉秀雄『大雪山 登山法及登山案内』も収録、関連蔵書も紹介している。ほかにも大雪山関連の蔵書がある。

## 029 北海道 集落地名地理

栃木義正 / 私家版  
1992 / 291 - ト

「5万分の1地形図」から集落地名の起源や由来を、山や川、植物、動物、歴史など、16章に分類し解説している。例えば索引から「大雪通」を引くと、山の名の節にあり、「旭川市北東部、もと永山通、東方に大雪山連峰を見る」とある。「ノカナン」は川の大小・沢の節にあり、「東川町南東部、忠別川右岸。ノカン・ナイ=小さい沢の意か」。同意の集落は、「ヌカナン」(幌延町)、「野花南町」(芦別市)にもあることが分かる。

## 030 北海道地名解

磯部精一 / 富貴堂書房  
1918 / 291 - イ

著者は旭岳ふもとの「姿見の池」の命名者として知られる旧上川中学(北海道旭川東高校)の教師。アイヌ語も研究したことから、主にアイヌ語に由来する地名を解説している。ちなみに大雪山には、「たいせつ」のふりがなを付け、アイヌ語の山名「ヌタツカム、ウシュベ」を「頬(ほほ)の山の義、山頂が禿(は)げて、草木なきこと、恰(あた)かも頬の上部に鬚(ひげ)なきに譬(たと)へたるなり」と解釈している。

## 031 北海道地名誌

編著 NHK 北海道本部 / 北海道教育評論社  
1975 / 291 - ホ

地方別、市町村別、項目別の地名事典である。例を東川町に挙げると、上川地方の部にあり、まず町名の説明に始まる。そして「山岳・高原・岩壁」には旭岳、北鎮岳、沼の平、七福岩など、「河川・沢・峡谷・滝・湖沼」は北二線川、忠別川、ピウケナイ沢、天人峡、羽衣の滝、夫婦沼など、「温泉」は天人峡温泉、勇駒別温泉、「字名・町区名」に阿波団体、北忠別、光和、ノカナンなどなど、細かく立項し、地名の由来や位置を説明している。境界の山や川などは、複数市町村に記載される。市町村別に見るには、きわめて便利な事典である。

## 032 北海道の地名索引

栃木義正 / 北海道教育新報社  
1980 / 291 - ト

1973年時点の国土地理院発行「5万分の1地形図」にある北海道272枚から収録した地名索引である。当時、2万5千分の1はまだ発行されていなかった。地形図に載っている全ての地名を、自然地名と集落地名に分けてアイウエオ順に並べ、地形図名とその位置を示している。自然地名とは山、岳、川、沢、沼、池、湖、峠、岬など。「羽衣の滝」を引くと天人峡だけでなく、中頓別にも同名の滝があることが分かる。なんと「丸山」は56山もある。「豊里」という集落も全道に15か所ある。

## 033 北海道まちづくり100選

編 北海道、北海道新聞社、NHK札幌放送局 / 北海道まちづくり100選実行委員会  
1989 / 318 - ホ

大雪山国立公園地域では9地域を紹介している。富良野市「麓郷の森」、上川町「エスポワールの鐘」、東川町「写真の町の氷彫刻のあるまち並み」、美瑛町「千代田公園」「拓真館」「美馬牛小学校」、上富良野町「日の出公園とラベンダー園」、士幌町「馬鈴薯コンビナート」、上士幌町「熱気球フェスティバル」、鹿追町「然別湖のイグルー村」、新得町「新得山スキー場のフラワーガーデン」。

## 034 北海道野鳥観察地ガイド

大橋弘一 / 北海道新聞社  
2010 / 488 - オ

表紙に「道内野鳥観察の主要スポット74カ所が詳細マップ+豊富な写真で丸わかり!」とうたっている。第2章「道北」で大雪山旭岳、黒岳、浮島峠をとりあげ、旭岳は「最も手軽に高山性の鳥を満喫できる山」で、喉元に赤い丸が付いたノゴマをはじめノビタキ、ホシガラス、鈴の音のようなさえずりのカヤクグリを紹介している。

## 035 野鳥の羽ハンドブック

高田勝、叶内拓哉 / 文一総合出版  
2008 / 488 - タ

大雪山に生息する野鳥も載っている。運が良ければ羽を拾う事もあるだろう。家に持ち帰るには?持ち帰った後?羽が汚れていたら?整理方法、収納する時、鳥を丸ごと拾った時は?などの疑問に答える。

## 036 山 生きている大地

編 相賀徹夫 / 小学館  
1978 / 454 - タ

小学館の学習百科図鑑の1冊で、世界の山を科学的、登山的な視点から分かりやすく解説している。大雪山は美しい山の代表例として、旭岳の写真を挙げて解説している。ほかに火山、山の気象、山の生物、登山、山の怪異などの章がある。

## 037 吉田友吉の嵐山百科

吉田友吉 / 旭川旭山ビジターセンター  
2004 / 291 - ヨ

著者は上川町出身で、旭川営林局に長く勤め、旭川市の嵐山にある「北邦野草園」の造成を手掛けた。嵐山は勿論、大雪山に精通していた。北邦野草園長のころに講演や寄稿が多く、その際の詳細なメモを元に百科事典編集に取り組み「アイヌ」から「ワラビ」まで約1,000項目を解説している。

## 研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告

### 2-1 研究書（全てが大雪山）

- 038 **ROS 利用者の多様性に応じた自然公園管理のあり方に関する調査研究報告書（その2）**  
代表 山口和男 / -  
2002 / 629 -ヤ  
ROS手法による大雪山国立公園管理計画の立案—という副題がある。報告書は、ROSの考え方に基づいて、大雪山国立公園の管理計画をまとめたもの。1998年に発表した『ROSに関する報告書（その1）』の続編にあたる。
- 039 **ROS ~新たな自然公園管理に向けて~**  
代表 庄子康 / 山岳レクリエーション管理研究会  
2005 / 629 -  
大雪山国立公園を「原生、自然、準自然、準整備、整備」の5つのゾーンに区分して、自然公園としての理想的な利用と管理について考察した報告書。大学の教授や研究者ら6氏が研究会を作り、大雪山のし尿問題とトイレ、湿地帯の木道などを根底から考え、ゾーンによって考え方が異なることを提起している。
- 040 **旭岳**  
北海道地下資源調査所 / 北海道開発庁  
1968 / 455 -ホ  
旭岳の5万分の1地質図幅と説明書。旭岳、忠別岳、トムラウシ山、白雲岳などを包含する山岳地帯の地質調査のまとめ。地層と岩石、黄金ヶ原のカーン、トムラウシの多角形土、流土階段、雪田雪蝕地形、天人峽や勇駒別温泉の湧出口と泉温などを調査した。
- 041 **大雪山**  
北海道地下資源調査所 / 北海道開発庁  
1966 / 455 -ホ  
北海道総合開発の一環として、地下資源開発の基本調査であり、5万分の1地質図幅と説明文から成る。大雪山の地層と岩石、火山の発達史、鉱床、温泉などについて3年がかりの野外調査をまとめた。
- 042 **大雪山（特別調査報告書）**  
編 北海道教育委員会 / 北海道文化財保護協会  
1965 / 402 -ダ  
1984年7月6日から12日まで実施された大雪山の動植物、昆虫、地質などの学術調査報告書である。総隊長は最高齢82歳の武田久吉をはじめ学者、専門家、それに協力員として営林局、北海道庁、地域町の関

係者、北大探検部員、北大山岳部員、報道各社など、参加者は延べ80人に及ぶ。

### 043 大雪山昆虫誌

保田信紀 / 北海道自然史研究会  
2014 / 486 -ヤ

昆虫の研究者らが大雪山で発見し、記録した昆虫をすべて書き留めた労作。著者は黒岳、白雲岳などを中心に大雪山に800回以上登った昆虫研究家で、羽が退化したダイセツタカネフキバツタなど新種発見も多い。

### 044 北海道 地図で読む百年

編 平岡昭利 / 古今書院  
2001 / 291 -ホ

全道の主要27地域について、地図を提示しながら紹介している。「開発志向保全志向の国立公園へ—大雪山国立公園」の項で、層雲峡地区、旭岳温泉地区、十勝三股地区について、旧新の5万分の1地形図を対比しながら説明している。旭岳ロープウェイは古い硫黄採掘索道がそのまま活用されたことがよく分かる。筆者は北海道教育大学・武田泉。

### 2-2 研究書（部分が大雪山）

#### 045 一等三角点のすべて

編 多摩雪雄 / 新ハイキング社  
1986 / 512 -イ

登山者にはなじみの深い三角点について、目的や歴史、種類を詳しく解説している。一等から四等まであり、都道府県別では北海道が断然多く、一等三角点は224点、少ないのは大阪府でわずか4点しかない。大雪山系では、瓊多窟（ヌタック、旭岳）、富良牛山（トムラウシ山）、神女徳岳（カメットク岳、富良野岳）、無類山（武利岳）、音更山、烏辺珊山（ウペパサンケ山）がある。点名と山名の違いからも、まだ山の名も定まっていない頃を物語る。一等三角点の標石は重量が90kg、二等と三等の三角点標石は64kgもあり、道なき道を人力で担ぎ上げたのだから驚くほかはない。一等三角点研究会は、一等三角点百名山を選定した。

#### 046 蝦夷古地図物語

梅木通徳 / 北海道新聞社  
1974 / 291 -ウ

著者は古地図の収集家、研究者である。近世以降の古地図を図示しながら歴史的に解説する。まだあいまいな北海道の形を見るだけでも大いに興味をそそる。大雪山のあたりもただ山の形を描いているだけだ。伊能忠敬、高橋景保、間宮林蔵、松浦武二郎らの作図力の高さに著者は驚嘆している。

- 047 **北の火山**  
石川俊夫 / 楡書房  
1956 / 453 - イ  
全道各地の火山について写真と図で説明する。大雪山系は「層雲峡と天人峡」「大雪山」「然別火山群」「十勝岳」である。「噴火と災害」では、1926年の十勝岳噴火の大惨事を記している。
- 048 **自然景観の成り立ちを探る**  
編 小泉武栄、赤坂憲雄 / 玉川大学出版部  
2013 / 450 - シ  
自然地理学者と民俗学者の編者二人の対談。七人の学者がそれぞれの研究分野から自然を眺める。一般向きに書かれていて分かりやすい。大雪山関連は少ないが、「風穴を探る」(清水長正)は、東大雪西クマネシリ岳山中の風穴の紹介で、「十四の沢永久凍土」は上士幌町指定天然記念物。
- 049 **森林をみる心**  
編著 四手井綱英、林知己夫 / 共立出版  
1984 / 650 - シ  
「森林と分化」国際シンポジウムからの報告として1冊にまとめたもので、第5章「コタンの森から」は鈴木紘一(旭川)執筆、大雪山の森林も含めた論稿がある。
- 050 **十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書**  
財団法人日本自然保護協会 / 財団法人日本自然保護協会  
1982 / 462 - ト  
環境省は、人の活動や開発で影響を受けていない地域を自然環境保全法に基づいて保護、観察、調査、研究している。調査した保全地域は、大雪山国立公園南端の原生林的景観が濃い部分で、ヌブントムラウシ川とトムラウシ川の合流点、沼ノ原山、六ッ沼山の三点を結ぶ三角形に囲まれた地域。地形・地質・土壌、植物、動物について調査した。
- 051 **登山道の保全と管理(自然公園シリーズ 1)**  
渡辺悌二 / 古今書院  
2008 / 629 - ワ  
登山道荒廃の現状と登山道の維持管理に関する最新の成果をまとめた。登山道問題の背景と課題をはじめ、各種の調査・研究手法、維持管理のための工法、新しい維持管理の考え方とその実践などを解説する。写真は黒岳石室付近のガリー浸食、白雲岳避難小屋附近の深さ1.5mを超える浸食、ボランティアによる大雪山系の木道設置作業など、大雪山で撮ったものを多く引用している。
- 052 **日本の自然・北海道**  
編 小疇尚、福田正己、石城謙吉、酒井昭、佐久間敏雄、菊池勝弘 / 岩波書店  
1994 / 450 - チ  
地域別全8巻のうちの第1巻である。大雪山は、「今も生きる永久凍土—大雪山」で、学術的に詳しく説明している。氷河期の生き残り、エゾナキウサギとエゾマメヤナギも解説する。
- 053 **日本の山と高山植物**  
小泉武栄 / 平凡社  
2009 / 454 - コ  
平凡社新書。山域別ではなく現象別に章立てし、大雪山は代表的な山として各所に出てくる。日本アルプスや大雪山に高山植物がたくさんあることは、世界的な視野に立って考えると、大変不思議なことだと著者はいう。氷期、気候、高度、地質、地形、地理などが作用して日本の山を作り上げた。その観点から、山と高山植物の関係を理解して山を楽しむ本。「あなたはなぜ山に登るのですか」と聞き取り調査した結果、気分転換、ストレス解消、健康のため、登頂の達成感、百名山制覇(百名山病患者というらしい)などで優に7割を超えたそうで、著者はもっと自然観察の目を持って登山を楽しんでほしい、という思いをこめている。
- 054 **日本の山はなぜ美しい**  
小泉武栄 / 古今書院  
1993 / 454 - コ  
副題に一山の自然学への招待—とあり、著者が「私の博士論文を随筆風に書き直した」。日本の山の特筆、自然景観の美しさを知ってほしいという思いから、全国の山を歩き、なかでも木曾駒ヶ岳と白馬岳周辺は自然観察ルートマップを挿入して、分かり易く案内している。学術調査の旅、論文作成の苦労話、かかわった人たちのことも加わって興味深い。大雪山では「小泉岳の永久凍土を調べた…小泉岳という山の嘗めと私の名前がよく似ているので、変に思った人もいたようだ」とも書いている。
- 055 **北海道ニ於ケル国立公園候補地調査概要**  
北海道廳拓殖部 / 北海道廳拓殖部  
1931 / 629 - ホ  
序に「内務省ニ於テ本道ノ国立公園候補地トシテ選定セル阿寒、登別、大沼ノ三景勝地」とあり、別項に「大雪山ハ交通機関不備ナリシ爲テ世人に知ラレサリシカ(中略)国立公園候補地タル資質充分ナルト認メラルルヲ以テ前記阿寒、登別、大沼ノ三候補地ニ加ヘテ(中略)概要ヲ附記スル」とある。つまり、大雪山は国の選定から漏れており、道庁が大雪山を付記した。選定経過が分かる歴史的な調査報告書。

056 水と私たち

編集委員 俵浩三、鮫島惇一郎、成瀬廉二、八木健三 / 社団法人北海道自然保護協会  
1989 / 498 -ホ

一般向け自然保護読本の第二弾。3章9話から成る。石狩川を大雪山系の水源まで溯ると、大雪溶結凝灰岩の見事な柱状節理や天人峡の羽衣の滝に行きつくこと。人口密度の高い地域に豊富な雪が降るのは世界中を見渡しても日本の他になく、天然資源の少ない日本だが、雪による水資源だけは比較的豊富なことなどを解説している

057 森と私たち

編集委員 俵浩三、辻井達一 / 社団法人北海道自然保護協会  
1988 / 464 -ホ

道自然保護協会の八木健三会長があとがきに『小学生向きの「自然とわたしたち」、中学生向きの「自然を読む」、高校生向きの「自然を考える」につづく自然保護読本として、社会人を対象とした「森と私たち」を発行する』と書いている。森と樹木について13話。鮫島惇一郎が大雪山の地形、地学的条件の多様性が高山植物群落の多様性につながっているなどと、森のなりたちの章に書いている。

058 山歩きの自然学

小泉武栄 / 山と溪谷社  
1998 / 454 -コ

日本の山50座の謎を解く一という副題がついている。カラー写真もたくさんあり、見開き全面の写真は見ごたえがある。50山のうち北海道の山も多いが、大雪山系では、「永久凍土が広がる北極圏の飛び地—大雪山(旭岳)」「植物の垂直分布を逆転させた風穴—東ヌプカウシ山」がある。

059 山と書物 / 続・山と書物

小林義正 / 築地書館  
1963 / 786 -コ

著者は山岳図書研究者であり収集家である。江戸時代から現代まで、国内外の古書、限定本を収集した。本書は写真図版も多く、山岳書誌研究書としては画期的な名著である。ただ大雪山の本としては、『大雪山 登山法及登山案内』(小泉秀雄)、『大雪山及石狩川上流探険開発史』(河野常吉)のみである。

060 山と私たち

編集委員 今村朋伸、鮫島惇一郎 / 社団法人北海道自然保護協会  
1992 / 462 -ホ

自然保護読本の第3弾「身近な自然」(1990年発行)に続く第4弾が山。勝井義雄が「火山と湖」を書き、大雪山と姿見の池などを解説。高澤光雄「北海道の登山史」、清水敏一「北の山の名著を訪ねて」、村上啓司「北

海道の山の名(アイヌ名を主として)」など13話。

061 山の自然学

小泉武栄 / 岩波書店  
1998 / 454 -コ

岩波新書で、帯に「山歩きはもっともっと楽しめる」とある。カラー口絵、写真、地図、高山植物のカットも適所に挿入されていて親しみやすい。北から南へ特徴的な山について記しているが、大雪山関係では、「氷河時代の植物群—礼文島・東ヌプカウシヌブリ」「火山と永久凍土—大雪山」の項を設けて記述している。

062 山の資料 登山ハンドブックシリーズ6

編 山岳研究会 / ベースボール・マガジン社  
1978 / 786 -サ

近代登山における最初の本「日本風景論」が出版されたのは明治27年で、それからの代表的な登山関係本の紹介と海外の本、さらに、日本と海外の登山史年表、登山クラブをまとめている。ここで紹介している「日本風景論」、大島亮吉の「山—研究と随想」などは東川町も保管している。

063 山を読む

小疇尚 / 岩波書店  
1991 / 454 -コ

著者は登山をよくする自然地理学・地形学の専門家。シリーズ自然景観の読み方全9冊のなかの1冊。日本の山はそれぞれ独特の顔を持っている。鋭いピーク、のしかかる岩壁、切り裂かれた深い谷、なだらかな高原のお花畑、穏やか裏山など、山が見せるさまざまな表情を読んで、山の個性が生み出されてきた由来を考える本。大雪山は永久凍土、構造土などの代表例として説明している。

064 利用者の行動と体験(自然公園シリーズ2)

小林昭裕、愛甲哲也 / 古今書院  
2008 / 629 -コ

国立公園や自然公園の計画、管理において、利用者の行動や意識から問題解決を目指す基本的な考え方、具体的な方法、取り組みについて幅広く紹介している。「山のトイレ問題の研究と解決への取り組み」を愛甲哲也が提起している。主要な研究地が大雪山でもあり、引用例や写真にも大雪山関連が多い。

## 実録

登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション

## 3-1 実録 (全てが大雪山)

065 イトナンリルウ 山情報 大雪山  
2001年 総集編

高木直子、渡辺裕美子、中村直弘、岩本恭子 / 層雲峡ビジターセンター

2001 / 291 -イ

層雲峡ビジターセンターの担当者が実際に山に登って、6月から9月までの「山情報」を分担して手書きで発信してきたものを、総集編としてまとめた。黒岳、お鉢平、旭岳、赤岳、白雲岳、緑岳の順にまとめ、他に登山者に人気の沼ノ原～五色ヶ原コース、高原温泉沼めぐりコースの概要など。現場の状況の一つの記録であり、手書きなのでルート沿いの花や鳥、リスや蛇がほのぼのとしたタッチで描かれ、山を愛するスタッフの人柄がにじみ出ていて、心和む記録集になっている。アイヌ語のイトナンリルウは、高いところを通る道の意味。

## 066 上ホロの空遠く 高橋こずえ追悼の本

畠山豊、神原悦子、沢田睦代、城英利、長瀬久雄、西川陽子 / 旭川勤労者山岳会

1990 / 289 -タ

上ホロカメットク山で1988年11月、雪崩に巻き込まれ亡くなった高橋こずえ(上川町出身)を偲び、58ページすべてが追悼の記。大雪山をくまなく登り、数々の山行でリーダーも務めた登山家・高橋こずえ、仲間に敬愛されていたことが分かる一冊。

## 067 なぜ排除するのか

長縄三郎 / 共同文化社

2003 / 689 -ナ

層雲峡のロープウェイ会社(りんゆう観光)と環境省とのあつれきをまとめたレポート。発端は環境省主導で進められた温泉商店街の再整備事業で、商店街末端の国道寄りに公共駐車場を造成し、ロープウェイ駅舎そばの駐車場を縮小する案が打ち出された。それに対してりんゆう観光が猛反発。ロープウェイ利用客の利便性と、商店街の300%の坂道を高齢者や子供に歩かせるのは酷である、というのである。著者はその経緯をルポし、現状と今後の観光に問題提起している。

## 068 フクロウ

BIRDER編集部 / 文一総合出版

2007 / 488 -フ

アイヌ民族にとってのコタンクルカムイ(村の守り神)であった鳥シマフクロウ、シロフクロウは数を減らしている。大雪山系に生息するシロフクロウはナキウサギを捕食する。生態系を変える人間が食物連鎖を破壊し、守

り神の数を減らしている。(文化交流館)

## 3-2 実録 (部分が大雪山)

## 069 海にも雪があった

井上直一 / 私家版

1992 / 289 -イ

著者は北大で茅誠司、中谷宇吉郎に師事した北大水産学部漁業学科初代教授。潜水探測機「くろしお号」の開発でも知られる。中谷が十勝岳麓で雪を観測していたときは応援者として参加。ニセコの航空機結氷防止研究施設が終戦後、中谷によって農業物理研究所に替わったときはその狩太(現・ニセコ町)支部長を勤め、昭和22年の忠別川洪水被害を調査した時に中谷を補佐して活躍した。「くろしお号」で初潜水した中谷が「海にも雪がある」と言ったことが後にマリンスノーと呼ばれるようになった。井上の自分史ではあるものの、中谷の一面も良く分かる。

## 070 気軽に北の山

百々瀬満 / 文芸社

2001 / 291 -モ

山に登るつど、山行記録を書いてきた著者が450ページ余の分厚い本にした。大雪山は旭岳から当麻岳への日帰り登山、沼の原山往復、赤岳から登って白雲岳で一泊、北鎮岳、桂月岳までの登山記、冬の黒岳など、表題の如く、気軽に登って淡々と書き残している。

## 071 北の溪谷

編 丹征昭 / あうる舎

1974 / 291 -キ

溪谷の沢登り、遡行紀行の名作を集めたアンソロジー。伊藤秀五郎が「北海道の夏の川」で「川によっては、峡谷をなして通過の困難な個所もないわけではない。十勝川の函や、忠別川、日高山脈の中ノ川などはその例である」と書いている。伊藤が遡行困難といった忠別川に挑んだ石橋恭一郎の「忠別川遡行」、天人峡のクウウンナイから入溪し、美しい滝の瀬十三丁を経てトムラウシ山に登った望月達夫の「トムラウシ紀行」など27編。

## 072 北の火の山

小池省二 / 朝日ソノラマ

1995 / 453 -コ

著者は朝日新聞記者で旭川支局長も勤めた。在職中から同紙北海道版に駒ヶ岳、有珠山、十勝岳の噴火などを連載していた。阪神大震災を機に防災への決意を込め、連載に加筆、補正して出版。十勝岳の稿は約200年前の火山群形成から1926年の泥流被害、1988年のクリスマス噴火、観測態勢や防災対策など。

073 続 北の火の山

小池省二 / 朝日ソノラマ  
1998 / 453 - コ

続編で大雪山を取り上げ、旭岳地獄谷の活発な噴気活動、旭岳温泉へ向かう道道沿いの巨大な溶岩「ガマ岩」、天人峡の柱状節理を火山噴火の視点で書いている。他に東大雪の秘境火山「丸山」など。なお、摩周・知床を書いた「続」も別にある。

074 北の森の植物たち

鮫島惇一郎 / 朝日新聞社  
1991 / 470 - サ

植物研究者が北国に住んで、自然の優しさ、壊れやすさ、恐ろしさを、心をこめて語る。エイレンソウ物語で「蟻が種子を運ぶ」ことは研究者ならではの眼力。キバナシヤクナゲの一話で銀杏ヶ原について、「その草原にイワイチョウが群生していること、秋の日にイチョウと同じように黄色やオレンジ色に草原が彩られる」「呼び名には何か夢がある」、その名前を「黄金ヶ原」といつ、だれが、どのようにして変えたのかと、少し怒ってみせる。恩師、館脇操の「汎針広混交林帯」なども1章「緑の島」で書いている。

075 北の山旅

丹征昭 / あうる舎  
1973 / 291 - タ

巻頭の「山と森林の旅」は東大雪のニペツ山行で、山頂からの眺めを「十勝連峰、オプタテシケ、トムラウシ、大雪山と続く山波が心を惹き」と書いている。「その冬の十勝岳」など山紀行と随想21編。カバー挿画は坂本直行。限定千部発行。

076 北の山の栄光と悲劇

滝本幸夫 / 岳書房  
1982 / 291 - タ

北海道の主要な山の初登や遭難の記録。大雪山関係は第五章「中央高地・そこに人間ドラマが…」として安政年間の松田市太郎の石狩川流域探検から北大スキー部、山岳部の大雪山登山などを書き、第六章「吹雪の大雪山に結ぶ心のザイル」で北海道学芸大学函館分校パーティーの旭岳で10人死亡の遭難を詳述。巻末に道内を中心にした登山史(明治元年～昭和56年)年表。

077 草と樹

鮫島惇一郎 / 北海道新聞社  
1980 / 472 - サ

あとがきに、「草と樹への讃歌」として書いたとあるように、植物をいとおしみ、守る優しさが全編からあふれてくる。山野を歩きまわったときの失敗談や人との触れ合いを、草花に託して書いている。花の名前をしつこく尋ねる同伴者に一つ一つ教えながら大雪山を登って行くとき、相手はなかなか

か覚え、ヨツバシオガマを「ヨツバオカシ!」と言ったりする。黒岳石室での怪談話でトイレに行けなくなった人が、とうとうやらかしたことを暴露するワタスゲの一話などに著者の人柄がにじむ。

078 山岳遭難記 1

春日俊吉 / 朋文堂  
1964 / 786 - カ

著者は山岳遭難についての著書が多く、全6冊のうちの第1冊。そのなかの1編「大雪山・三の沼樹間の椿事」は、1953年3月21日、沼の平から愛山溪に向けて滑降中に雪崩が発生、6人死亡、3人重傷、6人負傷という大遭難になってしまった。全6冊のうち大雪山系の遭難記事は本件のみである。

079 自然の博物誌 <山>

式正英 / 日本放送出版協会  
1981 / 786 - シ

山の表情、山のすがた、山の自然と人の3章から構成されている。著者は、「山は心のふるさと」として、山の自然、景観、人との関わり、登山の歴史などの観点から山を語る。「山のお花畑」では大雪山を北アルプス白馬岳、南アルプス北岳とともに、高山植物の宝庫としている。

080 遠い山近い山

望月達夫 / 茗溪堂  
1968 / 786 - モ

本書が北海道の山日記と思えるくらい北海道の山が多い。大雪山では「ウペベサンケヌプリ」と「トムラウシ紀行」の2編がある。トムラウシは北大山の会の橋本誠二らに誘われて、クワウンナイを遡った。1919年、初めて滝の瀬十三丁を遡った小泉秀雄、翌年の大島亮吉のことも書いている。著者はイワナがたくさん釣れたと語っている(1963年)。

081 日本山岳風土記 6 北海道の山々

編集代表 長尾宏也 / 宝文館  
1960 / 291 - ニ

大正時代から昭和30年代初期までに書き残された登山紀行24編を集めた。巻末の宿泊施設一覧にユコマンベツ山の家、仰岳荘、松仙園ヒュッテ、ヤンベタツ造材小屋など今はない施設の名もある。加納一郎の「北海道に於ける積雪期の登山」では、旭岳へ向かうときは美瑛忠別までは「出来れば馬橇(そり)に乗った方がよい」と書いてある。八木橋豊吉の「北海道中央高地から十勝川を下る」は、東川村新井牧場内に暮らす山案内人、高橋浅市とともに天人峡から旭岳、白雲岳、トムラウシ山を縦走して十勝川へ下りて新得まで歩く縦走記(初記載は大正14年の慶応大学山岳部年報「登高行」)。他に大島亮吉の「石狩岳より石狩

川に沿うて」、速水潔の「大雪山讃歌」など。

## 082 北海道自然 100 選紀行

編 朝日新聞北海道支社報道部 / 北海道大学図書刊行会  
1987 / 291 -ホ

朝日新聞の読者の投票に北海道自然 100 選を決めたところ、自薦他薦もあり、にぎやかになった。記者が取材し、1カ所4ページ、うち写真2ページにまとめている。大きな自然、小さな自然、有名無名いろいろ。20の節に分けて4~6カ所を紹介している。大雪山は、「大雪の山沿いに」として、トムラウシ温泉周辺、白樺街道と白金温泉、旭岳温泉・天人峡周辺、層雲峡、十勝三股、然別湖の6カ所を取り上げた。

## 083 北海道探検記

本多勝一 / 集英社  
1980 / 915 -ホ

著者が朝日新聞北海道支社に勤めていた1959年~1962年に、秘境とよばれる所を歩いて旅の記録を紙面や雑誌に発表しており、それを一冊にまとめた集英社文庫。「雪の北海道」の項で白銀温泉や十勝岳噴火口そばの硫黄採掘小屋に泊まった回想があり、その2年半後、十勝岳大爆発で硫黄採掘小屋の作業員16名のうち5名が死亡した。

## 084 北海道登山史年表

高澤光雄 / 北海道出版企画センター  
2012 / 786 -タ

著者のライフワークともいえる登山史研究は、1972年に第1版を発行してから改訂増補を続け、第4版になる。1871年から2012年3月までの登山史年表。

## 085 北海道の自然 100 選

監修 朝日新聞社北海道支社 / 制作・(株)大宣  
不詳 / 291 -ホ

「自然 100 選」のミニ版で、1カ所1ページ、写真と地図を配してコンパクトにまとめたガイドブック。全道を5地域に分け、「大雪・日勝」の地域に大雪山6カ所が含まれている。北海道日東エージェンシー(株)が企画した。

## 086 道草山行ひとり旅

遠藤一郎 / 朝日新聞社  
2000 / 291 -エ

著者は四季を通じて数多くの山に登っている。そのなかの登山記であるが、名の通り単独行が多い。大雪山系のみ挙げると「ヒグマの棲処に行く一表大雪・十勝岳縦走」「化雲岳のヒグマ」「旭岳元旦登頂」「愛山溪倶楽部一大雪山麓の迎春」「イワナ釣り」と滑滝のカウンナイ遊行がある。著者の長男は北大山岳部員であったが、1974年3月、知床で遭難した。

## 087 山は命の母

山本進吾 / 白山書房  
2008 / 291 -ヤ

副題が「夫婦で登った日本三百名山」。深田久弥の百名山に登っている知人に誘われたのが登山のきっかけで、頂上を極めた感動が家族共通の趣味となって三百名山を達成した。三百ともなれば、数々の困難があり、家族の絆の日記のようでもある。大雪山は1998年にトムラウシ山で「素晴らしい花の大群落」、2002年に石狩岳、ニペソツ山で「ナキウサギと初めての出会い」など。

## 人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など

### 4-1 人物誌 (全てが大雪山)

#### 088 層雲峡 大町桂月記念號

大雪山調査会 / 大雪山調査会  
1952 / 910 -オ

大町桂月が大雪山を黒岳から旭岳へ縦走したのは大正10年8月のことで、それから30周年に記念号を編集した。桂月が「中央公論」に発表した「層雲峡より大雪山へ」などによって層雲峡や大雪山が全国的に有名になった。記念号に紀行文を再録、子息、大町文衛が父の登山の時と同じ山案内人、成田嘉助の案内で大雪山に登った思い出を寄稿。彫刻家、加藤顕清、桂月の登山に同行した水姓吉藏らの寄稿、ゆかりの人たちの座談会など。

#### 089 大雪山に生きた男 天野市太郎先生を偲んで

編修 後藤憲太郎 / 高橋順  
1995 / 289 -ア

天野市太郎は戦後まもない1948年に「北海の高峯 大雪山登山案内」を書いており、表題のようにまさに「大雪山に生きた男」でもある。教師、校長として旭川教育界に貢献し、大雪山は庭と言うくらいの経験者で、生徒と共に旭岳から何度も縦走した。三周忌の追悼文集の半分は天野の遺稿で埋め、教え子たちの追悼文には大雪山の思い出が多い。

### 4-2 人物誌 (部分が大雪山)

#### 090 旭川明治屋の百年

示村貞夫 / (株)明治屋  
1986 / 289 -サ

副題に「佐藤音次・門治・正治三代の譜」とあるように、明治屋の創業から三代に亘る人物像を中心にした社史。二代目からは大雪の国立公園指定運動に貢献し、「天人閣」の新築など旧松山温泉から天人峡温泉へと整備、発展させた功労者。国立公園指定のエピソードなどもある。

## 091 悪場を超えて—林和夫追悼—

林和夫追悼集実行委員会 / 林電工(株)  
1984 / 289—ハ

林和夫は北大山岳部で活躍した。愛称「リン」。林電工(株)設立、(株)キャラバンの社長、会長。「キャラバンシューズ」(開発者は佐藤久一郎)は画期的な軽登山靴で、夏山登山者やハイカーに広く愛用された。登山歴も長く1985年、北大山の会のバルンツェ遠征隊総隊長を務め、厳冬期ヒマラヤ7千m級初登頂を果たした。1983年、自動車事故で死去、67歳。遺稿と岳界を中心とする各界からの追悼文をまとめ、420ページの大幅冊。随所に大雪山系の登山もあり、山岳文献としての価値が高い。

## 092 板倉勝宣書簡集

編 安川茂雄 / 山岳展望の会  
1965 / 289—イ

板倉勝宣は北大卒、北海道ゆかりの登山家であり、積雪期登山の先駆者である。1923年1月、立山松尾峠で遭難、25歳で死去。遺稿集『山と雪の日記』が刊行される。1922年1月、大雪山旭岳の積雪期初登頂者。

093 江戸明治の百名山を行く  
—登山の先駆者 松浦武四郎—

渡辺隆 / 北海道出版企画センター  
2007 / 289—マ

著者はアイヌ語地名研究会、日本山書の会、松浦武四郎研究会の会員。「北海道」の名付け親、松浦武四郎の生い立ちから晩年までを書き、大雪山については『丁巳日誌』を読み解いて、忠別川を志比内辺りまで溯り、天人峽や羽衣の滝などは道案内のアイヌから聞いただけで、そこまではやってきていないなどと分析している。

## 094 おもひ出(思ひ出)

編集 湊正雄 / 瀬戸晴子(私家版)  
1940 / 289—セ

上ホロカメットクで雪崩遭難死した北大山岳部員、瀬戸三郎をしのぶ追悼記。母親をはじめ家族、友人、北大関係者らの熱意で約500ページの追悼集になった。

## 095 お雇い外国人—開拓

原田一典 / 鹿島出版会  
1975 / 210—オ

北海道開発の構想のもとにお雇い外国人の業績を描いたものである。ライマンもその一人で、層雲峽にライマン滝の名を残す。1874年6月17日、通訳、助手、人夫数十人をともなって札幌を出発、石狩川をさかのぼって大雪山系を越え、十勝川を下って8月2日、十勝海岸の天津に到着した。彼は地質、鉱物資源調査が目的であったが、単なる調査というよりも、探検あるいは冒険的な場合もあった。

## 096 北の山の夜明け

編 高澤光雄 / 日本山書の会  
2002 / 786—タ

日本山書の会の40周年記念に出版された。10周年の「北の山と人」、30周年の「北の山と本」に続く3冊め。明治以前の蝦夷地探検開拓史年表が慶長(1604年)から始まっている。渡辺隆の「蝦夷地山名辞書 稿」は186ページにわたってアイヌ語系の山名851など、古文献の研究結果が詰まっている。田中恒寿の「黎明期の北海道山岳文学」は大町桂月、大島亮吉、伊藤秀五郎らの大雪山登山を振り返っている。

## 097 北へ…異色人物伝

北海道新聞社 / 北海道新聞社  
2000 / 291—キ

北海道新聞日曜版1・2面に連載した50人を収録して1冊にまとめた。古今東西、各界異色の人物たちの、北海道に関わる知られざる一面を描いている。そのなかの一人に、大雪山を探究した小泉秀雄を取り上げている。

## 098 自然を読む

社団法人北海道自然保護協会 / 社団法人北海道自然保護協会  
1986 / 462—ホ

風景の生い立ち、動物たちの信号、植物の語るものなどの5章を依浩三、村野紀雄、辻井達一、藤田郁男が分担執筆した。大雪山、阿寒などの国立公園の主要な骨組みは火山であり、一見何でもないような石ころも良く調べると火山の生い立ちを知る情報が隠されていることを物理学者、寺田眞彦の随筆を紹介しながら解説。十勝岳で雪の結晶を研究した中谷宇吉郎の「雪は天から送られた手紙である」を紹介しながら、良く見て、自然から学ぶ大切さを教えている。

## 099 秀岳荘創業50周年記念「山の素描」の執筆者たち

高澤光雄 / 私家版  
2005 / 786—シ

1955年創業の「金井テント製作所」を坂本直行の命名で「秀岳荘」と改め、1962年に店のPR誌「山の素描」を創刊、1976年の45号まで続けた。15年間に執筆者が185人。その中から加納一郎、犬飼哲夫、深田久弥、伊藤秀五郎ら25名の人物像紹介と、全巻の総目録。

## 100 瀬戸君 高田君 追悼録

編修 湊正雄 / 有馬洋  
1939 / 289—セ

昭和13年12月27日、北大山岳部9名が上ホロカメットクで雪崩に遭い、部員二人が死亡。瀬戸三郎、高田徳の二人の霊に捧げる追悼録。登山歴や書簡、日記などを紹

- 介し、恩師、友人、家族らの寄稿、雪崩現場の考察など。
- 101 **登山の先駆者たち**  
熊原政男 / 校倉書房  
1963 / 786 ーク  
著者のライフワーク、日本登山史研究の一環となる本。北海道では松浦武四郎を取り上げ、石狩岳、蝦夷富士、豊似岳登山について記述している。石狩岳、羊蹄山ともども、今ではフィクションとされている。
- 102 **中谷宇吉郎ゆかりの地**  
編修 口野哲夫 / 中谷宇吉郎雪の科学館友の会  
2000 / 291 ーナ  
中谷博士のゆかりの地について、20 人余が執筆した。中谷らが雪の映画を撮影した勇駒別温泉（現・旭岳温泉）の「仰岳荘」や、中谷の薫陶を受けた吉田六郎が雪の結晶の撮影拠点にしていた「白雲荘」など。
- 103 **中谷宇吉郎ゆかりの人**  
中谷宇吉郎雪の科学館友の会 / 中谷宇吉郎雪の科学館友の会  
2009 / 289 ーナ  
「中谷宇吉郎雪の科学館」が開設してから3年後に「友の会」が発足、会の10周年記念にゆかりの人を編集、発行した。幼友達から晩年の交流まで72人。
- 104 **日本の岳人たち**  
斎藤一男 / 岩峰社出版部  
2000 / 786 ーサ  
著者の知識と経験から得た登山家伝と言うべき本。「源流の山と人」の章では、川をさかのぼる初期の探険的登山を述べており、石狩川の節では松田市太郎、小泉秀雄、大町桂月らとあるが、そのほか間宮林蔵、近藤重蔵、最上徳内、松田伝十郎、松浦武四郎、ライマン、松本十郎、松原岩五郎、成田嘉助、大島亮吉の名が見える。
- 105 **百霊峰巡礼 第二集**  
立松和平 / 東京新聞出版局  
2008 / 915 ータ  
月刊誌「岳人」に連載した作家、立松和平の霊峰登山記。第二集は26番めから50番めまでの紹介で、大雪山（神々の遊ぶ庭）は34番めの登頂。立松が妻美千絵と共に上川町のガイド、佐藤文彦らの案内で初夏の黒岳に登った。姿を隠している大雪山の熊が本当の熊で、知床の観光熊とは違う、という佐藤の説明に、知床とゆかりの深い立松が少々反発を覚えながらも、アイヌ語でカムイミンタラ、神々の遊ぶ庭は自然が良く保たれていると書いている。
- 106 **復元展示 北大理学部教授室 N123 中谷宇吉郎研究室**  
松枝大治、山崎敏晴 / 北海道大学総合博物館  
2004 / 289 ーナ  
中谷宇吉郎は大雪山などで雪結晶の観察に取り組んだ雪の科学者。中谷が使っていた北大理学部本館北棟のN 123 教授室を復元展示した際の展示目録などを112 ページに収めた。教授室や研究成果をカラー写真と共に紹介、教授室所蔵の文献目録と雪結晶の写真目録、略年譜、著書目録などを収録した。CD 版もある。
- 107 **北大百年の百人**  
編集 北海タイムス社 / 北海タイムス社  
1976 / 281 ーホ  
1人2ページ、写真入りでまとめてあり、北大出身者すなわち北海道の人物伝として活用できる本である。特に山や自然、大雪山に関係する人物を挙げておくと宮部金吾、志賀重昂、大野精七、中谷宇吉郎、館脇 操、坂本直行、石川俊夫、三浦雄一郎らである。
- 108 **山の思想史**  
三田博雄 / 岩波書店  
1973 / 786 ーミ  
岩波新書の1冊である。著者は登山思想に影響を与えた人物を論述する。北海道ゆかりの志賀重昂もその1人として取り上げ、代表作『日本風景論』には「ヌタプカウシペ 石狩国石狩河の源」「オプタテシケ 十勝、石狩の境界」などのほか、全国の山の記述がある。著者によれば志賀は札幌農学校在学中も、空知石狩近辺を歩いたくらいで、ほとんど足跡を残していない。登山技術も含めて、大半は文献による記述であると断じている。
- 109 **雪と氷の科学者 中谷宇吉郎**  
東 晃 / 北海道大学図書刊行会  
1997 / 289 ーナ  
著者は宇吉郎門下生で、北大中谷研究室の最後の助教授。宇吉郎が大雪山で雪の結晶の観察を続けたこと、勇駒別温泉「仰岳荘」で雪の映画を撮ったこと、忠別川の洪水調査に取り組んだことなど、物理学者としての宇吉郎の生涯を掘り下げている。

## 案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子、案内ガイドブックなど

## 5-1 案内書 (全てが大雪山)

## 110 歩こう！大雪山・旭岳の自然

東川エコツーリズム推進協議会 / 東川エコツーリズム推進協議会  
2014 / 291 -ア

旭岳温泉、姿見の池周辺などを紹介するポケットサイズ(タテ約19.5cm、ヨコ10cm)のガイドブック。温泉周辺の探勝路マップ、クロスカントリーコースマップ、高山植物の写真紹介、野鳥を紹介するイラスト、エゾモモンガやナキウサギの動物紹介写真、山容の写真など、掌に乗るサイズながら情報が豊富に入っている。

## 111 国立公園大雪山

不詳 / 不詳  
不詳 / 291 -コ

四つ折りにするとタテ18.5cm、ヨコ11.5cmになる登山案内、宿泊案内パンフレット。勇駒別温泉(現・旭岳温泉)は林務署の「仰岳荘」と営林署の「白雲荘」があり、共に一泊150円。

## 112 KONOHA

吉田友吉 / グランドホテル大雪  
不詳 / 291 -コ

ホテルが発行した季刊紙のダイジェスト版。山のものしり博士、吉田友吉が語り部となって山中の露天風呂や姿見の池の深さを測ったエピソードなど、旭岳温泉周辺の魅力を紹介している。

## 113 層雲峡案内一附大雪山登山案内

塩谷忠 / 大雪山調査会  
1932 / 291 -ソ

層雲峡と大雪山を、折りたたみ横長の鳥瞰図にしている。正面に層雲閣が大きく座っているのも、いかにも大雪山調査会の出版物らしい。案内文には国立公園候補地とあり、大雪山、層雲峡の説明とともに、アクセス、温泉の効能や宿泊料、案内料なども記している。大町桂月の漢詩、与謝野鉄幹、晶子夫妻、馬場孤蝶の歌も載せている。

## 114 大雪山(エアリアマップ山と高原地図41)

旭川・層雲峡・東大雪・十勝連峰)

秋元筈男 / 昭文社  
1978 / 291 -ア

地図の昭文社が水に強いFP紙で地図をつくり、表面は大雪山国立公園とその周辺市町村、登山路などを入れた大判地図。裏面は「大雪山、トムラウシ、石狩岳」「十勝連峰」「ニペソツ山」の三域に分けた登山路地図。折

りたたむとタテ18cm、ヨコ10cm。ほぼ同じサイズの48ページの案内書には、大雪山の魅力、勇駒別温泉(現・旭岳温泉)、天人峡温泉などを紹介している。

## 115 大雪山

編集 小原弘也 / 旭川市役所  
1952 / 291 -ダ

写真と詩人・岩本雷鳥の詩文で見る観光案内書。冬季オリンピックを大雪山で、という夢の鳥瞰図があり、裏表紙に川上ユナサライヌの紹介がある。

## 116 大雪山国立公園 昭和九年版

札幌鐵道局 / 札幌鐵道局  
1934 / 291 -サ

昭和9年6月20日の発行。はしがきに「大雪山を中心とする一帯は、今年七月国立公園に指定されることになっている」とあるので、国立公園指定直前に印刷された非売品ガイドブック。旭岳へは松山温泉(現・天人峡温泉)から登る。勇駒別温泉(現・旭岳温泉)はまだ、載っていない。松山温泉の宿泊料一泊二食(握弁当付き)1円50銭、自炊(布団付き)一泊70銭。

## 117 大雪山国立公園 林業解説シリーズ16

編集 加納一郎 / 林業解説編集室  
1949 / 650 -ダ

編集・発行は加納一郎、筆者は農林省林業試験場札幌支場長、原田泰。「昭和9年12月に国立公園に指定されただけで今日までまだ公園としての手入れは何もなされていない」「山奥では過熟の老木が自然にたおれるままになっていて、運び出そうにも道がない」ころの大雪山解説書。

## 118 大雪山国立公園旭岳・天人峡自然観察ガイド

監修 中谷泰治 / 大雪山国立公園旭岳温泉観光協会  
不詳 / 402 -ダ

大雪山が国立公園指定から50年を迎えた1981年に大雪山自然観察講座が始まった。監修した中谷泰治の国立公園勇駒別在任期間は1984年4月から1987年5月までなので、その間に発行されたものか。全34ページ。イラストと分かり易い文章で探勝路、登山道、花、野生動物、森林分布などを解説。編著者名は載っていないが、講座の講師を務めた吉田友吉と思われる。

## 119 大雪山国立公園層雲峡

企画構成 佐藤庫之介 / 上川町・層雲峡観光協会  
1956 / 291 -ダ

層雲峡温泉に日赤分院や蓬莱橋があったころの、写真をふんだんに使ったガイドブック。

- 120 **大雪山国立公園天人峡自然観察ガイド**  
不詳 / 大雪山国立公園天人峡温泉観光協会  
発行年不詳 / 402 - ダ  
大雪山自然観察講座のガイドブック。縦18cm × 横13cmの携行サイズで、巻末のメモ欄を含め全18ページ。表紙に吉田友吉が講師になった観察会の写真。イラストに簡単な説明文を添えた天人峡周辺の自然案内書。
- 121 **大雪山自然ハンドブック**  
編著 成田新太郎 / 自由国民社  
1994 / 450 - ダ  
自由国民社のネーチャーシリーズの大雪山版で、上川町自然科学研究会のメンバーである成田新太郎、保田信紀、佐々木太一、中条良作、佐藤文彦、鈴木敏晴が文とイラストを担当した。大雪山の地形、気象、生物、登山史や保護活動などを書き、最後は「目で見る登山コース」と登山の心得などを詳述している。
- 122 **大雪山登山案内図**  
不詳 / 旭川市大雪調査会  
1966 / 291 - ダ  
タテ16cm、ヨコ8cmの紙の袋に入った地図が2枚。1枚は大雪山登山路略図で、旭川を起点に鉄道、自動車道、馬車道などを引き、松山温泉からの入山と、塩谷温泉（層雲峡温泉）から入山を地図で示している。大雪山中の登山路は山名を入れ、現在と同じコースが多いが勇駒別、愛山溪、高原温泉、銀泉台は記述が無い。忠別溪駅通所、層雲峡駅通所を記入しているので時代考証のヒントにはなる。もう一枚は北鎮岳頂上からの展望図で円周に東西南北を入れ、天塩岳、利尻岳、雌阿寒岳などの見える方向と示している。
- 123 **大雪探検ガイド 動・植物おもしろ図鑑**  
不詳 / 不詳  
不詳 / 291 - ダ  
B4版を折りたたんで9cm × 12.5cmのポケットサイズにした旭岳温泉周辺のイラストマップ。動植物、探勝コースなどを紹介。
- 124 **中部の夏山—大雪山及其附近**  
編者 村上久吉 / 北海道中部保勝協会  
1935 / 291 - チ  
大雪山が国立公園に指定された翌年（昭和10年）に北海道中部保勝協会が非売品で発行した。協会は上川支庁内にあった。登山口としての松山温泉は一泊1円50銭、勇駒別は旭川森林事務所の小屋があり、別棟の温泉は無料などの時代。大雪山とは別扱いで十勝岳、石狩岳の紹介があり、吹上温泉は学生一泊1円50銭、「スキー及被服の乾燥室、写真現像室、娯楽室、電話」の設備がある。
- 125 **十勝岳連峰の自然と野外活動**  
国立大雪青年の家 / (株)須田製版  
1990 / 486 - ト  
国立大雪青年の家（美瑛町白金）は1966年に開設した。本書は職員10人が4年をかけて編集した。風景や動植物のカラー写真が多く、地図、イラスト案内図もあり、自然観察、ハイキング、登山のガイドブック。
- 126 **パークボランティアのための大雪山自然解説マニュアル**  
編集委員長 関口隆嗣 / 大雪山国立公園パークボランティア連絡会  
2009 / 450 - パ  
パークボランティア連絡会創立20周年を機に、大雪山に対する会員の知識を高め、自然環境の保全意識の向上と啓発を目的に発行した。大雪山国立公園の歴史から大雪山の形成、気象、植物、昆虫、鳥類、ほ乳類などを写真、図版を入れて分かり易く解説している。

## 5-2 案内書（部分が大雪山）

- 127 **駅から登れる山**  
編 国鉄山岳連盟 / 出版科学総合研究所  
1983 / 291 - エ  
さすが国鉄らしい企画のガイドブックである。駅からの地図、イラスト、写真、スケッチ、駅のスタンプ、乗車券などを散りばめてあり、楽しく読める。大雪山系では十勝岳、ニペソツ山、ウベペサンケ山がある。
- 128 **上川盆地の自然 巡検テキスト**  
科学教育研究協議会旭川サークル編 / 科学教育研究協議会旭川サークル編  
1974 / 450 - カ  
理科、科学、生物の授業で先生は子どもたちに自然をどのように教えたなら分かり易いのか。旭川市内の小中高の先生が大雪山などを歩き、郷土の自然についてテキストを作った。大雪山は中生代、深い海の底にあった。氷河期を生き抜いた大雪山の植物、火山の熱雲が羽衣の滝をつくったなど、興味深い現地での観察と学び方を約50項目にまとめた。
- 129 **カラー北海道**  
編 栗谷川健一 / 山と溪谷社  
1973 / 291 - カ  
山溪カラーガイドシリーズの1冊で、山や自然を中心に写真と解説で紹介する。大雪山系では、「岩壁の層雲峡」「大雪山の動植物」「大雪連峰」「糠平湖と然別湖」「鳴動する十勝連峰」がある。執筆者は、館脇操、楡金幸三、更科源蔵、石川俊夫、橋本誠二、辻井達一、俵浩三、市原有徳、鮫島惇一郎ら。

## 130 観光北海道じてん

編・田村健太郎、青木妙子、若林里江 / (株) フィック  
1996 / 291 ーカ

旭川の写真家が編集した観光案内ガイドで、「じてん」としているが事典らしくなく、写真、イラスト、地図を配し、おまつりイベントガイド、温泉ガイド、宿泊ガイド、アクセスガイド、全道 212 市町村のワンポイントガイドなど、いろいろな視点から観光の旅を楽しめる。巻末の大雪山国立公園内の山と滝の写真が素晴らしい。秘湯ウォッチング 6 温泉はすべて大雪山国立公園内である。

## 131 観光北海道

編 長谷川喜彦 / 北海道新聞社  
1971 / 291 ーカ

大雪山遠望、富良野盆地からの十勝連峰、層雲峡、天人峡など、見ごたえのある写真が多い。大雪山国立公園の案内では、表大雪、東大雪、十勝連峰、山中の湖や温泉などを案内する。バスの距離と時間、料金まである。天人峡へ旭川から 40 分、バス 1 時間 20 分、340 円。宿泊料は勇駒別温泉 1,700 ~ 3,500 円。層雲閣は 1,500 ~ 10,000 円など。

## 132 北の山・記録と案内

滝本幸夫 / 岳書房  
1983 / 291 ータ

34 山を案内しており、大雪山系は大雪山、北大雪、石狩岳、ニペソツ山、丸山、ウペパサンケ山、クマネシリ山塊、トムラウシ山、十勝連峰の 9 山である。単なるガイドブックではなく、登山の歴史や著者の登山記をまじえてエッセイ風に記述している。巻頭に故深田久弥夫人・志げ子の序がある。

## 133 最新山のガイドー北海道の山と谷 (改訂版)

編著 大内倫文、堀井克之 / 北海道撮影社  
1981 / 291 ーホ

本書の特徴は、一般登山者から経験者まで、幅広くガイドしていることである。それには無雪期、積雪期、バリエーションルート、沢登り、岩登り、スキー、アイゼン、雪氷壁ルートまで、難易度の表示記号をつけ、写真と概念図で案内する。大雪山系には多くのスペースをさいてさまざまなルートを案内している。黒岳沢、忠別川もある。

## 134 週刊続日本百名山

編集人 佐々木正紀 / 朝日新聞社  
2002 / 291 ーシ

全 30 号のうち、23 号で「天塩岳、石狩岳、ニペソツ山」を取り上げ、空撮や花の写真などバラエティーに富んだ写真と解説文。「寄り道情報」として湯元協和温泉、旭川・男山の延命長寿の水、美瑛の美郷不動

尊の名水などの紹介を挟んでいる。

## 135 諸国名山案内 [第 1 巻] 北海道

梅沢俊 / 山と溪谷社  
1989 / 291 ーシ

高山植物などの撮影で知られた著者が 20 コースの登山ガイドを書いた。大雪山は望岳台 - 美瑛岳 - 十勝岳、黒岳 - 旭岳 - 旭岳温泉、沼ノ原 - 表大雪 - 愛山溪温泉、クワンナイ川 - トムラウシ山など 6 コース。登山路と周辺の眺めを豊富な写真と共に分かり易く解説している。

## 136 女性のための百名山

坂倉登喜子 / 山と溪谷社  
1990 / 291 ージ

著者は女性のための山岳会「エーデルワイスクラブ」の会長。選ぶ際には、名山でなくても気軽に歩ける身近な山、花の美しい山、ゆっくり安全に歩けるコースを取り上げたという。コースタイムも女性基準になっている。大雪山は層雲峡から黒岳石室泊、旭岳に縦走して下山のコースを案内する。

## 137 新北海道の民営温泉

小野寺淳子 / 北海道新聞社  
2001 / 291 ーオ

道内の民営温泉からイチ押し 130 湯を厳選、目的別に 6 章に分けて紹介している。湯元湧駒荘 (旭岳温泉)、然別峡かんの温泉、ホロカ温泉、湯元鹿の谷 (幌加温泉)、湯元凌雲閣 (十勝岳温泉)、大雪山白金観光ホテル (白金温泉)、天人閣とホテル敷島荘 (天人峡温泉) など大雪山系の温泉も多数紹介している。

## 138 ステップアップ登山

宮下岳夫 / 北海道新聞社  
2000 / 291 ーミ

副題に「目指せトムラウシ 藻岩山から始める」とあるように、山の初心者向けに、道内 31 の山を紹介しながらアドバイスを満載したガイドブック。著者は日本山岳ガイド連盟技術員。誰と登る、日帰り登山、山小屋に泊まる、テントに泊まる、山で眠れない人へ、登山計画作り、山でのトイレ、よく効く薬など。

## 139 大雪山 北海道山の花図鑑

梅沢俊 / 北海道新聞社  
1996 / 472 ーウ

著者は北海道をはじめ中国、ヒマラヤ方面の野生植物を中心に写真撮影を続けている。大雪山に生育する花の咲く植物とシダ植物 (約 590 点) を収め、初心者向けに花の色別に引く図鑑。ハゴロモホトトギスを紹介している数少ない図鑑。

- 140 **夏山への招待**  
編 後藤茂樹 / (株)河出書房  
1955 / 291 ーコ  
河出書房が新書判 80 ページ、定価 100 円の写真篇をシリーズ化し、夏山の誘いは 6 巻め。沢のぼり、高山植物、山小舎・キャンプなどを解説しながら、北海道の山は大雪山を紹介。雲井ヶ原湿原のミズバショウが咲く池面に愛別岳、永山岳が映るモノクロ写真や姿見の池が印象的。
- 141 **日本 200 名山を登る (上巻)**  
青柳栄次 / 昭文社  
2001 / 291 ー二  
「どこでもアウトドア」シリーズの 200 名山版で、大雪山関係は石狩岳とニペソツ山の二山を紹介。石狩岳は入り組んだ沢と深い谷、切り立ったピラミダルな山頂は表大雪とは違った男性的な山容、ニペソツは道内屈指の鋭峰と紹介。糠平温泉、幌加温泉の紹介などきめ細かな情報を入れてある。
- 142 **日本を登る 百名山 (上巻)**  
青柳栄次 / 昭文社  
2001 / 291 ー二  
「どこでもアウトドア」のロゴを入れたシリーズで、登山地図、標高差グラフ、アクセス、予算、温泉などの情報も入れて、ビジュアルで分かり易い。旭岳は札幌から JR、バス、ロープウエーなどの所要時間に加えて公共交通機関の予算 1 万 4 千円、東京からは旭川空港経由を勧め、バスのサービス特典まで紹介、問い合わせ先が東川町商工観光課。山頂への登り下りだけでは物足りない登山者に間宮岳、中岳温泉分岐のコースも紹介している。大雪山は他にトムラウシ、十勝岳、ニペソツ山。山を知り尽くした佐藤文彦が執筆した。
- 143 **東川の山野草**  
東野勇、米田松栄、滝本堅三郎、横内勇、花本哲行、岡島博 / 東川植物観察の会  
1993 / 472 ーヒ  
副題に「郷(さと)の三味(さんみ)」とあるように、食べられる山野草 24 種、子どもに食べた草 3 種、自生薬草 11 種、町内の毒草 12 種を紹介している。カラー写真は東川カメラクラブの会員が撮った。
- 144 **日本百名山 登山案内**  
川崎吉光 / 山と溪谷社  
1999 / 291 ー二  
深田久弥の百名山を一冊に収録したガイドブック。大雪山は姿見駅から順に姿見の池、旭岳、間宮岳、中岳温泉、裾合平、姿見駅へ進むコースをカラー写真と地図を付けて紹介している。トムラウシは沼ノ原登山口から順に五色ヶ原、化雲岳、ヒサゴ沼、トムラウシ、トムラウシ温泉のコース。十勝岳は望岳台から十勝岳避難小屋、十勝岳、鋸岳、美瑛岳、ポンピ沢、雲ノ平、望岳台のコース。
- 145 **冬山への招待**  
編修 片山修三 / (株)河出書房  
1955 / 786 ーカ  
河出新書写真篇の 33 巻め。冬山登山の計画から用具、技術、気象、遭難対策などを記載。北海道の山は大雪山、十勝岳、利尻岳などを紹介。十勝岳は「二千米級の数座によって構成され、荒けずりの彫刻に似た俊嶺は樹海を抜くことまさに千米、岬々として氷雪に輝く山容は北アルプスにも比較される」とある。
- 146 **北海道安全な登山**  
日下哉 / 北海道新聞社  
2011 / 291 ーク  
高校山岳部などで長年の指導経験を有する著者が安全な登山、山の自然を守る、ルールを守るなど基本的な登山のノウハウを記した。道内百名山の地形図、ルート断面図付き解説もある。「第 VI 章 北海道の山々とその特徴」で大雪山、十勝岳、トムラウシ山を解説している。
- 147 **北海道隠れ湯 28 選**  
エムジーコーポレーション / エムジーコーポレーション  
2006 / 291 ーホ  
大雪山関係ではかんの温泉、然別湖ネイチャーセンター、糠平温泉旅館中村屋、旭岳温泉湯元湧駒荘、層雲峡花ものがたりを紹介。コラムに大雪旭岳源水が載っている。
- 148 **北海道主要山岳登路概況**  
南條康夫 / 北海道山岳會  
1926 / 291 ーホ  
大雪山の項は(ヌタプカムウシペ火山彙)とカッコ書きがあり、旭川から一番列車で美瑛駅に行き、8 里(約 32km)歩いて松山温泉(現・天人峽温泉)で一泊、翌朝 5 時出発して旭岳を目指すと紹介している。他に十勝岳など道内 15 座の登山路。
- 149 **北海道登山口情報 350**  
編者 全国登山口調査会 / 北海道新聞社  
2014 / 291 ーホ  
北海道の登山口を網羅したガイドブック。登山口へのアクセス方法や周辺の駐車場、トイレ、自販機、立ち寄り湯、携帯電話の通話状況などを写真入りで収録している。登山口は、あいうえお順になったいるが大雪山系、十勝連峰でも調べることができる。(文化交流館)

- 150 北海道の山々 新版・空撮登山ガイド 1  
梅沢俊、瀬尾央 / 山と溪谷社  
1995 / 291 ーウ  
全 13 巻のうち第 1 巻が北海道の山。立体的で俯瞰するような空撮写真によって、広大な大雪山を通る登山路であっても分かり易くとらえることができる。道内 10 コースのうち大雪山関係は「旭岳温泉から旭岳、御鉢平、北鎮岳」「十勝岳温泉から富良野岳、十勝岳」など 4 ルートを紹介。
- 151 北海道百名山  
梅沢俊、伊藤健次 / 山と溪谷社  
1993 / 291 ーウ  
標高や三角点にとらわれず、全道各地から著者が選んだ百名山のガイドブックである。案内する大雪山、十勝連峰の山を掲載順に挙げておく。忠別岳、トムラウシ山、白雲岳、小泉岳、武華山、赤岳、北鎮岳、愛別岳、黒岳、旭岳、武利岳、平山、ニセイカウシュペ山、富良野岳、上ホロカメットク山、十勝岳、美瑛岳、東ヌプカウシヌプリ、オプタテシケ山、西クマネシリ岳、ウペベサンケ山、ニベソツ山、ユニ石狩岳、音更山、石狩岳の 25 山である。
- 152 北海道・ファミリー登山  
菅原靖彦 / 北海タイムス社  
1985 / 786 ース  
名の通りファミリーで登山を楽しむためのガイドブック。登山用語、基礎知識から始まり、後半でやさしい山から高山へ、実践登山コースの案内がある。大雪山系では「大雪山赤岳銀泉台コース」「富良野岳、上ホロカメットクへ」「黒岳から北鎮岳、北海岳へ」がある。
- 153 山の自然教室  
小泉武栄 / 岩波書店  
2003 / 454 ーコ  
岩波ジュニア新書。ジュニア向けにやさしく、山の自然観察を楽しむことを願って書かれた。低山の高尾山から始まり、高山の北アルプス白馬岳、南アルプス北岳までを、分かりやすく読み解く。大雪山は事例的に随所に出てくる。著者は大雪山も入れたかったが、紙数の制限で割愛せざるをえなかったという。
- 154 山登りのお役立ちガイド  
監修 北海道山岳連盟 / NTT ドコモ  
2010 / 786 ーヤ  
「登ってみよう、道内 12 の山々」のガイドブック。黒岳、十勝岳、ニセイカウシュッペ山、ニベソツ山など。NTT らしく山に関する連絡先の電話番号をしっかりと入れ、活用すると便利なケータイの GPS 機能、方位磁石アプリなどを紹介している。

## 図録類

写真集、画集、図集、画文集、各種図録など

### 6-1 図録類 (全てが大雪山)

- 155 かわいいナキウサギ  
文・写真・鈴木欣司 写真・長谷川和良 / 大日本図書  
1995 / 489 ース  
十勝岳などで撮影したナキウサギに、子どもが読みやすい物語風説明文を付けた写真絵本。糞(ふん)を食べる習性や、巣穴に葉っぱを蓄えるシーンが四季を通して描かれ、花をくわえたナキウサギの姿が美しい。写真の長谷川和良は北海タイムス旭川報道部カメラマン、北海道報道写真展で協会賞、優秀賞受賞など活躍した。
- 156 きらきら  
文・谷川俊太郎、写真・吉田六郎、企画構成・吉田覚 / アリス館  
2008 / 911 ータ  
写真家、記録映画・科学映画監督、カメラマンとして活躍した吉田六郎が旭岳温泉の雪洞に顕微鏡撮影装置をセットして、画期的な「1 光源 2 色照明法」で雪の結晶を撮り続けた。没後、長男・覚が膨大な写真から選択して、詩人、谷川が詩を書いた美しい雪結晶の写真絵本。
- 157 すがたみのはなたち  
大雪山自然学校 / 大雪山自然学校  
2004 / 472 ース  
姿見の池、鏡池、すり鉢池、満月池を周回するコースに咲く花を 5 月下旬～6 月中旬、6 月中旬～7 月中旬などと洵ごとに紹介している。写真と実際の花を見比べながら山歩きが楽しめることから、ロープウエー駅売店で好評の冊子。旭岳自然保護監視員の活動も紹介している。
- 158 大雪山  
佐藤孝夫 / 私家版  
1988 / 748 ーサ  
「神々の庭から」という副題が付いた写真集。16 年間で大雪山系登山が 65 回、その集大成といえる写真が 54 点。特にトムラウシ山とその周辺が多いのは、著者の好みを表わしているのかも知れない。巻末の写真説明は、小エッセイになっていて、著者の登山の一端をうかがうことができる。
- 159 Freedom 一大雪の動物たち—  
千葉圭介 / 青葙社  
1997 / 748 ーチ  
大雪山の動物写真集。エゾナキウサギ、ヒグマ、キタキツネ、シロフクロウ、シマリス、

エゾシカ、エゾユキウサギ、エゾリス、エゾオコジョ、エゾクロテンの豊かな表情をとらえ、ほのぼのとして、ユーモラスな表情が多い。

160 北海道リスとナキウサギの季節

佐野高太郎 / かもがわ出版  
2006 / 489 - サ

大雪山に生息する代表的な動物エゾリス、ナキウサギなどの生態、行動を四季を通じて撮影した。天敵のクロテン、キタキツネ、オコジョなども活写している。佐野高太郎は英国BBC ワイルドライフ写真賞に入賞しており、この本も全ページに英文も載せている。巻末に市川利美がエゾナキウサギ、川道美枝子がエゾリとシマリスを書いている。

161 雪の結晶

吉田六郎 / 平凡社  
2001 / 748 - ヨ

旭岳温泉の雪洞で吉田六郎が撮影した雪の結晶写真集。ブルー地を背景に結晶が鮮やかだ。切り取ると絵はがきにもなるポストカードブック。

6-2 図録類 (部分が大雪山)

162 アルプスの自然 お花畑

監修 佐竹義輔 / 山と溪谷社刊  
1973 / 432 - サ

お花畑とは「森林限界以上の高山帯に発達する高山植物の草原で、強い日射、はげしい温度変化、強風と積雪のきびしい環境条件の下で、6~9月の短い期間に開花、結実するところ」。大雪山、白馬岳、尾瀬など代表的なお花畑と高山植物を前田真三、市根井孝悦、永田芳雄らのカラー写真で紹介。大雪山は旭岳姿見の池付近のエゾツガザクラの大群落、白雲岳のクモマユキノシタ、エゾコザクラ、北海岳のキバナシオガマ、雲ノ平のイワイチョウの紅葉など14点。大雪山の山旅ガイドを写真家、市根井孝悦が執筆している。

163 画集 北海道の山

北海道新聞社 / 北海道新聞社  
2001 / 720 - ホ

著名な画家33人の60作品を収録しており、大判で北海道の山の画集としては出色のものである。大雪山系は11作品で、画家の名を挙げておくと木田金次郎、高橋北修、吉田清志、相原求一郎、坂本直行、田辺三重松、岩橋英遠、国松登。

164 カムイの森

水越武 / 北海道新聞社  
1996 / 748 - ミ

写真集の帯に「世界の森を撮り続ける写真

家の著者が鋭いカメラアイで捉えた北の森の写真シンフォニー」とあり、カバー写真が「大雪山 美しい雲海が広がった朝」、扉写真も「大雪山 吹雪の中の落日」。写真は79点。大雪山関係は「クワウンナイ川上流の森林」「十勝三股 早朝の樹海」など18点。

165 画文集 北ぐにの花暦

鮫島惇一郎 / 社団法人北方林業会  
2008 / 470 - サ

著者が得意とする植物画110枚に軽妙な短文を添えた花の絵本。それぞれの花に、おふくるや恩師との思い出や、大雪山の山小屋でアルバイトをしていたころの椿事などが秘められている。永山岳で初めて見た、ツンと澄ましたコマクサ、親方先生こと館脇操から描いてきてほしいと頼まれた小泉岳のリシリリンドウ、腹を空かせた人を救出に走った北鎮岳の思い出と重なるイワギキョウ、平ヶ岳へ登るハイマツ帯でヒゲマとらみ合ったときのヨツバシオガマなど、大雪山の花とエピソードが6点。原画は滝川市美術自然史館が収蔵している。

166 北を飛ぶ

朝日新聞北海道支社報道部・編 / 中西出版(株)  
1996 / 291 - キ

カメラマンと記者が空から見て記事にしたシリーズ「北を飛ぶ」。掲載した70編のなかから、山、湖、湿原などの自然を中心に、38編を抜粋して1冊にまとめた本。「神々の遊ぶ庭…大雪山系」「現代の遺跡…士幌高原道路」「あこがれの山…トムラウシ山」がある。

167 切手の中の北海道

北林利仁 / 北海道新聞社  
1995 / 693 - キ

著者は切手を通して、北海道を理解し、郷土を愛する一助になればとの思いで本書を著した。美しいカラー写真で、丁寧にやさしく説明している。大雪山の切手も2銭時代から始まっていて種類も多い。高山植物シリーズ、自然保護シリーズなどを加えると、山の切手もかなりの数になる。

168 雪原の足あと

坂本直行 / 茗溪堂  
1965 / 723 - サ

登山家であり画家である坂本直行の画文集。「アルプ」「北海道の山」「山と高原」「紅」などへの寄稿を中心にまとめている。坂本といえば十勝に繋がり、日高山脈の画が多いが、トムラウシ、石狩岳、十勝連峰、然別湖など大雪山系も入っていて、画と文ともども楽しめる。

- 169 **地図の風景…北海道編Ⅰ道南・道央**  
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明 / (株)そしえて  
1979 / 450 一チ  
そしえて文庫・地図の風景シリーズ全 20 巻のなかの 1 冊。本書は立体空中写真と地図とエッセイで綴る新日本風土記である。口絵に大雪山のステレオ空中写真がある。「男神と女神のパレード…大雪山と十勝岳」は、地図、写真、エッセイによって、その意味を納得させる。
- 170 **地図の風景…北海道編Ⅱ道東・道北**  
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明 / (株)そしえて  
1980 / 450 一チ  
カバー写真は然別湖。「鬱々と深く暗い神々の半円劇場…東大雪」「奥山にひそむ高原・円頂丘群に抱かれた湖…北見富士・雄柏山、然別湖」がある。
- 171 **寅彦と宇吉郎の絵画展**  
中谷宇吉郎雪の科学館 / かが PAP 財団  
2000 / 709 一ト  
中谷宇吉郎の生誕百年記念に、ふるさと加賀市が宇吉郎の恩師、寺田寅彦と宇吉郎の絵画展を開いた。その時の図版と作品解説。宇吉郎は療養のあとは油彩画よりも墨絵を多く描くようになり、大雪山で観測してきた雪の結晶も「雪華図説」「雪華之図」の墨絵になった。
- 172 **日本国立公園 (全4巻)**  
監修 井上靖、写真 森田敏隆 / 毎日新聞社  
1985～1986 / 291 一モ  
本書の特長は B4 判、国立公園の写真集としては最大級の大判であること、見開きの写真は B3 判になる。北から南へ順を追っていて、大雪山国立公園は第 1 巻にある。各巻末に解説、案内記事があり、大雪山とともに日本の国立公園を通観できる。発行後に名称の変更や地域の追加もあり、現在とは一致していない。
- 173 **日本の天然記念物**  
監修 加藤睦奥雄、沼田眞、渡部景隆、畑正憲 / 講談社  
1995 / 462 一ニ  
1,101 ページもの分厚い保存版で、冒頭の 14 ページを特別天然記念物「大雪山」の紹介に充てている。個体としてはウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネヒカゲなど大雪山の代表的なチョウを紹介している。北海道関係は他に、クマガラ、エゾシマフクロウ、オオワシ、オジロワシ、タンチョウ、北海道犬。カバーのカラー写真はコマクサ。
- 174 **日本の山 100**  
川口邦雄 / 講談社  
1984 / 291 一カ  
講談社現代文庫の 1 冊。著者は山岳写真家であり、高山、低山を問わず、独断で百山を選び、写真とスケッチで紹介する。「大雪山／十勝岳」をひとまとめにしている。
- 175 **貼り絵に託した 四季**  
鮫島和子 / エコ・ネットワーク  
2010 / 726 一サ  
貼り絵の作品 56 点。大雪山関係も多く、「夕映えの旭岳」、北海岳で見た「クモイリンドウ」、小泉岳の「リシリリンドウ」、冬の「旭岳」、吹上温泉附近から眺めた「美瑛富士と美瑛岳」、十勝岳旧噴火口からの「峰」、三段山からの「十勝の山々」。色使い、立体感が素晴らしい。
- 176 **power of light**  
中西敏貴 / (株)桜花出版  
2014 / 748 一ナ  
日本の写真文化をファッションやアニメ、音楽と同じように世界に届けたい、その想いからスタートした「日本の写真文化を海外へプロジェクト」。NO1～NO9 まである。NO8 は、大雪山麓の風景をアジアを中心に台湾、香港、中国、韓国、ヨーロッパに向けて制作された。(文化交流館)
- 177 **光の彩**  
中西敏貴 / 青菁社  
2012 / 749 一ナ  
美瑛、富良野の地や大雪山を 20 年以上撮影し続けてきた著者が、真摯に自然と向き合い、光を探し、追いかけて、そして巡り会った「光の彩」をまとめた写真集。
- 178 **百名山の自然学 東日本篇**  
編者 清水長正 / 古今書院  
2002 / 454 一ヒ  
深田久弥の「日本百名山」を自然考察しようという編集方針で、大雪山は高橋伸幸が「日本のツンドラ地域」と解説し、トムラウシは水野一晴が「広大なお花畑の魅力」、十勝岳は岩崎正吾が「おそるべき火山泥流」として紹介している。
- 179 **北海道森林植物 写真図譜 (Ⅰ. 草本篇)**  
監修 舘脇操 編集 中野正彦、吹上芳雄、千廣俊幸 / 北海道林務部  
1954 / 470 一ホ  
北海道の森林計画などを担当する技術職員らに、森林植物分類上の知識を持ってもらうことを狙いにした携行本。天人峡に自生する花「ハゴロモホトトギス」の命名者、舘脇操が監修、標本を採集した吹上芳雄、

千廣俊幸が編集している。

180 北海道森林植物 写真図譜  
(Ⅱ. 木本篇)

監修 館脇操 編集 中野正彦、中村幸雄、吹上芳雄、三角亨、鮫島惇一郎 / 森林植物同好会

1955 / 470 一ホ

北海道の森林を形作る喬木、その下層に生育する灌木の写真図説。

181 北海道の湿原

編 辻井達一、渡辺祐三 / 北海道大学図書刊行会

1982 / 468 一ホ

湿原写真集のような本で釧路湿原、霧多布、風連湖を取り上げているが、そのほかに主な湿原として、大雪山系の沼の平、沼の原、原始が原、浮島湿原などを挙げている。

182 北海道の文化財

北海道教育委員会 / 北海道新聞社

1978 / 709 一ホ

道内にある国と北海道指定の文化財(国指定 93 件、道指定 114 件)をカラー写真と図版で紹介している。大雪山関係は、国の特別天然記念物の大雪山と北海道指定名勝、羽衣の滝。

183 山とお花畑 2

田辺和雄 / 高陽書院

1961 / 471 一タ

全3巻のうちの第2巻が、「尾瀬・上信越・東北・北海道」編である。副題に一原色写真でみるお花畑一とあるように、当時としては画期的、華麗な原色(天然色、カラー)の山とお花畑の写真と解説、深田久弥の紀行随筆、著者の「植物探索旅行の日誌から」がある。北海道は大雪山をはじめ、夕張、アポイ、知床など。著者は大雪山北方の平山が、「ごく最近エゾルリソウそのほかの高山植物の宝庫であることが発見された」と記している。

184 わが心の山

山岳写真集団 / 角川書店

1968 / 748 一ワ

「エーデルワイス写真集」とあるように、山岳写真集団団員の写真集で、写真の間に作家や登山家の文がはさんである。団員の1人、横山宏が「秋色 大雪山」3点の写真を寄せている。

文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど

7-1 文学書 (全てが大雪山)

185 牙王物語 (上) (下)

戸川幸夫 / 角川書店

1957 ~ 1958 / 913 一ト

戸川幸夫が毎日新聞夕刊に連載した「山のキバ王」の単行本。新聞連載中に「牙王物語」と改題して上巻が、新聞連載が完結した翌年、下巻が発行された。大雪山中で生まれた「キバ」(オオカミと犬の混血)と東川の牧場の娘「早苗」の波乱万丈の物語。大雪山の原生林をなぎ倒した洞爺丸台風(1954年)がクライマックスになる。

186 クマネシリ紀行

早川禎治 / 私家版

1968 / 786 一ハ

クマネシリ山塊の夏冬を通じた登山紀行で、巻末に登山史も付記してある。著者の登山ルートは積雪期初登頂であろうし、クマネシリ山塊の登山研究としても貴重な資料となる。

187 大雪山讃歌

高澤光雄 / 北海道出版企画センター

2015 / 291 一タ

大雪山国立公園指定 80 周年の節目に、山岳雑誌などに寄稿してきた大雪山系への登山紀行などを一冊にまとめた。歴史的に貴重な写真を使って「写真で見る探検・登山・保護への歩み」を巻頭に置き、著者がライフワークとする登山史など大雪山の歴史を振り返っている。

188 戸川幸夫動物文学全集 3

戸川幸夫 / 冬樹社

1965 / 913 一ト

戸川幸夫の動物文学を集めた全6巻と別巻構成で、第3巻には「牙王物語」だけを収録している。徳川夢声が「シートン動物記と並び、著者の深い愛情と生物学的探究心が全編にあふれている」と評している。

189 分水嶺

笹本稜平 / 祥伝社

2014 / 913 一サ

大雪山中の幻のオオカミ探しに人生を賭けた男は殺人罪で服役、仮釈放中の身。この男に同行して冬の大雪山に登る山岳写真家。東大雪の音更山、石狩岳、ニベの耳、シュナイダーコースなどを主な舞台に描く本格山岳小説で、帯広警察署の刑事もからむミステリー仕立て。本の帯に「彼らの真摯な魂が触れ合うとき、奇跡が起こった」とあり、引き込まれる。

## 7-2 文学書 (部分が大雪山)

- 190 **あるサラリーマンの山**  
芳村宗雄 / 白山書房  
1997 / 786 -ヨ  
仕事と家庭の合間に、置かれている状況などの分析をしながら登山を楽しむ方法を明かしている。著者は札幌在住、サラリーマン40年にわたる山記録で、大雪山へは高度経済成長期、結婚したての頃に訪れている。上ホロカメットクでキツネにザックを狙われたコラム欄や「石狩岳から化雲岳」「黒岳から旭岳」などの「思い出の山」で構成している。
- 191 **ある偃松の独白**  
中村清太郎 / 朋文堂  
1960 / 291 -ナ  
朋文堂のコマクサ叢書のなかの1冊。著者は登山家であり画家、初期の登山に足跡を残し日本山岳会名誉会員。「大雪山あれこれ」の1編があり、大雪山に1か月ほど籠って周辺を歩いて絵を描いている。本書にも数枚の絵を挿入している。鮫島惇一郎が大雪山の案内役で同行した。
- 192 **イグアノドンの唄**  
中谷宇吉郎 / 文藝春秋新社  
1952 / 404 -ナ  
中谷宇吉郎の随筆集。最初の「冬の華」が1938年に発行された後、「続冬の華」「第三冬の華」などと続き、イグアノドンの唄は「第十冬の華」となっている。大雪山関係の随筆として「大雪山二題 (大雪山の雪、大雪山の夜)」「大雪山の積雪量調査」「雪は資源である」を収録。
- 193 **大島亮吉全集 全5巻**  
編集 本郷常幸、安川茂雄 / あかね書房  
1969 ~ 1970 / 918 -オ  
大島が慶応大学山岳部で活躍していた1920年7月、天人峡からクワウンナイを遡ってトムラウシへ登り、さらに石狩岳へと縦走する「石狩岳より石狩川に沿うて」は、山岳紀行文学の名著となっている。1巻が紀行、2巻が随想、詩、3巻は西欧のアルピニストを紹介した先縦者、4巻は研究、翻訳、5巻は大島亮吉研究。
- 194 **北紀行 風の恋歌**  
伊藤徹秀 / 麦秋社  
1995 / 291 -イ  
著者は学生時代に山岳専門雑誌「岳人」で年間の紀行賞を受けている。道内各地の紀行34編。沼に瞬間的に映った流れ星の光などが印象的な「大雪山の夏径」をはじめ、「然別峡の緑葉」「大雪高原沼の淡い雲」「十勝山麓の深い雪」「トムラウシの狭い径」など。
- 195 **北の植物**  
戸塚新太郎 / 原始林社  
1977 / 472 -ト  
著者は歌人であり小樽山岳会名誉会長、小樽山草会会長。短歌雑誌に連載した植物随筆を、著者の没後、長男・守夫によってまとめられた。著者は全道の山を歩いており、大雪山のこともたびたび出てくる。巻頭に著者作、伊藤整・書の短歌がある。装幀とカットは著者の甥、行動展の小山内重名。
- 196 **北の山**  
伊藤秀五郎 / 梓書房  
1935 / 291 -イ  
著者は詩人であり、生物学者、北海道の山に大きな足跡を残した。山の名著として大きな影響を与えた一書である。なかでも「静観的とは」は、登行と思索という登山観を表わした随想論考として、広く愛読された。大雪山関係では、「北海道の山と高原」「北海道の夏の川」「石狩岳とニペソツ山」がある。装幀、挿画は坂本直行。
- 197 **句集 日本百名山**  
栗田希代子 / 東京四季出版  
1998 / 911 -ク  
北海道出身の俳人。深田久弥が選んだ日本百名山に登って俳句を作ろうと思い立ち、昭和59年から12年間で完登。句集は大雪山の「炎帝も遊ぶカムイの庭の山」から始まる。ほかに「夏草もためらいがちの旭岳」「山霊のひしひし迫る登山かな」、トムラウシ山の「岩の角つかむその先雲の峰」など。
- 198 **現代紀行文学全集 山岳編 (上)**  
監修 川端康成、佐藤春夫、志賀直哉 / 修道社  
1958 / 915 -ゲ  
上下巻を併せて北から南へ登山家を中心に学者、文学者などの登山記、山の紀行文を集めた。大雪山関係は、「北海道の夏の山」(大島亮吉)、「大雪山紀行」(中西悟堂)がある。「三股高原」(加納一郎)は上高地と三股の比較図があって興味を引く。三股は石狩岳、ニペソツ岳、クマネシリ岳の登山基地である。
- 199 **山頂の憩い**  
深田久弥 / 新潮社  
1971 / 291 -フ  
百名山後の登山紀行集であり、深田はこの原稿を渡した3日後、山梨県茅ヶ岳で急逝、期せずして遺稿集になってしまった。あとがきは夫人・志げ子である。大雪山系では、「ニペソツ山」と「音更山と石狩岳」の2編がある。

- 200 **山野巡歴**  
横内斎 / 信濃路  
1980 / 472 - ㇿ  
—信州の植物と私—という副題がある。著者は教育者、植物研究家で、小泉秀雄を恩師として、各地の山に同行している。その1編の「石狩川源流でサケ三尾」は、小泉、成田嘉助、塩谷忠らとの大雪山山行記である。成田らが源流で目の下2尺もあるサケを、3匹引っかけてきて、山中で焼いたり、刺身にしたりして、たらふく食べた。ほかにも興味ある話はたくさんある。
- 201 **造材飯場**  
宮之内一平 / 北方公論社  
1958 / 913 - ミ  
著者は1926年、東川尋常小学校を卒業した東川ゆかりの作家。「造材飯場」は大雪山麓の造材が盛んな町（石北線A駅、仮に上田町と呼ぼうと書いてある）を舞台に、厳しい冬山の造林作業現場で事故やストライキが仕組まれ、ミカド飲食店の女性が絡む人情物語。「サンデー毎日」の大衆文芸佳作（1955年）となった著者の代表作。この本には、東川が舞台と推量できる短編「冬の山」など16編を収録。
- 202 **太古の原野に夢見て**  
石川啄木ら30名 / 作品社  
1986 / 915 - ニ  
日本随筆紀行全24巻のなかの1冊である。冒頭に「雪中行—小樽より釧路まで」（石川啄木）があるので、啄木が著者代表になってしまった。三浦綾子、小熊秀雄、戸川幸夫、金田一京助など30人の紀行を収載している。大雪山系では、「大雪山紀行」（中西悟堂）、「十勝岳」（深田久弥）、「北海道の熊の話・抄」（伊藤秀五郎）がある。
- 203 **大雪山 日本の名山01**  
編 串田孫一、今井通子、今福龍太 / 博品社  
1998 / 291 - ク  
大雪山に関する著名な紀行文、エッセー、随筆、漢詩、和歌などを集めた一冊。大町桂月「層雲峡より大雪山へ」、大島亮吉「クワウンナイを溯って」、坂本直行「般若の五郎」、中谷宇吉郎「大雪山二題」、三浦綾子「大雪山に想う」、渡辺康之「大雪山には氷河地形がないか」、今井道子「大雪山の色」など32編。巻末に執筆者のプロフィールも。
- 204 **ただ今、八合目**  
—北の絶境・東大雪日記  
山崎治 / 平原書房  
1984 / 291 - ヤ  
著者は音更町在住の詩人で、平原書房を主宰。20代後半から登山を始め、以来10年間の山紀行である。住地からも東大雪の山を中心にまとめている。書名の八合目は、
- 10年近く山を歩いたが、素人の山好きで、登山内容は七、八合目止まりから名づけた。
- 205 **小さな頂**  
—原有徳 / 茗溪堂  
1974 / 291 - イ  
著者は登山家であり画家、俳人でもあり、四季を問わず、多くの山に足跡を残した。本書にはたくさんの挿絵、概念図もあるが、装幀ともどもすべて自作。大雪山系の山のみを挙げると武利岳、十勝岳、ニセイカウシュペ山、石狩岳、旭岳、富良野岳、トムラウシ、オプタテシケ山、愛別岳、凌雲岳、上ホロカメツク山。
- 206 **寺田寅彦の追想**  
中谷宇吉郎 / 甲文社  
1947 / 289 - テ  
著者が1922年、東京帝国大学理学部物理学科に入学、物理実験の指導を受けた寺田寅彦について、「断片的に先生の人間の片鱗を手当たり次第に描いた」一冊。寺田は物理学者であり、随筆家であり、絵も描く才人だった。中谷が学生のころから物心両面で世話になり薫陶を受けた。大雪山で雪を研究した中谷の系譜を、敬愛した恩師との交流を通じて知ることが出来る。
- 207 **中谷宇吉郎集**  
編集 樋口敬二、池内了 / 岩波書店  
2000～2001 / 408 - ナ  
北大で中谷に師事した樋口敬二らが編集した全8巻の全集。大雪山関係を選ぶと、1巻Iが「雪の話」から始まり、「雪の十勝」「粉雪」など十勝岳麓中腹の山林監視人のヒュッテで研究していたころの回想随筆で「十勝岳の思い出は皆なつかしいことばかりである。冬の深山の晴れた雪の朝位美しいものも少ないであろう」などと書いている。2巻も人工雪を作るなど大半が雪の研究で占められ、解説のページで樋口が「戦後における天然雪の研究は、1950年2月、大雪山旭岳の山麓にある仰岳荘で天然雪の映画を撮影することで始まり、私も学生の身であったが炊事係としてそれに参加した」と書いている。3巻は前半が雷だが、後半に「雪後記」で十勝岳へ馬櫓で向かう随想と、雪結晶が生長するシーンを低温研究室で撮影したり、十勝岳で降って来る新雪を撮った「映画を作る話」。5巻は忠別川上流域の大雪山に降り積もった雪は資源であると説き、積雪量を測った話など「大雪山二題」「雪は資源である」の随筆を収録。8巻は、北海タイムス「タイムス論壇」に1953年に寄稿したものを「北国の春」として収録、巻末の年譜と著書目録（大森和彦編）によって、中谷の生涯が良く分かる。

208 中谷宇吉郎随筆選集第2巻

編集 岡 潔、茅誠司、藤岡由夫 / 朝日新聞社  
1966 / 404 - ナ

全3巻。2巻には、大雪山での研究とゆかりの深い「雪三題」「大雪山二題」「雪は資源である」などを収録。本に挿し入れた「月報」に、日本で最初にノーベル賞を受賞した湯川秀樹の寄稿「中谷さんと私の短歌」があり、湯川が札幌で肺炎に倒れた時、中谷宅で療養したこと、中谷の絵に湯川が短歌を添えたことなど逸話を明かしている。

209 果て遠き丘

三浦綾子 / 集英社  
1977 / 913 - ミ

離婚した父と母のもとで姉、妹がそれぞれ分かれて育ち、父には子連れの後妻がいるという二組の家族を中心に、妹は、姉や義姉の幸せをことごとく壊していく愛憎物語。義姉と男性が結ばれるのが旭岳を目の前に、姿見の池周辺を散策した後、勇駒別温泉(現・旭岳温泉)の宿となっている。

210 被写体

宮之内一平 / 旭川出版社  
1981 / 914 - ミ

東川尋常小学校を卒業した東川町ゆかりの作家、宮之内の随筆集。作家たちとの交流や自身の創作と短歌のこと、アイヌの才媛、知里幸恵のことのほか、東川神社境内の千本桜見物の時に見た喧嘩を「血桜組」として書いている。

211 北海道・東北ふるさと大歳時記

角川文化振興財団(代表・加藤楸邨) / 角川書店  
1992 / 911 - フ

全国全7巻のうちの第1巻である。地方別の大歳時記で、季語編と地名編がある。地区別に旭川、上川、大雪山、富良野、然別湖、狩勝峠など数百句、大雪山の項だけでも81句、ほかに旭岳7句、羽衣の滝3句などを収録する。季語編を加えると大雪山系の句は数えきれない。例示すると「巖父とす大雪山の照りかすみ」白田垂郎、「狐吊りて駅亭寒し山十勝」川東碧梧桐など。大雪山、十勝岳、羽衣の滝の見事な写真もある。

212 北海道繪本

文 更科源蔵、版画 松見八百造 / さるるん書房  
1978 / 914 - サ

好評3部作、いずれも大半のページに単色木版の挿画があり、個性的で素朴、かつ、ぜいたくな本でもある。暮らしや自然、山やナキウサギ、クマもあり、楽しめる。

213 続・北海道繪本

文 更科源蔵、版画 大本靖 / さるるん書房  
1976 / 914 - サ

214 北海道の旅

串田孫一 / 平凡社  
1997 / 915 - ク

平凡社ライブラリーのなかの1冊。本書は1962年5月15日、山靴をはき、ピッケルを持って旅立ち、連絡船に乗り、北海道を周遊、6月1日に北海道を離れるまでの旅の記録である。列車やバスを乗り継いでの旅であった。登山は白金温泉から十勝岳のほか、斜里岳、礼文岳に登っている。大雪山は車窓からかいま見ただけで登れなかった。著者の描く山のスケッチ多く挿入あり。

215 北海道の山々一山の風土とその紀行

編 宝文館出版 / 宝文館出版  
1968 / 291 - ホ

全6巻のうちの北海道編。登山家のみならず、文人、学者の文も集めたアンソロジーで、大雪山関連の寄稿者のみを挙げると加納一郎、川田順、大島亮吉、本郷常幸、八木橋豊吉、速水潔、館脇操、伊藤秀五郎らである。

216 北海道文学百景

編 北海道文学館 / 共同文化社  
1987 / 910 - ホ

1景2ページで写真と文学を綴る。大雪山関係を掲載順で紹介する。「層雲峡」では、木野工『樹と雪と甲虫と』の1節、詩歌では、松本五百子、三上省吾、飯田蛇笏、福田蓼汀、西倉保太郎。「大雪山」は戸川幸夫『牙王物語』、詩歌は、宮柗二、金坂吉晃、石田雨圃子、遠藤梧逸、入江好之。「十勝岳」は、佐藤喜一『十勝泥流』、詩歌は、西川青濤、江口源四郎、長谷川零餘子、大塚千々二、加藤愛夫。ちなみに「旭川」は、三浦綾子『氷点』、大雪山、十勝岳を描写する。

217 町医者記—おじさんのハンドバッグ

大山正信 / 私家版  
1991 / 914 - オ

書名でわかるようにおじさんは医師で、発行時は山陽国策パルプ(株)旭川工場診療所長。登山愛好家であり、乗馬、俳句、スケッチ、こけし収集など、多趣味の人である。各誌に寄稿したエッセイをまとめたものだが、「天野市太郎先生との出会い」「高山病への挑戦」「大雪山と私」など、大雪山に関わるエッセイは多い。旭川在住の人であり、郷土史の資料にもなる本である。

- 218 **野獣撮影**  
戸川幸夫 / 山と溪谷社  
1973 / 480 ー ト  
動物文学の第一人者、戸川幸夫が野生動物を撮影する旅紀行。インド象の襲撃、アフリカ象との対決、野獣界の忍者ヒョウなどは外国での冒険。国内では知床やオホーツク海の厳しい冬を紹介し、大雪山ではヒグマとの遭遇、白雲岳避難小屋のシマリス夫婦などを書いている。
- 219 **山旅記**  
山川力 / 紫紅会  
1976 / 914 ー ヤ  
著者は1912年、岩見沢市生まれ。北海道新聞社論説主幹、監査役を経て顧問、日本山岳会会員。本書は〈紅〉〈北海道新聞社社報〉〈北方農業〉〈北方文芸〉〈北の山脈〉などの寄稿を含めて1冊にまとめた。紫紅会は岩田醸造のPR誌〈紅〉の発行所。〈紅〉は小さな随筆誌として、全国的に愛読された。「トムラウシから天人峡へ」は、2度とも雨にたたられ、さんざんな山行きであったなど、山の記録も多い。装丁を〈紅〉ゆかりの画家らが担当、小型変形の瀟洒な作り。
- 220 **山旅句 エッセイ集**  
高澤光雄 / 北海道出版企画センター  
2013 / 914 ー タ  
全国俳誌「道」の創始者、北光星から「好きなように随筆を書いて」と依頼され、著者が1999年10月号から「山旅句」を連載し、2013年に160回を超えた。連載原稿に手を加え、未発表も含め百篇を選んで一冊にした。ヒマラヤやプータンの山旅、作家や芸術家との交流、企画した作家展のことなどバラエティーに富む。トムラウシ山遭難を顧みる、川嶋康男著『凍れるいのち』を読んで、三浦綾子没後十年企画展など大雪山含みは6編。
- 221 **山談花語**  
栃内吉彦 / 青山出版社  
1943 / 914 ー ト  
著者(1893-1976)は北大卒、農学博士、北大植物園の宮部金吾、伊藤誠哉に継ぐ三代目園長。新聞、雑誌に書いてきた随筆39話を初めて本にまとめ3千部発行。序に代えてが母への手紙風になっている。「北海道の積雪」は石狩岳から下る途中で大規模な底雪崩の跡を見た話、「北海道の山登り」は大雪山の一般の登攀が容易になった半面、山岳を愛する人々にとって登山的興味が薄らいだと言っている。「カムイピランジ」の一話には、大雪山のてっぺんに、数十町歩に亘る広大な高山植物園を設けたいという伊藤誠哉博士の案に基づいて高距千八百㍎のただっ広い山頂を調査したことを明かしている。他に十勝岳でのスキー、「愛山溪春秋」など。
- 222 **山とその花**  
鮫島惇一郎 / 林業試験場北海道支場  
1983 / 472 ー サ  
著者が北海道林務部の広報誌「林」に1961年から1983年まで寄稿した108話を合本した。一話の表題は全て花の名前。大雪山での珍事、出会いなども多く、その時々的印象に残った花を脇役にしてエピソードを語り継ぐ。ヨツバシオガマは、愛山溪でアルバイトの手伝いをさせられていた時に永山岳で霧に巻かれ、遭難寸前になった高校時代の叱られた思い出。チングルマは、裾合平で砲兵の演習で切られた矮性灌木を見て、ここは最高の植物群生地なのに…と思う。友人や先輩との山での会話はおかしく、ユーモア短編ともいえる。
- 223 **山の画帖**  
茨木猪之吉 / 朋文堂  
1959 / 291 ー イ  
朋文堂コマクサ叢書のなかの1冊。著者は画家であり登山家、1944年、北アルプス穂高岳で行方不明となる。本書のなかに「北海道の旅」があり、ニペソツ山を眺め、扇が原、東西ヌブカウシ、然別湖、山田温泉、糠平を歩いている。残雪のウペペサンケ山が印象に残ったようだ。
- 224 **山の詩歌 登山全書随想編3**  
編 藤木九三、川崎隆章 / 河出書房新社  
1956 / 786 ー ト  
詩人、歌人の山を詠んだ詩歌を収録したものである。尾上柴舟の「大雪山」を詠んだ短歌が取りあげられている。尾上は歌人のみならず書家としても著名である。
- 225 **山の旅 大正・昭和篇**  
編 近藤信行 / 岩波書店  
2003 / 786 ー ヤ  
文庫本。登山家をはじめ、文学者、学者の山岳紀行、随想、論考を収録した。北海道では、大町桂月「層雲峡から大雪山へ」、伊藤秀五郎「山と漂泊」(『北の山』より)を掲載している。
- 226 **山の風物誌 登山全書随想編2**  
編 藤木九三、川崎隆章 / 河出書房  
1956 / 786 ー ト  
「北海道熊の生態」(清水大典)の1編があり、大雪山で登山者が襲われた事件を一例に挙げている。
- 227 **わが山、源流へのあこがれ**  
早川禎治 / 北の野帳社  
2006 / 786 ー ハ  
限定100部の私家版。クマネシリ山塊、十勝川源流行、日高の山と谷、東アフリカの山、ヒマラヤとガンジス源流、風の回廊ムスタ

ンなど、1966年から2005年までの40年間にわたる山旅を集約した。大雪山へ登るのは石狩川の水系から入るのが一般的だが、その裏側が気になるということで、著者は登山仲間三人でニペツツ山のさらに西の陰になる十勝川源流地帯のトノカリウシュベツ川をつめてオプタテシケを目指したが、なぜか美瑛岳山頂に出てしまうという痛快な山旅など。

## 紙誌、部会報

新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物

### 8-1 新聞

#### 228 変わりゆく大雪

編 北海道新聞 / 北海道新聞社  
2004 / 070-カ

国立公園指定70年の9回連載記事である。ロープウェイの功罪、トイレ問題、自然破壊、環境保全と観光の両立について、今後の課題についてなど。コピー。

### 8-2 雑誌

#### 229 アルプ

アルプ編集委員 / 創文社  
1958～1983 / 910-ア

創文社の久保井理津男社長が申田孫一、尾崎喜八らに文芸的な山の雑誌を作りたいと呼びかけて創刊され、従来のガイドブックや登攀記録とは違う月刊誌として愛読者が増え、多い時には1万3千部、平均して4千部を下回らなかった。A5判、平均70ページ前後の「アルプ」に多くのアルピニストが心酔した。山の芸術誌として時代の役割を果たし得たとして300号で終刊となった。清水敏一が「大雪山文献書誌 第2巻」で、アルプ掲載の大雪山関係者を次のようにまとめている。数字はバックナンバー。下村兼史「大雪山のヒグマ」(27)「大雪山の小子ども」(31)、坂本直行「吹雪の結婚行進曲」(35)「ウロオシベ山」(159)「ルーチン峠」(176)、石一郎「十勝の雪」(47)「北海道の山旅」(64)「十勝岳回想」(200)「北の山」(292)、河田植「はるかなる旅情」(53)、五十嵐謙「十勝岳とニセコアンヌプリ」(60)、鮫島惇一郎「石狩の旅」(68)、相川修「冬山礼賛」(72)、望月達夫「トムラウシ紀行」(77)「ウペペサンケヌプリ」(80)、大野樞「北海道の森」(98)、若林修二「きたぐにの森」(98)、武田久吉「大雪山に行く」(111)「北海道の山名と地名小記」(163)、丹征昭「エゾフクロウの森」(128)「風の歌う日」(162)「ランプ」(164)「山小屋への愛」(165)「エゾコザクラの咲く夏」(199)「十勝三股への旅」(219)「山草記」(257)、伊藤徹秀「大雪山の夏径」(138)「十勝岳初雪」(286)、田中澄江「山を慕う」(151)、一原有徳「富良野岳」(167)「北国の風」(184)、田代沼太郎「危機にたつ大雪山」(171)、大沢洋三「大雪山と層雲峡」(186)、田淵行男「山と私」(190)、原真「冬の十勝岳」(200)、川崎精雄「ウペペサンケヌプリ」(200)、熊谷樞「登れなかった十勝岳」(290)。

#### 230 岩と雪 60号

編集人 池田常道 / 山と溪谷社  
1978 / 786-イ

登山、岩登りの専門隔月刊誌。60号で北の山登攀考を特集した。今村朋信「北海道の登山・再考」、保田成男「現代北海道山岳事情」、小林年「冬山登攀者へのアドバイス」、高澤光雄「北海道登山小史」、小樽山岳会が氷壁を完登した「銀河ノ滝から赤岳」など。

#### 231 岳人

辰野勇 / (株)ネイチュアエンタープライズ  
2014 / 786-ガ

京都大学山岳部の有志が1947年に創刊した登山専門雑誌で、その後、中日新聞社が引き継ぎ、約800号、67年の歴史を誇る月刊誌。2014年9月号からアウトドア・スポーツ用品販売のモンベルグループが引き継いだ。東川町の中心街にモンベル大雪ひがしかわ店があり、忠別湖で「SEA T O S U M M I T」を主催している。表紙を従来の山旅写真から、編集長の辰野勇(モンベル代表)が愛してやまない山の版画家、畦地梅太郎(1902～1999年)の作品に替えた。東川の写真家、奥田實の「森と、樹と、輝きと」、東川の獣医師、写真家、エッセイスト、竹田津実の「北のいきものがたり」の連載が始まった。

#### 232 カムイミントラ

編 カムイミントラ編集室 / りんゆう観光  
1984～2004 / 291-キ

りんゆう観光(株)の隔月刊PR誌で、「みなさまの心を結ぶ北海道の風土・文化誌」として発行した。16ページの小冊子ながら大雪山ともども文化に大きな貢献をした。20年間120号をもって終刊する。全道を対象にしているが、全号を通じて何らかの意味で大雪山に関わると思ってもいいだろう。創刊号は黒岳の標高年1984年に始まった。

#### 233 北の話

編集 八重樫實 / 凍原社  
1980 / 291-キ

北海道を旅する手帖「北の話」は1963年に創刊、隔月発刊の道内情報誌として1997年12月の202号まで続いた。作家の寄稿が多く、文芸色が強かった。大雪山に度々登った動物作家、戸川幸夫が「北海道に本当の自然公園を作りたい」(34号、190号再掲)を寄稿し、その候補地の首位に大雪山国立公園を挙げている。戸川は「新話話物語」(175号)を大雪山のヒグマから書き始めたが第六話(180号)で病に倒れ、未完となった。齊藤俊夫が「大雪山への誘い」で紹介している「北の話」に載った大雪山は次の通り(数字は号数)。深田久弥「石狩川の源頭」(32)、瓜生卓造「雨の黒岳」(39)、原田康子「雨の大雪山」(40)、戸川幸夫「懐かしき大雪の仲間たち」(68)、三好文夫「或

る冬山行き」(76, 189 再掲)「山の雪」(83)、生田直親「虹を見なかった旭岳」(79)、宮田泰「トムラウシ山」(79)、佐藤喜一「残雪の勇駒別行」(84)、佐々木逸郎「遙かなるトムラウシ」(86)、伊沢照夫「無精者の山」(94)、乳井洋一「石狩岳キジ撃ちの記」(100)、相神達夫「東大雪山行記」(105)、八重樫実「二つの山行記—東大雪縦走と利尻山」(135)、津田瑤子「花の山ある記—トムラウシ山・ニペソツ山」(141)、冬木薫「大雪山の滝」(159 9)、吉田道夫「一山なんぼ?」(168)。他に、三浦綾子「小説『泥流地帯』を回顧して」(188)など。

## 234 北の山脈

村本輝夫 / 北海道撮影社  
1971 ~ 1980 / 786 - ヤ

北海道の山の季刊雑誌として創刊され、10年間で40号まで続け、終刊となった。表紙は全て山の写真を使い、大雪山が11回で最も多く、次いで東大雪、十勝などが各5回で、大雪山国立公園で22回、過半数を占める。2号で大雪山特集を組み、井手貢夫「大雪山をめぐる施設と自然保護」、小川巖「大雪山のヒグマ調査から」、旭川山岳会などの「夏の雪山山塊」、石川俊夫「地質調査の歴史」、渡辺定元「大雪山の高山植物」、福田和民「魔の有毒温泉」、そして速水潔が「大雪山のアクシデント」で遭難を書いている。6号で東大雪山を特集し、芳賀良一「裏大雪からの告発—ある観光道路開発」、沼倉展「大雪山のカール地形」、鮫島惇一郎「沼の原・五色ヶ原の植物」、鮫島和子「トムラウシ山」など。東大雪の山々は39号でも特編され、大西芳広「オッパイ山」、長谷川信美「東大雪の山々と人々との出会い」など5編。大雪山関係の寄稿や報告は毎号のように掲載されており、清水敏一が「大雪山文献書誌 第4巻」で紹介しているのは約150編に上る。

## 235 牙王 (少年マガジン収録)

石川球太 / 講談社  
1965 ~ 1966 / 726 - イ

戸川幸夫原作の「牙王物語」を漫画化し、「週刊少年マガジン」誌上で1965年5月9日号から連載開始、1966年3月27日号で完結を迎えた。狼犬「キバ」が広大な大雪山を駆け巡り、凶暴なヒグマ「片目のゴン」と対決していくストーリーで、野生の「キバ」が唯一慕っている東川村の牧場主の娘、早苗が荒れ狂う洞爺丸台風の天人峡温泉で悲劇を迎える。

## 236 旅 ('65 北海道特集)

編集 矢吹勝二 / 日本交通公社  
1965 / 291 - タ

日本交通公社(現JTB)が編集、発行していた月刊誌で、通巻39巻めの65年7月号で北海道を特集した。作家、倉橋由美子の「はじめて見た層雲峡から阿寒への道」、旭川出身の二人の作家、木野工が「北海道のイメー

ジを決定させた文学」、三浦綾子が「アイヌの娘の本当の気持」を寄稿している。編集後記に「アイヌにしても、もの珍しい気持ちで接する時代は終るべきで、三浦綾子氏に特にお願いして、アイヌの娘の気持を同性の立場から書いて頂いた」とある。

## 237 ナキウサギつうしん

ナキウサギふあんくらぶ / ナキウサギふあんくらぶ

1995 ~ / 489 - ナ

大雪山系などに棲息するナキウサギを絶滅の危機から守ろうと1995年、約120人の女性が「ふあんくらぶ」を結成。物言えぬナキウサギのメッセンジャーとなって自然環境の保護を訴えていこうと会員誌を年3回発行。2014年10月で72号となり、メッセンジャーは3千人を超えた。ナキウサギの写真展の活動予定、ナキウサギの調査報告などを発信している。

## 238 日本岳連史

高橋定昌 / 出版科学総合研究所  
1982 / 786 - タ

副題に「山岳集団50年の歩み」とある。大雪山関連のみ紹介する。1954年7月、第9回北海道国民体育大会が開催され、登山部門は大雪山を会場とし、北海道山岳連盟と日本山岳会によって運営された。それとは別に全日本登山大会が全日本山岳連盟のみで運営され、第2回は1958年3月、十勝連峰で開催。第6回は1962年2月、ニペソツ山、ウペベサンケ山で開催、いずれもスキー、ピッケル、アイゼンを用いている。

## 239 HIKER - 北海道特集

編 山と溪谷社 / 山と溪谷社  
1967 / 786 - ハ

月刊誌〈ハイカー〉1967年7月号の北海道特集号(第2特集・北アルプス)である。グラビアに大雪山、羽衣の滝あり。大田正裕「大雪山縦断・勇駒別温泉〜層雲峡」、市原有徳「高山植物の宝庫・トムラウシ山」、俵浩三「山と湖と岬」などがある。

## 240 faura

(有)ナチュラリー / (有)ナチュラリー  
2003 ~ / 405 - フ

創刊号で編集長、大橋弘一が巻頭言として「北海道の自然を撮る写真家たちがそれぞれの自信作を提供し力を合わせて作る雑誌」「北海道の自然の姿をありのままに全国に紹介したい」と明記している。この季刊誌がとらえる12の要素は蟲、魚、禽、獸、草、木、苔、菌、山、水、風、月で、科学的な概念よりも博物学的、文芸的な要素が強い観念的な分類になっている。創刊号から後藤昌美が「景・北海道」を続けており、厳寒の大雪山系(2号)、紅葉・大雪(9号)、雪の造形(14号)、三国峠の秋(17号)、残雪の大雪山系(19号)、花の高層湿原(20

号)、トムラウシ7月(28号)、旭岳・冬(30号)、「紅葉最前線」大雪・銀泉台(33号)と続く。層雲峡に大雪山写真ミュージアムがオープンした際に、市根井孝悦の大雪山・春夏編(35号)、秋冬編(37号)を掲載した。大雪山麓の町・東川町にカワイイ系動物を見られるキトウシ森林公園があると紹介(45号)。写真家が12の要素の自然について自信作を毎号出しているので、大雪山としてとらえるのではなく、溪流や滝、高山植物、鳥、雲海などさまざまな写真の中に大雪山で撮ったものが数多く入っている。

## 241 武俠世界増刊 山嶽踏破號

編輯人 針重敬喜 / 武俠世界社  
1922 / 786 ーブ

「武俠世界」は明治時代の冒険小説作家、押川春浪が創刊した登山、スポーツ、冒険の雑誌。山岳踏破の臨時増刊号には参謀本部測量技師、中島権が「濃霧に襲はれた石狩岳の六日」を寄稿している。この石狩岳遭難記は「北海道第一の高峯と呼ばれる、原名『ヌタツクヌプリ』通称石狩岳と言うのを測量に赴いた時の事」と書いてあり、現在の石狩岳ではなく、旭岳の三角点測量の際の騒ぎで、隣の山の測量に入った技手ら三名が霧に5日間閉じ込められ、遭難死寸前に救助された話。

## 242 名峰百景(決定版 自然の心) 家庭画報編

編集員 今西錦司ら / 世界文化社  
1980 / 291 ーメ

世界文化社が家庭画報編の決定版シリーズとして出版した大型本(タテ約36.5cm、ヨコ約26cm、300ページ)。大雪山国立公園の山のカラーグラフは前田真三、志賀芳彦らの写真を13枚使い、釧路の作家、更科源蔵が大雪山にまつわるアイヌ伝説を書き、札幌在住の日本山岳会会員、高澤光雄が北海道の山を解説している。全国の名峰を紹介する名鑑。

## 243 山と渓谷 No.527

編集人 原康夫 / 山と渓谷社  
1981 / 786 ーヤ

1981年6月号(通巻527号)で「いま北の山へ[大雪]」を69ページから133ページまで特集した。カラー写真と読み物で「愛山溪-黒岳-旭岳」「クワウンナイ川-トムラウシ山-高根ガ原」など3つの縦走コースを紹介しているほか、「データ・バンク[大雪]」で交通手段、山小屋、キャンプ地、撮影ポイントなど盛りだくさんの内容。旭川山岳会が9つのルートを紹介している。

## 244 山と渓谷 No.709

編集人 山口章 / 山と渓谷社  
1994 / 786 ーヤ

1994年8月号(通巻709号)で特別企画「北の大地、大雪山国立公園60周年記念」が組まれた。高澤光雄の「写真で見る探検・登山・

保護の歩み」、板垣亮平の「大雪山で『氷河時代の置手紙』を探し続ける丹治茂雄」など。

## 245 山とスキー

加納一郎ほか / 山とスキーの会  
不詳 / 786 ーヤ

「山とスキー」は北大スキー部のOBと部員が「札幌山とスキーの会」をつくり、月刊誌として1921(大正10)年に創刊した日本初の山岳雑誌。中野誠一、加納一郎、板倉勝宣、板橋敬一らが活躍、慶応大学山岳部の大島亮吉も数多く寄稿した。日本のスキー普及と冬季登山のけん引役を担った。9年間で100号(昭和5年8月)を出して廃刊。その後「山と雪」と改題したが10号で終わった。高澤光雄(札幌在住)が「山とスキー」27冊、「山と雪」6冊を東川町に寄贈した。通巻揃いではないが、板橋敬一の「冬の十勝岳」(37号)、旭岳の初スキー登山を記録した加納一郎の「北海道スキー登山史」(40号)、伊藤秀五郎の「三月の黒岳登山小屋日記」(49号)など。

## 246 山とスキー 第2年合本

編輯者 赤松勲 / 山とスキーの会  
1923 / 786 ーヤ

創刊から二年目を迎え、第16号から26号までの合本。立山連峰松尾峠で凍死した板倉勝宣の最期を同行者だった楨有恒が詳細に報告している。板倉は厳冬の旭岳初登頂など大雪山とゆかりが深い登山家。

## 247 山の素描

編 山口透 / 秀岳荘  
1962 ~ 1976 / 914 ーヤ

年3回の発行で通算15年、45号をもって終刊した山の随筆誌。スポーツ用品店秀岳荘のPR誌だが、宣伝らしいものはゼロ、1号12ページ、執筆者は4~5人。条件は1人1編に限ること、道内の在住者は山と自然を、道外者は北海道の山と自然をテーマとすることであった。道内外の執筆者は延べ185人。大雪山関係の執筆作品は28編ある。

## 248 ワイルドビュー

編集人 井上功夫 / 双葉社  
1978 / 786 ーワ

1977年12月に創刊したアウトドア、アドベンチャーの隔月雑誌だが、4冊めとなった翌年6月号で休刊、短命に終わった。最終号を飾ったのが「豪華カラー大特集・大雪山連峰」。巻頭に大雪山自然観察ルート詳細地図があり、「ヒグマ行動経路、要注意」「シマリス多し」「この一帯、両側お花畑」、あるいは高山チョウを種類別に観察できるポイントを書き入れ、エリアを点線で囲んで示している。グラビアは夏の旭岳など。読み物は小田島護、木村盛武のヒグマ、渡辺

康之のウスバキチョウ、岡田武稔の幻の白い花のオヤマノエンドウなど。

## 249 林業技術

不詳 / 日本林業技術協会  
1968～ / 650ーリ

日本林業技術協会は1921年に興林会として発足、90年以上の歴史を経て現在は一般社団法人日本森林技術協会。森林を利活用する技術を主体にした月刊誌で、東川町が保管するのは8冊。鮫島惇一郎が寄稿した「夏の大雪山」(1968年8月号)、同誌のコラム「山・森林・人」に鮫島が寄稿した「ユニ石狩越え」(1980年7月号)、「十勝岳」(1981年1月号)、「大雪山」(1981年10月号)、ユニ石狩越えは恩師、館脇操とコバコシャジンをめぐる回想など。旭川営林支局、中村博の「洞爺丸台風被害跡地の現況と今後の施業」(1980年10月号)。

## 8-3 部会報

### 250 カムイミンタラ VOL.31

編集長 細川広子 / 大雪と石狩の自然を守る会  
2012 / 405ーカ

「大雪と石狩の自然を守る会」の創立40周年記念特集号「大雪山と石狩川と」。俵浩三、鮫島惇一郎らゲスト18人のメッセージ、活動年表、主催している講座「ひぐま大学」の報告など。

### 251 北の岳友とともに 北海道山岳連盟 60周年記念誌

編集委員長 神山健 / 北海道山岳連盟  
2012 / 786ーキ

連盟の専門委員会(指導、普及、自然保護、遭難対策など)の活動軌跡、加盟する各地の山岳会から「一会一山…思い入れの山」として寄稿を募り、編集した。

### 252 北の峰々とともに 道岳連 50年のあゆみ

編集委員長 阿地政美 / 北海道山岳連盟  
2002 / 786ーキ

1952年創立の北海道山岳連盟の半世紀を迎えた記念誌。巻末に連盟年表、歴代役員、各地区の山岳会、指導員の一覧がある。1954年に国体(登山部門)が大雪山で開催されたなどの歴史に加えて、加盟する各地区の活動を寄稿で紹介している。

### 253 記念一創立拾五年

編 大野精七 / 北海道帝国大学文武会スキー部  
1926 / 784ーキ

北大スキー部は1911(明治45)年創立、日本のスキーの最先端を歩んできた。記念誌は、日本のスキー黎明期の歴史的記録で

もある。海外文献の訳文、英独仏スイスなど海外スキー専門家の寄稿も多い。当時のスキーは滑走用具である一方、登山用具でもあり、いうならば滑走派と登山派が混在していた。本書発行と同時に北大山岳部の創立となり、登山派とスキー派の訣別記念誌となった。「オブタケシケ山脈よりトムラウシ山麓へ」(山口健児)は、1926年5月17日から21日まで、十勝岳からトムラウシ山へ、ゾンメルシー(夏スキー)、アイゼンなどで縦走、松山温泉に下山した。十勝岳大噴火(5月25日、死者144人)直前の登山である。大雪山関係は他に1912年1月、板倉、加納らのユコマンベツから旭岳登山、同年3月、層雲峡からの黒岳登山はスキーを用いた積雪期初登山。

### 254 山書趣味(1～10巻)

編集 高澤光雄 / 金沢山岳文庫  
1997 / 291ーサ

「日本山書の会」の道内会員が地区報として1992年に創刊した。第3号で大雪山特集を組み、編著者の高澤光雄が巻頭に「大雪山の魅力」を書き、「大雪山文献書誌」の著者、清水敏一が「大雪山あれこれ」、斎藤俊夫が「北の話」に掲載された大雪山関係の寄稿を詳細に書いている。10巻を発行した段階で合本を、箱入りで限定50部つくった。

### 255 大雪山への誘い

編修 高澤光雄 / 山と森の散歩道実行委員会  
1997 / 291ータ

「大雪山への誘い 山の愉しみと地図・登山情報展」が1997年4月12日～18日、丸善・札幌南一条店で開催されたときの記念冊子。清水敏一「大雪山をめぐる人々」、高澤光雄「大雪山探検・登山・保護への歩み」、速水潔「大雪山、名称の変遷」、斎藤俊夫「『北の話』に書かれた大雪山」など、24ページに情報が詰まっている。

### 256 碧水 Vol.3

旭川勤労者山岳会創立10周年記念誌編集委員会 / 旭川勤労者山岳会  
1979 / 786ーア

旭川勤労者山岳会の会報。10周年記念特別号には座談会「10年のゆみ」、10年の活動日誌、自然保護活動への取り組み、資料として山行一覧などを掲載、通称「労山」の活動が分かる一冊。会員らの随想、寄稿では大雪山の登山記が多い。

### 257 北大山岳部五十周年記念誌

編 朝比奈英三 / 北大山の会  
1979 / 786ーホ

北大山岳部は1926年に創立。50周年記念誌らしく回想記、座談会、各部報から代表的な登山記録の再掲、大雪山から日高へ、さ

らには海外の山へと続く登山の指向、随筆、年表などで構成されている。北大山岳部の歴史はすなわち北海道登山史でもあり、それを凝縮したような内容であり登山文献としても貴重。大雪山関連の記録も多く、「冬の石狩岳」(伊藤秀五郎、和辻広樹)、「一月の石狩連峯」(徳永正雄)、「忠別川溯行」(石橋恭一郎)、「大雪山十日の物語り」(矢野実)、「冬期十勝岳・大雪山縦走」(木崎甲子郎)などがある。

## 258 北大山岳部々報2

須藤宣之助 / 北海道帝国大学文武会山岳部  
1929 / 786 一ホ

大雪山関係は河合克己「石狩川を遡りて音更川を下る」、山縣浩「十勝岳—十勝川—ニペソツ岳」、ほかに伊藤秀五郎、徳永芳雄らの記録がある。当時は人夫を雇って長期登山をしていた。

## 259 北大山岳部々報3

江幡三郎 / 北海道帝国大学文武会山岳部  
1931 / 786 一ホ

佐藤友吉「五月のニペソツ山から松山温泉まで」は11日間に亘って人夫を雇い、スキー、テントの長期登山記。8月のニペソツ山からトムラウシ山も、10日間の登山であった。ほかにも大雪山関係の登山記録は多い。

## 260 北大山岳部々報4

徳永正雄 / 北海道帝国大学文武会山岳部  
1933 / 786 一ホ

巻頭に地図、写真、スケッチ入りの「積雪期の大雪山彙」(佐々保雄、村山林治郎)があり、大雪山登山の総決算的な論稿にたっている。山岳部も夏山から残雪期、厳冬期へ、大雪山から周辺の未知の山へ、そして日高へと活動の場が移ってゆく過程にあった。ほかに積雪期のクマネシリ、ウベペサンケ、ニペソツ、武利岳の登山記録がある。

## 261 北大山岳部々報5

照井孝太郎 / 北海道帝国大学文武会山岳部  
1935 / 786 一ホ

巻頭に「一月の石狩連峰」(徳永正雄)の登山記と考察がある。写真、概念図、天候・気温表を添付し、文末には登山史も記している。ほかに冬のトムラウシ、3月の石狩川がある。

## 262 北大山岳部々報6

葛西晴雄 / 北海道帝国大学文武会山岳部  
1938 / 786 一ホ

石橋恭一郎「忠別川溯行」、中村桑夫「音更川溯行」がある。もはや日高の記録が圧倒的に多くなり、大雪山系登山開拓の終わりを思わせる。

## 263 北大山岳部々報7

橋本誠二 / 北海道帝国大学文武会山岳部  
1941 / 786 一ホ

1938年12月、上ホロカメットクで雪崩のため2名遭難、1940年1月には日高で雪崩に遭い8名遭難の大惨事が続いた。そのため本号は遭難報告と追悼号のようになってしまった。通例の広告もいっさい掲載されていない。おりしも太平洋戦争直前であり、部報も戦中から戦後へ長い空白が始まる。

## 264 北方野草 第14号

編集 高野英二 / 北方野草会  
1996 / 470 一ホ

山野草の培養、繁殖を研究し、自然保護に取り組んでいる北方山草会の会報。14号に札幌の会員、吉野博吉が「幻の花ハゴロモホトトギスに再会して」を寄稿している。この花は天人峽に自生する固有種で、北大教授、館脇操が羽衣の滝に因んで命名した。

## 265 北方林業 2014年5月号

北方林業会編集委員会 / 一般財団法人北方林業会  
2014 / 650 一ホ

通巻781号で、表紙写真は、鮫島惇一郎が撮ったキトウシからの眺望。田植え前の田んぼに群青の空が映っている。鮫島は「崖の上に立って展開する情景を眼にしたとき、なぜか戦慄にも似た驚きを隠すことができなかつた」と書いている。東川町の田園風景が表紙になっているので大雪山文獻書誌集に記録した。

## その他

小冊子、パンフレット類、絵はがき類、複写物、大雪山文獻とはいえないが関連づけられるもの

## 9-1 その他

### 266 御繪葉書

不詳 / 層雲閣  
不詳 / 一

二つ折りカバーに入った写真絵はがき2種類4枚。「流星の滝」「小函」の景勝を淡いモノトーンで背景に入れ、温泉旅館層雲閣の貴賓室、桂の湯を濃い印刷で浮き出している。カバーに新作民謡「層雲峽小唄」の一節を入れてある。

### 267 銀嶺輝く大雪国立公園の景観

不詳 / TAISHO PHOTO  
不詳 / 一

大雪山で山スキーを楽しむ挿絵を2色カラーで刷った袋に、絵はがきが8枚組。厳冬期の旭岳、オプタテシケ、愛別岳、十勝岳三段スロープから望む富良野岳などのセピア調の写真。深い雪に埋もれた吹上温泉

が唯一の建物の写真。

268 小泉秀雄展 大雪山の父 そして旭川

旭川市博物館 / 旭川市博物館  
1999 / 289 - コ

旭川市博物館が平成 11 年度企画展として小泉秀雄展を 8 月から 9 月にかけて開催した際の案内冊子。旧制旭川中学校（現在の北海道旭川東高校）教諭として 1911 年から 9 年間在職、その間に大雪山をはじめ道内各地で植物を採集、大雪山の山名を定めた小泉の功績を紹介し、愛用品など展示品の解説。

269 国立公園候補地 大雪山風景

札幌鐵道局 / 不詳  
不詳 / -

大雪山を国立公園の候補地として紹介している貴重な写真絵はがき。6 枚組のうちの 5 枚。羽衣の瀧（大雪山麓松山温泉附近にあり）、大雪山旭岳（海拔二千二百九十米）などの説明が付いていて、旭岳は噴気孔から、もうもうたる噴煙が盛んに上がっている。

270 国立公園大雪山層雲峡

大雪山調査会 / 不詳  
不詳 / -

建築間もない「層雲閣」や第七師団旭川衛戍病院分院など、層雲峡の開湯間もないころの歴史的に貴重な写真絵はがきが 9 枚。

271 国立公園大雪山層雲峡

日本名所圖繪社 / 層雲閣  
1933 / -

大雪山が国立公園に指定されたのが 1934 年 12 月 4 日で、その一年前の 1933 年 5 月に手回し良く「国立公園大雪山」とうたって温泉旅館「層雲閣」が発行した。切手を貼るところに「書簡圖繪」とあり、中に手紙を書く通信欄もある。タテ 16cm、ヨコ 10cm の二つ折り表紙の中に、金子常光（鳥瞰図画家、吉田初三郎の弟子）が描いた鳥瞰図（幅 40.5cm）を 5 つに折りたたんで貼り付けてある。鳥瞰図は石狩川にぐるりと囲まれた大雪山の構図で、中央奥に旭岳がそびえ、手前中心部には永山岳、愛別岳、凌雲岳を配置している。鳥瞰図の裏面は写真と説明文で主な山、温泉、「大雪山の唄」（天人閣の創設者、佐藤門治作詞）を紹介している。松山温泉（現・天人峡温泉）は「一大瀑布羽衣ノ滝、敷島滝などあり、其の壮大且つ美麗なる点に於いて天下無敵」とある。

272 国立公園大雪山大観

不詳 / 北海道中部保勝協会  
不詳 / -

モノクロの写真絵はがき 5 枚。層雲峡温泉の溪流に架かる「望岳橋」、雲を呼ぶ北鎮

岳、「奇しき天工」として黒岳招岩の奇岩など。「霊峰大雪山頂上」の朱印が全てに押し込められている。

273 国立公園大雪山風光集

不詳 / 大正写真工芸所 (TAISYO PHOTO)  
不詳 / -

袋入り 16 枚セットの絵はがき。モノクロのセピア調写真で、説明文には英文も附記されている。「憧れの聖峰」の説明は「大雪山の盟主旭岳は二二九〇メートルの高峰にして颯爽たる勇姿と耀やく残雪は其名を恥かしめぬ」。宛て名書き面に「一分の時間も活かせ國のために」など戦時中の啓発文を入れてある。旭岳は他に「白銀の霊峰」「姿見の池」「沼の平より旭岳」など。

274 坂本直行 国立公園大雪山

画 坂本直行 / 北方林業會  
不詳 / -

二つ折りカバーの裏面に、「高根ヶ原より旭岳 (2,290 m)、五月の十勝岳 (2,077 m)、十勝三股高原からピリペツ岳 (1,602 m)、オプタテシケよりトムラウシ岳 (2,141 m) の遠望」と、坂本直行が描いた 4 枚のスケッチ画の解説がある。彩色はない。カバーを開くと、手書きの大雪山地図があり、建物は白銀荘一つのみ。

275 山岳美に輝く 大雪山の景勝

不詳 / 大正写真工芸所 (TAISYO PHOTO)  
不詳 / -

袋入りカラー 8 枚セットの絵はがき。細かい模様が刻まれた特殊な紙を使っているため、カラー写真なのか、彩色画なのか、判然としない。残雪の旭岳、北鎮岳、黒岳、旭岳と、もうもうたる噴気を映す姿見の池など。説明文に英訳を付記している。

276 書簡圖繪 国立公園 層雲峡

不詳 / 印刷 名古屋塩町 澤田昭文社  
不詳 / -

タテ 15cm、ヨコ 45cm の細長い紙に層雲峡を中心に据えた鳥瞰図を描き、裏面に景勝地の写真、層雲閣の案内などを入れている。紙を三回折りたたむとヨコ約 9cm の書簡となる作り。鳥瞰図はまるで山火事のような派手な色で紅葉を描いている。

277 層雲峡 (総天然色)

不詳 / 層雲閣  
不詳 / -

「長江名河、石狩川の水源の層雲峡は雄渾壮大、清幻幽邃の一大峡谷」などと美文調の層雲峡の解説文と、探勝コースのイラストマップを付けた袋入り 8 枚セットの絵はがき。層雲閣の女性風呂「桂の湯」の写真には「アイヌ盛の頃天然痘はやり彼等は神

罰として恐れ死人続出その時誰言うとなく層雲別の山奥に有る神様の裾から湧出る不思議な湯こそ救世主であると喧伝され皆競て入湯全治した」と伝説の紹介がある。

278 層雲峡の唄 峡のかほり

不詳 / 層雲閣  
不詳 / ー

ブック型に切ったタテ 15cm (短い部分は 13cm) ヨコ 9cm の変形案内書兼はがき。切手を貼る欄に「通信文ヲ認メタルトキハ三銭切手、認メザルトキハ二銭切手」とある。横幅約 44cm の長めの紙を五つ折りにし、そこには「層雲峡へ車窓の展望」のドライブ周辺マップをイラストで書き、途中の「天狗ノ引キ白岩」は野口雨情が命名したもの。この岩の名は定着しなかった。「層雲峡の唄」「大雪山の唄」の歌詞入り。層雲閣の宿泊料は二食付き 3 円～6 円。貸別荘(八畳一室、四畳半一室、浴場、自炊場付) 5 人まで 5 円。

279 層雲峡八趣

不詳 / YAMADASI KAIGAKENKYUKAI  
不詳 / ー

層雲峡をモノクロ写真で紹介する絵はがき 7 枚 (本来は 8 枚組)。石狩川の真ん中に蓬萊岩があり、岩に乗る形で蓬萊橋が架かり、対岸に層雲閣が写っている一枚など、層雲峡開湯間もないころがしのばれる。通信欄にデザインを入れ、一工夫あるのが特徴。

280 第 37 回全日本登山体育大会開催要項「大雪山 カムイミンタラの集い」

第 37 回全日本登山体育大会実行委員会  
1998 / 786 ーダ

1998 年 7 月 10 日から 12 日まで上川町、層雲峡温泉、大雪山で開催された第 37 回大会の要項。副題が「大雪山カムイミンタラの集い」。主管する北海道山岳連盟の阿地政美会長あいさつ、高原温泉緑岳など 4 登山コースの紹介など。

281 大雪山国立公園

不詳 / UNIONPOSTALE UNIVERSELLE  
不詳 / ー

雪化粧の旭岳、新緑の羽衣の滝、残雪と高山植物の花などモノクロ写真 7 枚の絵はがき。

282 大雪山国立公園層雲峡名勝繪葉書

不詳 / 層雲閣  
不詳 / ー

袋入りの絵はがき 2 枚。イワヒゲのモノクロ写真をバックにカラー写真「流星の滝」「銀河の滝」を入れ、「仰ぎみる銀河の瀧は岩しぶき 氷るがまゝに細りてありき」(新島善直) の和歌をいれた凝った作り。大函、小函の写真には野口雨情が作った「大函小函」

を載せているが、雨情の唄とは趣が違う替え歌になっている。

283 大雪山国立公園の代表的渓谷美 勝仙峡の所々

不詳 / 大正写真工芸所  
不詳 / ー

忠別川上流の峡谷美を小泉秀雄が「勝仙峡」と名付けたが、その名前で天人峡を宣伝するモノクロ写真はがき 8 枚組。羽衣の滝には大町桂月が詠んだ漢詩を添えている。敷島の滝、天人ヶ沼、姿見の池、旭岳などの名勝の他、今はない東川尋常高等小学校の木造校舎の全景が一枚入っている。当時の児童数は現在よりもはるかに多く、校庭に 30 列ほど、ずらりと整列して印象深い一枚になっている。

284 大雪山国立公園北部登山地図

東川エコツーリズム推進協議会 / 北海道地図(株)  
2014 / ー

2 万 5 千分の 1 地形図。登山者に利用してもらい易いようにポケットサイズに折りたたんである。山楽舎 BEAR・佐久間弘、風の便り工房・佐藤文彦の協力で磁北線やコースタイム、避難小屋、トイレ情報なども入れた。

285 大雪山登山案内

不詳 / 層雲峡観光協会  
1966 / ー

広げるとタテ 1 m 55cm、ヨコ 75cm の大きな大雪山の登山地図で、折りたたんでタテ 26.5cm、ヨコ 12.5 cm の携行版になっている。地図の裏面に大雪山国立公園のあらまし、地質と地形、構造土、高山植物、動物、昆虫、登山基地、山小屋などを紹介している。

286 大雪山 (登山地図)

監修 旭川山岳会 / 北海道地図(株)  
1985 / 291 ーダ

ケース入りの 2 万 5 千分の 1 の登山地図に、「大雪山への誘い」というガイドブックがついていて写真もたくさんある。地図も詳しく見やすく、これ以上の登山地図はないだろう。その後も新しい地図が発行されている。

287 大雪山の唄

不詳 / 大正写真工芸所 (TAISYO PHOTO)  
不詳 / ー

和服美人を描いたカラーイラストの袋に入った 8 枚組絵はがき。大雪山の山岳写真や姿見の池、イワウメなどのモノクロ写真を上部に置き、下三分の二くらいのところに縦書きで「大雪山の唄」を入れ、イラストを添えている。唄は中山晋平作曲、新北秋作詩、イラストには○の中に新工郎とあ

る。姿見の池とセットになった唄は「姿見の池 萬年雪もヨ（アラシヨ）解けた思ひの秘めたる思ひの 水鏡水鏡」。他に「雲の表に頂き見せてヨ（アラシヨ）空へ連る凜と連る 大雪山ヨ大雪山ヨ」。すべての唄の末尾には、「山はお山よドンドと胸は燃えて火を噴く男意気」と付いている。

## 288 大雪山博物メモ

監修・高澤光雄、編集広坂光則 / 日本山岳会北海道支部  
2002 / 402 ーダ

日本山岳会自然保護全国集会在 2002 年 7 月 12 日～14 日、大雪山で開催された際の参加者資料。縦 21cm、横 15cm、全 39 ページ。大雪山の概説、地理、火山の生成、登山と観光の歩み、動植物、自然保護概要、主要登山コース地図など。

## 289 たいせつノート

編集 高澤光雄 / 平野明  
1988 / 786 ーダ

日本山岳会北海道支部 20 周年の 1988 年 7 月 17 日に行われた「大雪の集い」の豆本。旭岳、裾合平周辺の高山植物や大雪山固有種の紹介、一等三角点測量方位図、山名の由来、登山小史、山の歌など収録。

## 290 大雪の山やま

編集 安田治 / 寺島一男  
1976 / 786 ーダ

1976 年、日本勤労者山岳連盟主催、第 10 回全国登山祭典の葉。全 46 ページ。国府谷盛明「大雪山の地質と生いたち」、鮫島惇一郎「大雪山の高山植物」、親と子の登山などタイプ別に記念登山コースを紹介している。

## 291 十勝嶽大観

佐藤翠陽 / 札幌・佐藤翠陽  
不詳 / ー

二つ折りカバーに、写真絵はがき 4 枚。カバーの写真は、馬櫓二台にお客が乗って、吹上温泉へ雪野原を行く風景。説明文として、交通は夏、自動車で片道 50 分、一人 1 円、冬は馬櫓で片道 4 時間、一人 80 銭、宿泊は吹上温泉、勝岳荘、白銀荘の 3 軒。絵はがきは三段スロープのスキー滑降、樹氷、雪の博士・中谷宇吉郎が雪の結晶を観察する基地にしていた白銀荘など。

## 292 十勝岳連峰・トムラウシ山（登山地図）

監修 旭川山岳会 / 旭川山岳会  
1994 / 291 ート

ケース入りの 2 万 5 千分の 1 の登山地図に、「十勝岳連峰への誘い」というガイドブックがついていて写真もたくさんある。『大雪山』よりさらに進化させた登山地図である。山地は標高が変わったり、林道が伸びたり、がけ崩れで廃道になったり、登山道も歩か

なければ廃れてしまうなど、常に変化している。地図もガイドブックも最新情報ではないことを心得て登山しなければならない。

## 293 日本百景層雲峡繪葉書

不詳 / 大雪山調査会  
不詳 / ー

二つ折りカバーに、層雲峡温泉や峡谷美、滝を写したモノクロ写真絵はがきを 16 枚入れて、1 組になっている。印刷は「東京渋谷・第一グラビア印刷」。層雲峡温泉をまだ塩谷温泉と呼んでいたころに完成した「層雲閣」の全景、蓬莱橋、新築間もない蓬莱閣と温泉入浴建物、第七師団旭川衛戍病院分院と九十九の滝、小奈美橋、今では忘れ去られた橋や建物など貴重な写真が含まれる。

## 294 東大雪 ～四季の採光～

不詳 / フォトライブラリー「大地の讃美」  
不詳 / ー

瀨瀨政由の「東大雪 四季の彩光」の文を入れ、カラー写真 10 枚組絵はがき。十勝三股のルピナス、三国峠の高い橋げたになった国道、秀峰ニベソツ山など。

## 295 冬山の北海道 銀嶺を行く

不詳 / 北海道絵葉書倶楽部  
不詳 / ー

北海道絵葉書倶楽部が発行した第二集で、何枚のセットだったか分からないが東川町には十勝岳のモノクロ写真絵はがき 3 枚がある。「銀嶺征服」はリュックを背負ったスキーヤーが十勝岳の斜面を鮮やかに滑っている構図。「静かに霽れし空に刻む玲瓏たる聖峰の処女雪に早くも印せられる二條の白線！」

## 296 北海アルプス 大雪山旭岳勝景

不詳 / 松山温泉場  
不詳 / ー

薄い紙袋入り、写真絵はがき、11 枚。羽衣の滝の写真がないので、それを入れると 12 枚組だったのだろうか。忠別川沿いにそそり立つ屏風岩、七福岩、流木で橋台のやぐらを組んだ珍しい鑛泉橋、川岸より一段高いところに建つ松山温泉場、水量豊かな敷島の瀧、周りの壁に石を積み、屋根にも石が乗る旭岳の石室、姿見の池、旭岳地獄谷の噴火口、山頂からの眺めなど。すべてに「旭嶽 登山記念 松山温泉」の丸スタンプが押してある。

## 297 北海アルプス 大雪山繪葉書

不詳 / 大雪山調査会  
不詳 / ー

二つ折りカバーは黒岳の招き岩のスケッチで、ブルーを基調にした 2 色刷り。中の絵はがき 16 枚組はモノクロ写真。山並の写真が大半を占めているなか、19 人の登山者が

凌雲岳、北鎮岳をバックに座って握り飯を食べている一枚が目を引き。登山者のうち女性が7人、着物姿が1人いる。帽子を飛ばされないようにあご紐を付けている。傍らには長い金剛杖。他に「化雲岳頂上ヨリ十勝岳ノ爆発ヲ見ル」には、遠景の十勝岳山頂から黒い煙が噴き上げ、たなびいている瞬間をとらえている。

298 北海アルプス 大雪山繪葉書

画 村田丹下 / 大雪山調査会  
1927 / -

夕焼け空にオオワシがはばたくイラストを刷った、二つ折り袋に入った村田丹下の「北海道大雪山洋画展覧会」の絵はがき7枚。いずれにも「大雪山登山記念、黒岳石室、3.8.23」の円スタンプが押ししており、昭和3年8月23日の登山記念と特定できる。

299 北海道層雲峡

不詳 / 不詳  
不詳 / -

モノクロ写真の絵はがきが5枚。「神工鬼斧の妙を極めた」小函、大函の絶景のほか、「峡谷に光る神仙橋」がある。真新しい木材でトラスを組んだ幾何学模様の橋げたが美しく、史料的に興味深い一枚。

300 北海道大雪山洋画展覧会

画 村田丹下 / 大雪山調査会  
不詳 / -

大雪山調査会主催、丸ビル美術クラブ後援で画家、村田丹下の「北海道大雪山洋画展覧会」が1927年秋、東京で開かれた。そのとき、丹下の原画絵はがきが16枚セットで発売された。丹下は実際に山に登ってスケッチした画家なので、北鎮岳から荒井岳方面の遠望、雲ノ平のお花畑、旭岳の紅葉などを鮮やかに描いている。

301 北海道の風景

写真 岡田紅陽 / 北海道景勝地協会  
不詳 / -

大雪山国立公園第3輯として制作した袋入り、モノクロ写真絵はがき。残雪が縞模様を作る旭岳、噴煙を上げる十勝岳、然別湖など、5枚。

302 北海道の誇り絶勝層雲峡

吉田初三郎 / 旭川商工会議所  
不詳 / -

絵はがきの画家と印刷所が「北海道開発大博覧会」の絵はがきと同じことから、同時代に発行されたものか。商工会議所の重鎮、荒井初一は層雲峡開発の功労者でもある。絵はがきは1枚で、荒井が建てた層雲閣と石狩川にかかる蓬莱橋、バックに雪の黒岳と柱状節理の奇岩を組み合わせた構図。

303 北海の秀峰 国立公園大雪山の驚異

不詳 / 北海道絵葉書倶楽部  
不詳 / -

大雪山の冬山スキーのモノクロ写真絵はがきが8枚、折りたたみのカバー付き。広大な雪景色、雲海、夕焼けを浴びる花の台尾根など、カラーでないのが惜しいが、好天に恵まれた山スキーの醍醐味が伝わってくる。

304 北海の霊峯 大雪山と層雲峡 附塩谷温泉案内

不詳 / 不詳  
不詳 / 291 -ホ

タテ25cm、ヨコ53cmの長い紙をタテに1回、ヨコに三回折って、掌に乗る小さなサイズ（タテ12.5cm、ヨコ9.5cm）に畳んだ案内書。印刷、製作の年月日、発行者、著者を特定する記述がない。「北海道中央高地、大雪山と登山案内」の記述は小泉秀雄が担当したか、あるいは小泉の著書を下地にしたと思われる。層雲峡温泉の表現は一切なく、塩谷温泉の紹介となっており、「塩谷温泉層雲閣」の写真は建築足場のやぐら組みが写っている。1927年に開かれた「大雪山夏期大学」の講師を務めた馬場孤蝶が詠んだ和歌や句も載せている。国立公園の文字がないので1934年以前の製作と思われるが、史料として興味深い。

305 雪の王者 大雪山は招く

不詳 / 愛山溪温泉  
1937 / -

12.4.3と12.4.5の日付スタンプが押しであるので、昭和12年の絵はがきと推量する。スタンプは旭川森林事業所・安足間登山口と、愛山溪温泉の2種類。愛山溪から入山する冬山のモノクロ写真8枚組。山頂を極め、雲海上で三人がポーズをとっていたり、急峻な鋸岳を目指すシーンや永山岳三角点断崖絶壁に行く厳しいシーンがあり、花の台尾根でシーデボーなど、人物を配して山スキーの醍醐味を紹介している。

9-2 その他

306 美しの山水

不詳 / 日本食堂車協会  
不詳 / -

北海道線第2輯として大雪山、層雲峡、十勝岳など5枚セット絵はがきで食堂車協会が販売したうちの3枚。両岸に柱状節理が聳え立ち、間を石狩川が流れる層雲峡と、冬の十勝岳などのモノクロのセピア調写真。

307 北海道開発大博覧会

吉田初三郎 / 京都祇園観光社  
不詳 / -

第1輯に飛田周山の彩色画「大雪山黒岳」絵はがき、第2輯は望月春江が描いたス

ズランの彩色画の袋と、田中咄哉州の彩色画「層雲峡」。緑の木立の中を釣竿を担いだ菅笠の男が一人行く姿を描いている。第1、第2輯とも、何枚組だったのかは不明。

### 308 北海道の風光

不詳 / 札幌鐵道局  
不詳 / ー

北海道開発大博覧会は1950年7月から8月にかけて40日間、旭川市内常盤公園で開かれた。絵はがきはその年か前年の発行か。当時、鳥瞰図画家として著名だった吉田初三郎が旭川が分かるように、180cm×90cmを8枚連ねた大きな鳥瞰図を描いた。吉田は記念絵はがきも描き、会場「鳥瞰図」には遠景に大雪山があり、「大雪山と御花畑」「旭橋と大雪山」の3枚が残っている。

## 9-3 その他

### 309 思い出 Nutap Nutap Memorial

とむらヒロ&みの白雲 / ロッジヌタプカウシペ  
2004 / 音楽CD

大雪山が大好きな二人の大学教授が作詞・作曲、演奏、歌、ジャケットの写真、デザイン、すべてに二人のオリジナル。「裾合のうた」「ヌタプ音頭」「ヌタプの子守歌」「遙かなりトムラウシ」など15曲。ペンネーム「みの白雲」が東大教授（環境学）味埜俊、ペンネーム「とむらヒロ」が岩手大農学部教授、広田純一。合作のときは「とむら白雲」を使う。才能がうらやましい。

### 310 Nutapへようこそ welcome to NUTAP

とむら白雲 / ロッジヌタプカウシペ  
不詳 / 音楽CD

大雪山が大好きな二人の大学教授が旭岳温泉ロッジ・ヌタプカウシペで作詞、作曲して、楽器も演奏しながら歌う音楽会を楽しんでいる。「森よ目覚めよ」「ここは大雪山」「ヌタプへ行こうの歌」など14曲すべてが大雪山の讃歌である。

### 311 ナキウサギの世界

編集 枋内信男 / ナキウサギふあんくらぶ  
1997 / 489-ナ

氷河期の生き残りといわれるナキウサギの生態をDVDにした。撮影地は然別湖近くの風穴のある地帯と十勝岳周辺。雄と雌で鳴き声が違う、葉を蓄えて越冬食料にする、タンパク質補給で糞を食べる、道路開発や車の排気ガスで存亡の危機にあるなど、子供でもわかる目線で作られている。南修治の「ナキウサギの歌」も効果的。大阪市立大学生物学教室、川道武男が協力、(財)北海道新聞野生生物基金の助成を受けた作品。

### 312 国立公園大雪山

製作 大雪山国立公園、東川村開発期成会 / 後援 東川村観光協会、天人峡温泉株式会社、道北乗合自動車株式会社、旭川電気軌道株式会社 / 監督 園田規矩 / 企画 金野昌祐 / 撮影 飛弾野数右衛門 / タイトル 森下滋  
不詳 / 映画DVD

1950（昭和25）年頃に撮影したと思われる観光映画。大雪山国立公園の表玄関として旭川駅が初めに紹介される。駅前から「天人峡行」のボンネットバスが出発。また、旭川4条駅から電車「1001」号が出るシーンも映る。東川村から天人峡へ向かう途中に江卸発電所などが映り、険しい念仏峠では乗客がバスを降りて歩く珍しいシーンがある。天人峡の柱状節理、羽衣の滝、瓢箪沼、勇駒別温泉の仰岳荘、白雲荘、旭岳ふもとの散策、夫婦沼など昔の温泉や名所が次々と映し出される。無声映画をDVDで保存。

### 313 山の幸

製作 石原木材合資会社 / 後援 旭川林務署、東川村 / 企画 木村重太郎 / 撮影 飛弾野数右衛門  
不詳 / 映画DVD

東川村は1936（昭和11）年に撮影機を購入、「東川ニュース」や映画を作り、村民の娯楽として映画会を開いていた。「山の幸」は、1955年頃に製作。字幕に「北海道の三大美林の一つである大雪山麓に於ける『山の幸』開発に挑む逞しい冬山造材」とある。深い雪の中の造材飯場が映り、大勢の作業員が冬山に入っていく。巨木を大きな窓ノコで切り、マサカリをたたき込み、人力で切り倒す。丸太を束にした上にまたがって雪の斜面を滑り降りる人間バチバチや馬のバチバチの迫力ある映像が印象に残る。無声映画をDVDで保存。

### 314 山は呼ぶ

製作 旭川電気軌道株式会社 / 後援 東川村観光協会、旭岳温泉勇駒荘 / 企画 中屋義長 / 撮影 飛弾野数右衛門  
不詳 / 映画DVD

1955（昭和30）年頃の撮影で、当時としては珍しいカラー映像。旭川駅から始まり、旭橋、護国神社、上川神社など旭川市内の様子が続き、東川村までの電車が映る。志比内からでこぼこ道をバスが進み、旭岳がくっきり見える。柱状節理、天人峡温泉宿の遠景、当時は温泉街に遊具や売店もあった。羽衣の滝、水量豊富な敷島の滝、勇駒別温泉の湯の沼、天女ヶ原などが続き、女性や子供が交じた東川村の人たちがキバナシャクナゲ、イワウメなどが咲く姿の池周辺の散策を楽しんでいる映像が印象的。無声映画をDVDで保存。

目録に載せた本、資料は東川町役場2階町史編さん室と文化交流館にあります。

## 著者・編者名 (50 音順)

青柳栄次  
日本 200 名山を登る (上巻) .....25  
日本を登る 百名山 (上巻) .....25

赤松勲  
山とスキー 第 2 年合本 .....36

秋庭隆  
日本地名大百科 .....12

秋元節男  
大雪山 (エアリアマップ山と高原地図 41 旭川・層雲峡・東大雪・十勝連峰) .....22

旭川勤労者山岳会創立 10 周年記念誌編集委員会  
碧水 Vol.3 .....37

旭川山岳会  
大雪山 (登山地図) .....40  
十勝岳連峰・トムラウシ山 (登山地図) .....41

旭川電気軌道株式会社  
山は呼ぶ .....43

旭川市博物館  
小泉秀雄展 大雪山の父 そして旭川 .....39

朝日新聞社北海道支社  
北海道の自然 100 選 .....19

朝日新聞北海道支社報道部  
北を飛ぶ .....27  
北海道自然 100 選紀行 .....19

朝比奈英三  
北大山岳部五十周年記念誌 .....37

阿地政美  
北の峰々とともに 道岳連 50 年のあゆみ .....37

荒井魏  
日本三百名山 .....11

アルプ編集委員  
アルプ .....34

池田末則  
日本山岳ルーツ大辞典 .....11

池田常道  
岩と雪 60 号 .....34

石川球太  
牙王 (少年マガジン収録) .....35

石川啄木ら 30 名  
太古の原野に夢見て .....31

石川俊夫  
北の火山 .....15

石原木材合資会社  
山の幸 .....43

磯部精一  
北海道地名解 .....13

一原有徳  
小さな頂 .....31

伊藤秀五郎  
北の山 .....30

伊藤徹秀  
北紀行 風の恋歌 .....30

井上功夫  
ワイルドビュー .....36

井上直一  
海にも雪があった .....17

監修 井上靖、写真 森田敏隆  
日本国立公園 (全 4 巻) .....28

茨木猪之吉  
山の画帖 .....33

今西錦司  
名峰百景 (決定版 自然の心) 家庭画報編 .....36

今村朋伸、鮫島惇一郎  
山と私たち .....16

岩間正夫  
世界山岳百科事典 .....11

ウッドペッカー Vol.2 1985 編集委員会  
ウッドペッカー vol.2 .....10

梅木通徳  
蝦夷古地図物語 .....14

梅沢俊  
諸国名山案内 [第 1 巻] 北海道 .....24  
大雪山 北海道山の花図鑑 .....24

梅沢俊、伊藤健次  
北海道百名山 .....26

梅沢俊、瀬尾央  
北海道の山々 新版・空撮登山ガイド 1 .....26

NHK 北海道本部  
北海道地名誌 .....13

江幡三郎  
北大山岳部々報 3 .....38

エムジーコーポレーション  
北海道隠れ湯 28 選 .....25

遠藤一郎  
道草山行ひとり旅 .....19

大内論文、堀井克之  
最新山のガイド—北海道の山と谷 (改訂版) .....24

相賀徹夫  
山 生きている大地 .....13

大野精七  
記念—創立拾五年 .....37

大橋弘一  
北海道野鳥観察地ガイド .....13

大山正信  
町医者の記—おじさんのハンドバッグ .....32

岡 潔、茅誠司、藤岡由夫  
中谷宇吉郎随筆選集第 2 巻 .....32

岡田紅陽  
北海道の風景 .....42

小野寺淳子  
新北海道の民営温泉 .....24

小原弘也  
大雪山 .....22

科学教育研究協議会旭川サークル編  
上川盆地の自然 巡検テキスト .....23

葛西晴雄  
北大山岳部々報 6 .....38

春日俊吉  
山岳遭難記 1 .....18

片山修三  
冬山への招待 .....25

加藤睦奥雄、沼田眞、渡部景隆、畑正憲  
日本の天然記念物 .....28

角川文化振興財団 (代表・加藤楸邨)  
北海道・東北ふるさと大歳時記 .....32

加納一郎  
大雪山国立公園 林業解説シリーズ 16 .....22  
山とスキー .....36

蒲谷鶴彦  
日本野鳥紀行 .....12

神山健  
北の岳友とともに 北海道山岳連盟 60 周年記念誌 .....37

カムイミントラ編集室  
カムイミントラ .....34

川口邦雄  
日本の山 100 .....28

川崎吉光  
日本百名山 登山案内 .....25

川端康成、佐藤春夫、志賀直哉  
現代紀行文学全集 山岳編 (上) .....30

川道武男  
ナキウサギの声が聞きたい .....10  
日本動物大百科 .....12

監修 環境庁自然保護局国立公園課、編集 財団法人国立公園協会  
国立公園図鑑 .....11

北林利仁  
切手の中の北海道 .....27

日下哉  
北海道安全な登山 .....25

串田孫一  
北海道の旅 .....32

串田孫一、今井通子、今福龍太  
大雪山 日本の名山 01 .....31

口野哲夫  
中谷宇吉郎ゆかりの地 .....21

熊原政男  
登山の先駆者たち .....21

栗田希代子  
句集 日本百名山 .....30

栗谷川健一  
カラー北海道 .....23

小疇尚、福田正己、石城謙吉、酒井昭、佐久間敏雄、菊池勝弘  
日本の自然・北海道 .....15

小疇尚  
山を読む .....16

小池省二  
北の火の山 .....17  
続 北の火の山 .....18

小泉武栄  
日本の山と高山植物 .....15  
日本の山はなぜ美しい .....15  
山歩きの世界 .....16  
山の自然学 .....16  
山の自然教室 .....26

小泉武栄、赤坂憲雄 自然景観の成り立ちを探る …… 15	山岳写真集団 わが心の山 …… 29	大雪山への誘い …… 37
国鉄山岳連盟 駅から登れる山 …… 23	塩谷忠 層雲峡案内一附大雪山登山案内 …… 22	たいせつノート …… 41
国立大雪青年の家 十勝岳連峰の自然と野外活動 …… 23	式正英 自然の博物誌 <山> …… 18	北海道登山史年表 …… 19
後藤憲太郎 大雪山に生きた男 天野市太郎先 生を偲んで …… 19	四手井綱英、林知己夫 森林をみる心 …… 15	山旅句 エッセイ集 …… 33
後藤茂樹 夏山への招待 …… 25	清水敏一 大雪山 一神々の遊ぶ庭を読む …… 10	高澤光雄、広坂光則 大雪山博物メモ …… 41
小林昭裕、愛甲哲也 利用者の行動と体験（自然公園シ リーズ 2） …… 16	清水長正 百名山の自然学 東日本篇 …… 28	高田勝、叶内拓哉 野鳥の羽ハンドブック …… 13
小林實 十勝の森林鉄道 …… 11	示村貞夫 旭川明治屋の百年 …… 19	高頭式 復刻版 日本山嶽志 …… 12
小林義正 山と書物／続・山と書物 …… 16	写真文化首都「写真の町」 東川町 大雪山 一神々の遊ぶ庭を読む …… 10	高野英二 北方野草 第14号 …… 38
近藤信行 山の旅 大正・昭和篇 …… 33	庄子康 ROS ～新たな自然公園管理に向 けて～ …… 14	高橋定昌 日本岳連史 …… 35
財団法人日本自然保護協会 十勝川源流部原生自然環境保全地 域調査報告書 …… 15	人文社観光と旅編集部 郷土資料事典一北海道・観光と旅 …… 10	滝本幸夫 北の山・記録と案内 …… 24
斎藤一男 日本の岳人たち …… 21	菅原靖彦 北海道・ファミリー登山 …… 26	北の山の栄光と悲劇 …… 18
坂倉登喜子 女性のための百名山 …… 24	鈴木欣司 写真・長谷川和 良 かわいいナキウサギ …… 26	武内正 日本山名総覧 …… 12
坂本直行 坂本直行 国立公園大雪山 …… 39	須藤宣之助 北大山岳部々報 2 …… 38	辰野勇 岳人 …… 34
雪原の足あと …… 27	関口隆嗣 パークボランティアのための大雪 山自然解説マニュアル …… 23	立松和平 百霊峰巡礼 第二集 …… 21
佐々木正紀 週刊続日本百名山 …… 24	全国登山口調査会 北海道登山口情報 350 …… 25	館脇操、編集 中野正彦、 吹上芳雄、千廣俊幸 北海道森林植物 写真図譜（I、 草本篇） …… 28
笹本稜平 分水嶺 …… 29	全日本登山体育大会実行委 員会 第37回全日本登山体育大会開催 要項「大雪山 カムイミンタラの 集い」 …… 40	館脇操、編集 中野正彦、 中村幸雄、吹上芳雄、三角 亨、鮫島惇一郎 北海道森林植物 写真図譜（II、 木本篇） …… 29
佐竹義輔 アルプスの自然 お花畑 …… 27	大雪山国立公園、東川村開 発期成会 国立公園大雪山 …… 43	田辺和雄 山とお花畑 2 …… 29
札幌鐵道局 大雪山国立公園 昭和九年版 …… 22	大雪山自然学校 すがたみのはなたち …… 26	文・谷川俊太郎、写真・吉 田六郎、企画構成・吉田覚 きらきら …… 26
国立公園候補地 大雪山風景 …… 39	「大雪山自然観察講座」を 記録する会 ウッドベッカー vol.1 …… 10	多摩雪雄 一等三角点のすべて …… 14
佐藤庫之介 大雪山国立公園層雲峡 …… 22	大雪山調査会 層雲峡 大町桂月記念號 …… 19	田村健太郎、青木妙子、若 林里江 観光北海道じてん …… 24
佐藤翠陽 十勝嶽大観 …… 41	国立公園大雪山層雲峡 …… 39	依浩三、鮫島惇一郎、成瀬 廉二、八木健三 水と私たち …… 16
佐藤孝夫 大雪山 …… 26	高木直子、渡辺裕美子、中 村直弘、岩本恭子 イトナンリルウ 山情報 大雪山 2001年 総集編 …… 17	依浩三、辻井達一 森と私たち …… 16
佐野高太郎 北海道リスとナキウサギの季節 …… 27	高澤光雄 北の山の夜明け …… 20	丹征昭 北の溪谷 …… 17
鮫島和子 貼り絵に託した 四季 …… 28	敬山愛林 秀岳荘創業 50周年記 念誌 …… 10	北の山旅 …… 18
鮫島惇一郎 画文集 北ぐにの花暦 …… 27	山書趣味（1～10巻） …… 37	千葉圭介 Freedom 一大雪の動物たち一 …… 26
北の森の植物たち …… 18	秀岳荘創業 50周年記念「山の素 描」の執筆者たち …… 20	辻井達一、渡辺祐三 北海道の湿原 …… 29
草と樹 …… 18	大雪山讃歌 …… 29	照井孝太郎 北大山岳部々報 5 …… 38
山とその花 …… 33		東野勇、米田松栄、滝本堅 三郎、横内勇、花本哲行、 岡島博 東川の山野草 …… 25
文 更科源蔵、版画 松見 八百造 北海道繪本 …… 32		戸川幸夫 牙王物語（上）（下） …… 29
文 更科源蔵、版画 大本 靖 続・北海道繪本 …… 32		戸川幸夫動物文学全集 3 …… 29
山岳研究会 山の資料 登山ハンドブックシ リーズ 6 …… 16		野獣撮影 …… 33

徳永正雄 北大山岳部々報4 ……………38	畠山豊、神原悦子、沢田睦 代、城英利、長瀬久雄、西 川陽子 上ホロの空遠く 高橋こずえ追悼 の本 ……………17	北海道文学館 北海道文学百景 ……………32
徳久球雄 コンサイス日本山名事典（修正 版） ……………11	早川禎治 クマネシリ紀行 ……………29 わが山、源流へのおこがれ ……………33	北方林業会編集委員会 北方林業 2014年5月号 ……………38
徳久球雄、石井光造、竹内 正 三省堂日本山名事典 ……………11	林和夫追悼集実行委員会 悪場を超えて—林和夫追悼— ……………20	堀淳一、山口恵一郎、籠瀬 良明 地図の風景…北海道編I道南・道央 ……28 地図の風景…北海道編II道東・道北 ……28
栃内信男 ナキウサギの世界 ……………43	原田一典 お雇い外国人—開拓 ……………20	本郷常幸、安川茂雄 大島亮吉全集 全5巻 ……………30
栃内吉彦 山談花語 ……………33	原康夫 山と溪谷 No.527 ……………36	本多勝一 北海道探検記 ……………19
栃木義正 北海道 集落地名地理 ……………13 北海道の地名索引 ……………13	針重敬喜 武俠世界増刊 山嶽踏破號 ……………36	松枝大治、山崎敏晴 復元展示 北大理学部教授室 N123 中谷宇吉郎研究室 ……………21
戸塚新太郎 北の植物 ……………30	東 晃 雪と氷の科学者 中谷宇吉郎 ……………21	三浦綾子 果て遠き丘 ……………32
とむら白雲 ヌタブへようこそ welcome to NUTAP ……………43	東川エコツーリズム推進協 議会 歩こう！大雪山・旭岳の自然 ……………22 大雪山国立公園北部登山地図 ……………40	水越武 カムイの森 ……………27
とむらヒロ&みの白雲 思い出 ヌタブ Nutap Memorial ……43	樋口敬二、池内了 中谷宇吉郎集 ……………31	三田博雄 山の思想史 ……………21
長尾宏也 日本山岳風土記 6 北海道の山々 ……18	平岡昭利 北海道 地図で読む百年 ……………14	湊正雄 おもひ出（思ひ出） ……………20 瀬戸君 高田君 追悼録 ……………20
中谷泰治 大雪山国立公園旭岳・天人峽自然 観察ガイド ……………22	深田久弥 山頂の憩い ……………30	宮下岳夫 ステップアップ登山 ……………24
長縄三郎 なぜ排除するのか ……………17	藤木九三、川崎隆章 山の風物誌 登山全書随想編2 ……………33 山の詩歌 登山全書随想編3 ……………33	宮之内一平 造材飯場 ……………31 被写体 ……………32
中西敏貴 power of light ……………28 光の彩 ……………28	宝文館出版 北海道の山々—山の風土とその 紀行 ……………32	村石利夫 日本山岳ルーツ大辞典 ……………11
中村清太郎 ある偃松の独白 ……………30	北大山岳館運営委員会 北大山岳館 蔵書ガイド ……………12	村上久吉 中部の夏山—大雪山及其附近 ……………23
中谷宇吉郎 イグアノドンの唄 ……………30 寺田寅彦の追想 ……………31	細川広子 カムイミンタラ VOL.31 ……………37	村田丹下 北海アルプス 大雪山繪葉書 ……………42 北海道大雪山洋画展覧会 ……………42
中谷宇吉郎雪の科学館 寅彦と宇吉郎の絵画展 ……………28	北海タイムス社 北大百年の百人 ……………21	村本輝夫 北の山脈 ……………35
中谷宇吉郎雪の科学館友の 会 中谷宇吉郎ゆかりの人 ……………21	北海道、北海道新聞社、 NHK 札幌放送局 北海道まちづくり100選 ……………13	望月達夫 遠い山近い山 ……………18
ナキウサギふあんくらぶ ナキウサギつうしん ……………35	北海道教育委員会 大雪山（特別調査報告書） ……………14 北海道の文化財 ……………29	百々瀬満 気軽に北の山 ……………17
有限会社ナチュラリー faura ……………35	北海道山岳連盟 山登りのお役立ちガイド ……………26	八重樫實 北の話 ……………34
成田新太郎 大雪山自然ハンドブック ……………23	社団法人北海道自然保護協 会 自然を読む ……………20	安川茂雄 板倉勝宣書簡集 ……………20
南條康夫 北海道主要山岳登路概況 ……………25	北海道新聞社 変わりゆく大雪 ……………34 画集 北海道の山 ……………27 北へ…異色人物伝 ……………20 再発見 ふるさと北海道 ……………11	安田治 大雪の山やま ……………41
西原義弘 大雪山 一神々の遊ぶ庭を読む ……10	北海道新聞社 変わりゆく大雪 ……………34 画集 北海道の山 ……………27 北へ…異色人物伝 ……………20 再発見 ふるさと北海道 ……………11	保田信紀 大雪山昆虫誌 ……………14
日本山岳会 新日本山岳誌 ……………11	北海道地下資源調査所 旭岳 ……………14 大雪山 ……………14	矢吹勝二 旅（65 北海道特集） ……………35
日本名所圖繪社 国立公園大雪山層雲峽 ……………39	北海道廳拓殖部 北海道ニ於ケル国立公園候補地調 査概要 ……………15	山川力 山旅記 ……………33
BIRDER 編集部 決定版 日本の探鳥地 北海道篇 ……10 フクロウ ……………17		山口章 山と溪谷 No.709 ……………36
橋本誠二 北大山岳部々報7 ……………38		山口和男 ROS 利用者の多様性に応じた 自然公園管理のあり方に関する調 査研究報告書（その2） ……………14
長谷川喜彦 観光北海道 ……………24		山口透 山の素描 ……………36

山崎治 ただ今、八合目一北の絶境・東大 雪日記……………31	板倉勝宣書簡集 安川茂雄……………20	観光北海道じてん 田村健太郎、青木妙子、若林里江 ……24
山と渓谷社 日本の山(山溪カラー名鑑)……………12 日本の山……………12 HIKER—北海道特集……………35	一等三角点のすべて 多摩雪雄……………14	観光北海道 長谷川喜彦……………24
山本進吾 山は命の母……………19	イトナンリルウ 山情報 大雪山 2001年 総集編 高木直子、渡辺裕美子、中村直 弘、岩本恭子……………17	気軽に北の山 百々瀬満……………17
横内斎 山野巡歴……………31	岩と雪 60号 池田常道……………34	北紀行 風の恋歌 伊藤徹秀……………30
吉田東伍 増補 大日本地名辞書 第八巻……………11	ウッドペッカー vol.1 「大雪山自然観察講座」を記録す る会……………10	画文集 北ぐにの花暦 鮫島惇一郎……………27
吉田友吉 KONOHA……………22 中央高地 登山詳述年表稿……………10 吉田友吉の嵐山百科……………13	ウッドペッカー vol.2 ウッドペッカー Vol.2 1985編 集委員会……………10	北の岳友とともに 北海道山 岳連盟 60周年記念誌 神山健……………37
吉田初三郎 北海道開発大博覧会……………42 北海道の誇り絶勝層雲峡……………42	ウッドペッカー vol.3 大雪山自然観察講座を記録する会 ……10	北の火山 石川俊夫……………15
吉田六郎 雪の結晶……………27	海にも雪があった 井上直一……………17	北の渓谷 丹征昭……………17
芳村宗雄 あるサラリーマンの山……………30	美しの山水 不詳……………42	北の植物 戸塚新太郎……………30
渡辺隆 江戸明治の百名山を行く 一登山 の先駆者 松浦武四郎一……………20	駅から登れる山 国鉄山岳連盟……………23	北の話 八重樫實……………34
渡辺悌二 登山道の保全と管理(自然公園シ リーズ1)……………15	蝦夷古地図物語 梅木通徳……………14	北の火の山 小池省二……………17
渡辺光、中野尊正、山口恵 一郎、式正英 日本地名大辞典・北海道……………12	江戸明治の百名山を行く 一登山の先駆者 松浦武四郎一 渡辺隆……………20	北の峰々とともに 道岳連 50 年のあゆみ 阿地政美……………37
著作名 (50音順)	御繪葉書 不詳……………38	北の森の植物たち 鮫島惇一郎……………18
ROS 利用者の多様性に応じた自 然公園管理のあり方に関する調査研 究報告書(その2) 山口和男……………14	大島亮吉全集 全5巻 本郷常幸、安川茂雄……………30	北の山 伊藤秀五郎……………30
ROS ~新たな自然公園管理に向 けて~ 庄子康……………14	おもひ出(思ひ出) 湊正雄……………20	北の山・記録と案内 滝本幸夫……………24
悪場を超えて—林和夫追悼— 林和夫追悼集実行委員会……………20	思い出 ヌタプ Nutap Memorial とむらヒロ&みの白雲……………43	北の山旅 丹征昭……………18
旭川明治屋の百年 示村貞夫……………19	お雇い外国人—開拓 原田一典……………20	北の山脈 村本輝夫……………35
旭岳 北海道地下資源調査所……………14	岳人 辰野勇……………34	北の山の栄光と悲劇 滝本幸夫……………18
歩こう!大雪山・旭岳の自 然 東川エコツアーリズム推進協議会……………22	画集 北海道の山 北海道新聞社……………27	北の山の夜明け 高澤光雄……………20
あるサラリーマンの山 芳村宗雄……………30	上川盆地の自然 巡検テキ スト 科学教育研究協議会旭川サークル ……23	北へ…異色人物伝 北海道新聞社……………20
ある偃松の独白 中村清太郎……………30	上ホロの空遠く 高橋こず え追悼の本 畠山豊、神原悦子、沢田睦代、城 英利、長瀬久雄、西川陽子……………17	北を飛ぶ 朝日新聞北海道支社報道部……………27
アルプ アルプ編集委員……………34	カムイの森 水越武……………27	切手の中の北海道 北林利仁……………27
アルプスの自然 お花畑 佐竹義輔……………27	カムイミントラ カムイミントラ編集室……………34	記念—創立拾五年 大野精七……………37
イグアノドンの唄 中谷宇吉郎……………30	カムイミントラ VOL.31 細川広子……………37	牙王(少年マガジン収録) 石川球太……………35
	カラー北海道 栗谷川健一……………23	牙王物語(上)(下) 戸川幸夫……………29
	かわいいナキウサギ 文・写真・鈴木欣司 写真・長谷 川和良……………26	郷土資料事典—北海道・観光と旅 人文社観光と旅編集部……………10
	変わりゆく大雪 北海道新聞……………34	きらきら 文・谷川俊太郎、写真・吉田六 郎、企画構成・吉田覚……………26
		銀嶺輝く大雪国立公園の景 観 不詳……………38
		草と樹 鮫島惇一郎……………18
		句集 日本百名山 栗田希代子……………30

クマネシリ紀行 早川禎治 ……………29	秀岳荘創業 50 周年記念「山 の素描」の執筆者たち 高澤光雄 ……………20	大雪山 小原弘也 ……………22
敬山愛林 秀岳荘創業 50 周年記 念誌 高澤光雄 ……………10	週刊続日本百名山 佐々木正紀 ……………24	大雪山―神々の遊ぶ庭を読む 写真文化首都「写真の町」東川町 …10
決定版 日本の探鳥地 北海道篇 BIRDER 編集部 ……………10	書簡圖繪 国立公園 層雲峽 不詳 ……………39	大雪山 北海道山の花図鑑 梅沢俊 ……………24
現代紀行文学全集 山岳編 (上) 川端康成、佐藤春夫、志賀直哉 ……30	諸国名山案内 [第 1 巻] 北海 道 梅沢俊 ……………24	大雪山国立公園 昭和九年 版 札幌鐵道局 ……………22
小泉秀雄展 大雪山の父 そして旭川 旭川市博物館 ……………39	女性のための百名山 坂倉登喜子 ……………24	大雪山国立公園 不詳 ……………40
国立公園候補地 大雪山風 景 札幌鐵道局 ……………39	新日本山岳誌 日本山岳会 ……………11	大雪山国立公園 林業解説シ リーズ 16 加納一郎 ……………22
国立公園図鑑 環境庁自然保護局国立公園課、編 集・財団法人国立公園協会 ……11	新北海道の民営温泉 小野寺淳子 ……………24	大雪山国立公園旭岳・天人 峽自然観察ガイド 中谷泰治 ……………22
国立公園大雪山 不詳 ……………22	森林をみる心 四手井綱英、林知己夫 ……15	大雪山国立公園層雲峽 佐藤車之介 ……………22
国立公園大雪山 大雪山国立公園、東川村開発期成 会 ……………43	すがたみのはなたち 大雪山自然学校 ……………26	大雪山国立公園層雲峽名勝 繪葉書 不詳 ……………40
国立公園大雪山層雲峽 大雪山調査会 ……………39	ステップアップ登山 宮下岳夫 ……………24	大雪山国立公園天人峽自然 観察ガイド 不詳 ……………23
国立公園大雪山層雲峽 日本名所圖繪社 ……………39	世界山岳百科事典 岩間正夫 ……………11	大雪山国立公園の代表的溪 谷美 勝仙峽の所々 不詳 ……………40
国立公園大雪山大観 不詳 ……………39	雪原の足あと 坂本直行 ……………27	大雪山国立公園北部登山地 図 東川エコツーリズム推進協議会 ……40
国立公園大雪山風光集 不詳 ……………39	瀬戸君 高田君 追悼録 湊正雄 ……………20	大雪山昆虫誌 保田信紀 ……………14
KONOHA 吉田友吉 ……………22	層雲峽 (繪天然色) 不詳 ……………39	大雪山讃歌 高澤光雄 ……………29
コンサイス日本山名事典 (修 正版) 徳久球雄 ……………11	層雲峽案内―附大雪山登山案内 塩谷忠 ……………22	大雪山自然ハンドブック 成田新太郎 ……………23
最新山のガイド―北海道の山と 谷 (改訂版) 大内倫文、堀井克之 ……24	層雲峽 大町桂月記念號 大雪山調査会 ……………19	大雪山 (特別調査報告書) 北海道教育委員会 ……14
再発見 ふるさと北海道 北海道新聞社 ……………11	層雲峽の唄 峽のかほり 不詳 ……………40	大雪山登山案内圖 不詳 ……………23
坂本直行 国立公園大雪山 坂本直行 ……………39	層雲峽八趣 不詳 ……………40	大雪山登山案内 不詳 ……………40
山岳遭難記 1 春日俊吉 ……………18	造材飯場 宮之内一平 ……………31	大雪山 (登山地図) 旭川山岳会 ……………40
山岳美に輝く 大雪山の景 勝 不詳 ……………39	増補 大日本地名辞書 第 八巻 吉田東伍 ……………11	大雪山に生きた男 天野市 太郎先生を偲んで 後藤憲太郎 ……………19
山書趣味 (1～10 巻) 高澤光雄 ……………37	続 北の火の山 小池省二 ……………18	大雪山の唄 不詳 ……………40
三省堂日本山名事典 徳久球雄、石井光造、竹内正 ……11	続・北海道繪本 文・更科源蔵、版画・大本靖 ……32	大雪山博物メモ 高澤光雄、広坂光則 ……41
山頂の憩い 深田久弥 ……………30	第 37 回全日本登山体育大 会開催要項「大雪山 カム イミントラの集い」 全日本登山体育大会実行委員会 ……40	大雪山への誘い 高澤光雄 ……………37
山野巡歴 横内斎 ……………31	太古の原野に夢見て 石川啄木ら 30 名 ……31	大雪探検ガイド 動・植物 おもしろ図鑑 不詳 ……………23
自然景観の成り立ちを探る 小泉武栄、赤坂憲雄 ……15	大雪山 北海道地下資源調査所 ……14	たいせつノート 高澤光雄 ……………41
自然の博物誌 < 山 > 式正英 ……………18	大雪山 (エアリアマップ山と高原 地図 41 旭川・層雲峽・東大雪・ 十勝連峰) 秋元節男 ……………22	大雪の山やま 安田治 ……………41
自然を読む 社団法人北海道自然保護協会 ……20	大雪山 日本名山 01 串田孫一、今井通子、今福龍太 ……31	ただ今、八合目―北の絶境・東 大雪日記 山崎治 ……………31

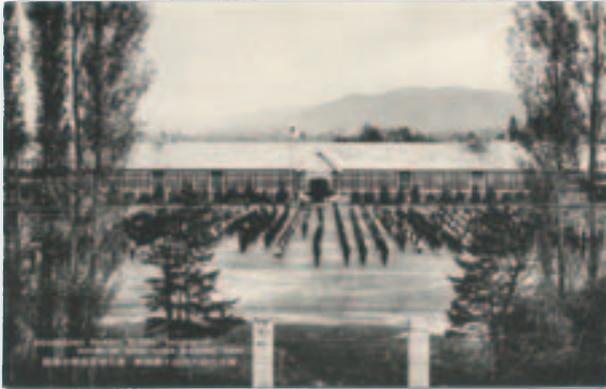
旅 ('65 北海道特集)		日本山岳風土記 6 北海道		被写体	
矢吹勝二	35	の山々		宮之内一平	32
小さな頂		長尾宏也	18	日本百名山 登山案内	
一原有徳	31	日本山岳ルーツ大辞典		川崎吉光	25
地図の風景…北海道編 I 道		池田末則、編著 村石利夫	11	百名山の自然学 東日本篇	
南・道央		日本三百名山		清水長正	28
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明	28	荒井魏	11	百霊峰巡礼 第二集	
地図の風景…北海道編 II 道		日本山名総覧		立松和平	21
東・道北		武内正	12	faura	
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明	28	日本地名大辞典・北海道		有限会社ナチュラリー	35
中央高地 登山詳述年表稿		渡辺光、中野尊正、山口恵一郎、		武俠世界増刊 山嶽踏破號	
吉田友吉	10	式正英	12	針重敬喜	36
中部の夏山-大雪山及其附近		日本地名大百科		復元展示 北大理学部教授	
村上久吉	23	秋庭隆	12	室 N123 中谷宇吉郎研究	
寺田寅彦の追想		日本の岳人たち		室	
中谷宇吉郎	31	斎藤一男	21	松枝大治、山崎敏晴	21
遠い山近い山		日本の自然・北海道		フクロウ	
望月達夫	18	小崎尚、福田正己、石城謙吉、酒		BIRDER 編集部	17
十勝川源流部原生自然環境		井昭、佐久間敏雄、菊池勝弘	15	復刻版 日本山嶽志	
保全地域調査報告書		日本の天然記念物		高頭式	12
財団法人日本自然保護協会	15	加藤睦奥雄、沼田眞、渡部景隆、		冬山の北海道 銀嶺を行く	
十勝嶽大観		畑正憲	28	不詳	41
佐藤翠陽	41	日本の山 (山溪カラー名鑑)		冬山への招待	
十勝岳連峰・トムラウシ山		山と溪谷社	12	片山修三	25
(登山地図)		日本の山		Freedom-大雪の動物たち-	
旭川山岳会	41	山と溪谷社	12	千葉圭介	26
十勝岳連峰の自然と野外活		日本の山と高山植物		分水嶺	
動		小泉武栄	15	笹本稜平	29
国立大雪青年の家	23	日本の山はなぜ美しい		碧水 Vol.3	
十勝の森林鉄道		小泉武栄	15	旭川勤労者山岳会創立 10 周年記	
小林實	11	日本の山 100		念誌編集委員会	37
戸川幸夫動物文学全集 3		川口邦雄	28	北大山岳館 蔵書ガイド	
戸川幸夫	29	日本百景層雲峡繪葉書		北大山岳館運営委員会	12
登山道の保全と管理 (自然公		不詳	41	北大山岳部五十周年記念誌	
園シリーズ 1)		日本 200 名山を登る (上巻)		朝比奈英三	37
渡辺梯二	15	青柳栄次	25	北大山岳部々報 2	
登山の先駆者たち		日本動物大百科		須藤宣之助	38
熊原政男	21	川道武男	12	北大山岳部々報 3	
寅彦と宇吉郎の絵画展		日本野鳥紀行		江幡三郎	38
中谷宇吉郎雪の科学館	28	蒲谷鶴彦	12	北大山岳部々報 4	
中谷宇吉郎集		日本を登る 百名山 (上巻)		徳永正雄	38
樋口敬二、池内了	31	青柳栄次	25	北大山岳部々報 5	
中谷宇吉郎隨筆選集第 2 巻		ヌタブへようこそ welcome		照井孝太郎	38
岡 潔、茅誠司、藤岡由夫	32	to NUTAP		北大山岳部々報 6	
中谷宇吉郎ゆかりの地		とむら白雲	43	葛西晴雄	38
口野哲夫	21	パークボランティアのため		北大山岳部々報 7	
中谷宇吉郎ゆかりの人		の大雪山自然解説マニュアル		橋本誠二	38
中谷宇吉郎雪の科学館友の会	21	ル		北大百年の百人	
ナキウサギつうしん		関口隆嗣	23	北海タイムス社	21
ナキウサギふあんくらぶ	35	HIKER-北海道特集		北海アルプス 大雪山旭岳	
ナキウサギの音が聞きたい		山と溪谷社	35	勝景	
川道武男	10	果て遠き丘		不詳	41
ナキウサギの世界		三浦綾子	32	北海アルプス 大雪山繪葉	
柄内信男	43	貼り絵に託した 四季		書	
なぜ排除するのか		鮫島和子	28	村田丹下	42
長縄三郎	17	power of light		北海アルプス 大雪山繪葉	
夏山への招待		中西敏貴	28	書	
後藤茂樹	25	東川の山野草		不詳	41
日本岳連史		東野勇、米田松栄、滝本堅三郎、		北海道・東北ふるさと大歳	
高橋定昌	35	横内勇、花本哲行、岡島博	25	時記	
日本国立公園 (全 4 巻)		東大雪 ~四季の採光~		角川文化振興財団	32
井上靖、写真・森田敏隆	28	不詳	41	北海道安全な登山	
		光の彩		日下哉	25
		中西敏貴	28		

北海道繪本 文・更科源蔵、版画・松見八百造 ……32	北海道百名山 梅沢俊、伊藤健次 ……26	山とスキー 第2年合本 赤松勲 ……36
北海道開発大博覧会 吉田初三郎 ……42	北海道・ファミリー登山 菅原靖彦 ……26	山とその花 鮫島惇一郎 ……33
北海道隠れ湯 28 選 エムジーコーポレーション ……25	北海道文学百景 北海道文学館 ……32	山と私たち 今村朋伸、鮫島惇一郎 ……16
北海道自然 100 選紀行 朝日新聞北海道支社報道部 ……19	北海道まちづくり 100 選 北海道、北海道新聞社、NHK 札幌放送局 ……13	山の画帖 茨木猪之吉 ……33
北海道 集落地名地理 栃木義正 ……13	北海道野鳥観察地ガイド 大橋弘一 ……13	山の幸 石原木材合資会社 ……43
北海道主要山岳登路概況 南條康夫 ……25	北海道リスとナキウサギの季節 佐野高太郎 ……27	山の詩歌 登山全書随想編 3 藤木九三、川崎隆章 ……33
北海道森林植物 写真図譜 (I. 草本篇) 館脇操 編集・中野正彦、吹上芳雄、千廣俊幸 ……28	北海の秀峰 国立公園大雪山の驚異 不詳 ……42	山の自然学 小泉武栄 ……16
北海道森林植物 写真図譜 (II. 木本篇) 館脇操 編集・中野正彦、中村幸雄、吹上芳雄、三角亨、鮫島惇一郎 ……29	北海の霊峯 大雪山と層雲峡 附塩谷温泉案内 不詳 ……42	山の自然教室 小泉武栄 ……26
北海道層雲峡 不詳 ……42	北方野草 第 14 号 高野英二 ……38	山の思想史 三田博雄 ……21
北海道大雪山洋画展覧会 画 村田丹下 ……42	北方林業 2014 年 5 月号 北方林業会編集委員会 ……38	山の資料 登山ハンドブックシリーズ 6 山岳研究会 ……16
北海道探検記 本多勝一 ……19	町医者 of の記—おじさんのハンドバッグ 大山正信 ……32	山の素描 山口透 ……36
北海道 地図で読む百年 平岡昭利 ……14	水と私たち 俵浩三、鮫島惇一郎、成瀬廉二、八木健三 ……16	山の旅 大正・昭和篇 近藤信行 ……33
北海道地名解 磯部精一 ……13	道草山行ひとり旅 遠藤一郎 ……19	山の風物誌 登山全書随想編 2 藤木九三、川崎隆章 ……33
北海道地名誌 NHK 北海道本部 ……13	名峰百景 (決定版 自然の心) 家庭画報編 今西錦司ら ……36	山登りのお役立ちガイド 北海道山岳連盟 ……26
北海道登山口情報 350 全国登山口調査会 ……25	森と私たち 俵浩三、辻井達一 ……16	山は命の母 山本進吾 ……19
北海道登山史年表 高澤光雄 ……19	野獣撮影 戸川幸夫 ……33	山は呼ぶ 旭川電気軌道株式会社 ……43
北海道ニ於ケル国立公園候補地調査概要 北海道廳拓殖部 ……15	野鳥の羽ハンドブック 高田勝、叶内拓哉 ……13	山を読む 小崎尚 ……16
北海道の自然 100 選 朝日新聞社北海道支社 ……19	山 生きている大地 相賀徹夫 ……13	雪と氷の科学者 中谷宇吉郎 東 晃 ……21
北海道の湿原 辻井達一、渡辺祐三 ……29	山歩きの自然学 小泉武栄 ……16	雪の王者 大雪山は招く 不詳 ……42
北海道の旅 串田孫一 ……32	山旅記 山川力 ……33	雪の結晶 吉田六郎 ……27
北海道の地名索引 栃木義正 ……13	山旅句 エッセイ集 高澤光雄 ……33	吉田友吉の嵐山百科 吉田友吉 ……13
北海道の風景 写真 岡田紅陽 ……42	山談花語 栃内吉彦 ……33	利用者の行動と体験 (自然公園シリーズ 2) 小林昭裕、愛甲哲也 ……16
北海道の風光 不詳 ……43	山と溪谷 No.527 原康夫 ……36	林業技術 不詳 ……37
北海道の文化財 北海道教育委員会 ……29	山と溪谷 No.709 山口章 ……36	ワイルドビュー 井上功夫 ……36
北海道の誇り絶勝層雲峡 吉田初三郎 ……42	山とお花畑 2 田辺和雄 ……29	わが心の山 山岳写真集団 ……29
北海道の山々—山の風土とその紀行 宝文館出版 ……32	山と書物/続・山と書物 小林義正 ……16	わが山、源流へのあこがれ 早川禎治 ……33
北海道の山々 新版・空撮登山ガイド 1 梅沢俊、瀬尾央 ……26	山とスキー 加納一郎ほか ……36	

No.283  
P40

## 大雪山国立公園の代表的溪谷美 勝仙峡の所々

編：不詳 / 発行：大正写真工芸所



No.296  
P41

## 北海アルプス 大雪山旭岳勝景

編：不詳 / 発行：松山温泉場



No.303  
P42

## 北海の秀峰 国立公園大雪山の驚異

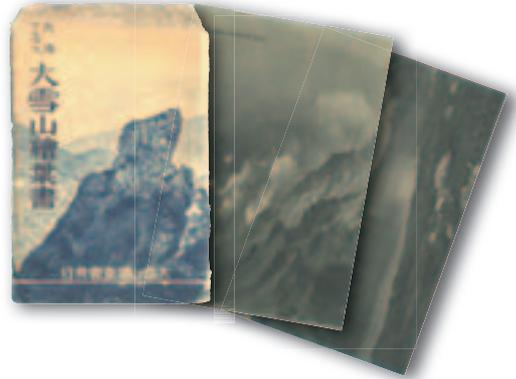
編：不詳 / 発行：北海道絵葉書倶楽部



No.297  
P41

## 北海アルプス 大雪山繪葉書

編：不詳 / 発行：大雪山調査会



No.298  
P42

## 北海アルプス 大雪山繪葉書

画：村田丹下 / 発行：大雪山調査会 / 発行年：1927年



### 写真提供

本紙作成にあたって「アトリエ nipek (ニペク)」中西敏貴様より写真の提供をいただきました。ありがとうございました。

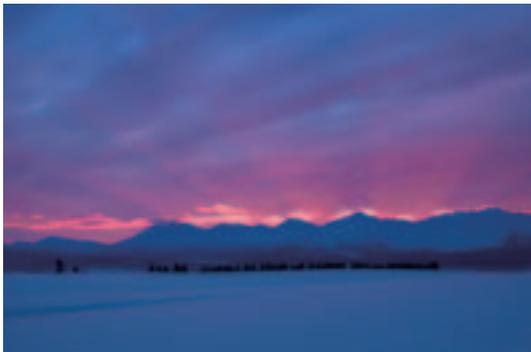


PHOTO OFFICE  
atelier  
n i p e k

PHOTOGRAPHER 中西敏貴

〒071-0236 北海道上川郡美瑛町字美沢希望 TEL&FAX 0166-74-8169 <http://nipek.net>

## ■ あさひかわジオパークの会

あさひかわジオパークの会は旭川市に住む自然・地質愛好家が集い、神居古潭や大雪山・十勝岳を含む地域をジオパークに認定してもらうことを目的に平成24年12月に結成されました。発足当初は6名の会員でしたが、平成27年2月現在では会員数は45名を超えるまでになりました。

ジオパーク（大地をベースにした自然や歴史・産業など魅力ある地域）には、地域の地質遺産を保全し、教育・防災や観光に活用して、地域を持続的に活性化していくねらいがあります。現在、日本には36の地域のジオパーク（7つの世界ジオパーク、北海道には5つのジオパーク）がネットワークをつくり、年々拡大しています。

大雪山は小さな火山体が集まってできた円錐台の形をなし、北海道の屋根にあたります。約3万年前には大噴火が起こって火砕流が噴出し、河川を厚く埋めました。その時にできた柱状節理が岩壁となって長く続く層雲峡や天人峡はジオサイトとしてすばらしい景観をつくり、大きな価値があります。

大雪山は北の野生動物が育まれる豊かな森と水の源であり、大河・石狩川を生ずるところです。東川町はまさに大雪山に磨かれた水と豊かな田畑がある火山の恵みを受けた町と言えます。

あさひかわジオパークの会は貴重なジオサイトを有する旭川周辺地域のジオパーク認定に向けた活動を行っている住民団体です。ジオツアーや自然観察会、自然調査、交流会・学習会などジオパーク構想の活動を通して、地域住民が地域のジオ・風土を正しく楽しく学び、体験して、地域のことを発信し語れるようにしたいと願っています。大雪山の価値を地元住民が再認識する“カムイの大地と火山が織りなす水と森の風土”のジオパーク構想をかかげ、ジオパーク認定に向けて貢献していきたいと思えます。



ジオフォーラム in2014「カムイの大地ジオパーク構想」



大雪山と旭川市、東川町、東神楽町



現地観察会（神居古潭峡谷）



火山のおもしろ実験（フィール旭川）

### 旭川ジオパークの会

〒070-8621 北海道旭川市北門町9 北海道教育大学旭川校・地学教室気付

【電子メール】[asahikawa.geopark@gmail.com](mailto:asahikawa.geopark@gmail.com) 【ホームページ】<http://asahikawageopark.web.fc2.com>

## ■ 一般社団法人 ひがしかわ観光協会



山の祭り

観光協会は昭和30年5月24日に「東川町観光協会」として設立され東川町の観光振興を図って参りましたが平成23年4月1日付けで「一般社団法人 ひがしかわ観光協会」として法人化しその運営体制を見直し現在に至ります。

東川町の観光資源は古くから天人峡・旭岳地区を中心に、これまで長年、主な事業として1年を通じて登山者の安全を祈願するために旭岳温泉地区にて山の祭り

「ヌプリコロカムイノミ」を開催し温泉街の宿泊客や登山客とともにアイヌの儀式を楽しんだり、天人峡地区の温泉施設の湯めぐりパスポートやイベント限定の山賊鍋などの特色あるメニューを用意して地区一帯で楽しめる滝まつりの実施など各地元温泉街の会員との協力体制の下で両温泉地の魅力をどのような手法で広め、どうやって誘客を推進していくかを目的として活動してきました。

しかし、経済環境や時代の変遷によりこれらのイベントも近年、一部は未実施となったり「大雪旭岳 SEA TO SUMMIT」のようなスポーツ環境イベントが加わる、あるいは旭岳温泉地区では1年を通じて誘客が図れるよう、冬期の地域の特色を活かしたクロスカントリースキーコースの整備による社会人・大学等の合宿の受入れを早くから実施するなど事業内容も単なるイベントの実施から多様な誘客施策の実施へと様変わりしてきています。



クロスカントリースキー

また、近年では、道の駅ひがしかわ「道草館」が道の駅として指定された平成16年から東川町の市街地への入込が飛躍的に伸び、飲食・カフェなど東川町の「地下水」や暮らしやすさを背景とした店舗が徐々に増えこれらを目的に来町するお客様、東アジアを中心とした外国人観光客が旭川空港直行便の創設や東川町の外国人日本語研修生受入れにより増加傾向にあるなど、従来の天人峡・旭岳地区に加え東川町市街地周辺も観光ポイントとして中心的な位置づけを占めるようになり周遊パターンに変化が見受けられるようになりました。

こうした変化はあるものの変わらないものは北海道のシンボルでもある「旭岳」、「羽衣の滝」などの雄大な自然の存在であり、多くのお客様に来ていただくためにPRを行うと同時にこうした自然環境を保護しなければならないというバランス感覚を保ちつつ当協会の目的を成し遂げるために関係機関等と連携して観光振興に今後も努めてまいります。

### 一般社団法人ひがしかわ観光協会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目1-15 TEL：0166-82-3761 FAX：0166-82-4764

【ホームページ】 <http://www.welcome-higashikawa.jp>

【facebook】 <https://www.facebook.com/Higashikawatourismassociation>



# ■ ナキウサギふぁんくらぶ

## 大雪山のチチッ・チュ・カムイ

アイヌ文化の研究者である藤村久和さんによると、旭川地方や十勝地方のアイヌの人々はエゾナキウサギのことを“チチッ・チュ・カムイ”と呼んでいました。「チチッと鳴く神様」という意味です。大雪山系のすそ野に住んでいるアイヌの人々は、秋、山ぶどうを採るために山に入るときや、神様にお願いして違う土地に行くために山越えをするときに、ナキウサギを見たり声を聞いたりしていました。けれどもそこは神々がすむところです。アイヌの人々はなるべく足を踏み入れないようにしていたそうです。アイヌの人々が北海道の山と川と海の自然のめぐみを大切に暮らしていたころ、エゾナキウサギは人知れず山奥の岩場おうかで生命を謳歌していたのです。



チングルマの紅葉の中で 撮影者：中村千尋さん

けれども、今は、人々がナキウサギの棲む山奥にも道路を作ったり、森林を伐採したり、リゾート開発をしたりしています。このため、生息地の破壊や分断の問題が道内の各地で起こっているのです。氷河期からの生き残りであるエゾナキウサギは、寒冷な気候に適応し、山のきれいな空気であれば肺にカビが生えて死んでしまいます。また、岩がごろごろと積み重なったガレ場を棲みかとし、岩のすきまで子育てをし、冬のための食料である植物を岩の下に保存します。乾燥した植物は、腐りにくく栄養価が高いので、ナキウサギはこれを食べる長い冬を過ごすのです。このように、きれいな空気のカレ場はエゾナキウサギの生存に不可欠です。



ナキウサギ写真展

しかし、開発によってガレ場は減少しつつあります。そもそも分布の面積が狭く、生息基盤が脆弱なナキウサギですが、近年個体数が減少していることもあって、2012年に環境省の準絶滅危惧に選定されました。エゾナキウサギを絶滅させないためには、今ある生息地をそのまま保全していくことが必要です。

北海道にしか生息していない“チチッ・チュ・カムイ”が、ある日、気がついたら絶滅して山からいなくなっていたなどということがないように、貴重な遺産として未来に残す活動を今後も続けたいと思っています。

## ナキウサギふぁんくらぶ

1995年、大雪山国立公園の特別保護地域に計画された「土幌高原道路」の建設からナキウサギを守るために活動をスタートしました。会員は全国に3099名(2015年2月現在)。ナキウサギを愛する心のある人はだれでも会員資格があり、ナキウサギの想いを伝えるメッセンジャーになります。生息調査や行政への要望活動などのほか、学術的にも文化的にも貴重なナキウサギが国の天然記念物に指定されるための署名活動も行っています。

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル6F (社)北海道自然保護協会内

TEL: 011-281-3348 FAX: 011-281-3383

【ホームページ】 <http://www.pikafan.com/fanclub/>

【電子メール】 [fanclub@vmail.plala.or.jp](mailto:fanclub@vmail.plala.or.jp)

## ■ 山のトイレを考える会

「山のトイレを考える会」は、北海道の山岳地での登山者の排泄と処理、山岳トイレの整備といった課題に取り組むために2000年に、登山者、山岳会、山岳ガイド、研究者などで結成した市民団体です。発端となったのは、大雪山のトムラウシ山南沼などで、使用済みの紙や尿尿が散乱し、用を足す場所を求めて高山帯の植物が踏みつけられて道ができていく状況が報告されたことでした。



山のトイレデー（旭岳）

大雪山をはじめ北海道の山は、登山口が林道の終点などでトイレのない場所が多く、山小屋は避難小屋が主体で、トイレが設置されていない場所もあります。主要160山のうち、登山口にトイレがあるのは76箇所、53箇所には

トイレがありません。山中では、15箇所にトイレがあり、4箇所はルート上の避難小屋にありますが、141箇所ではまったくトイレがないのです。旭岳ロープウェイの姿見駅に処理水を循環させるトイレが設置されたり、黒岳石室にコンポスト式のバイオトイレが設置されたり、トムラウシ山やニペソツ山などでは携帯トイレの使用が推奨されるなど対策は進みつつあります。しかし、まだトイレのない避難小屋や野営地も

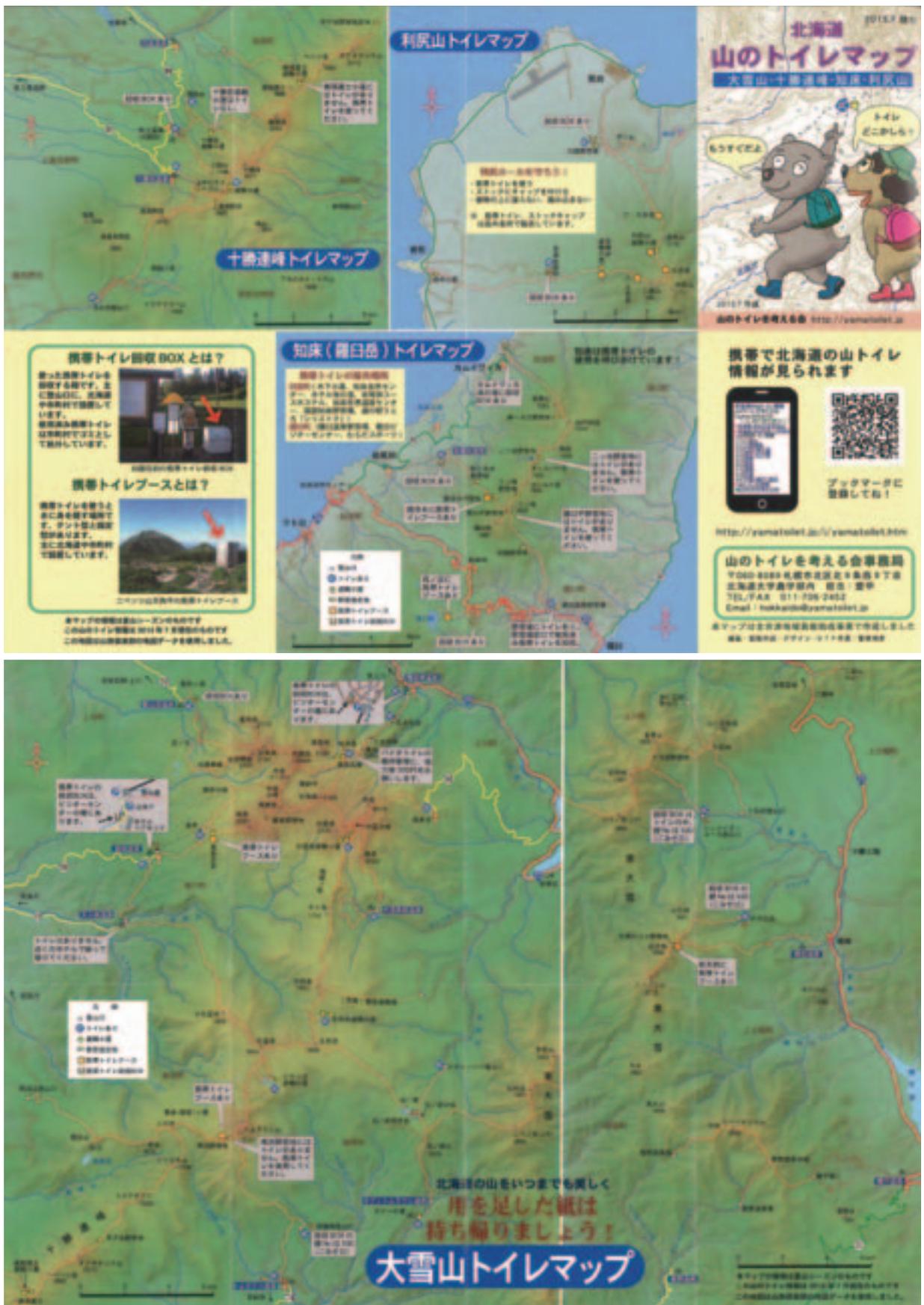
多く、いまだに紙や尿尿が散乱している状況です。

当会では、そのような問題に対応するために、北海道以外の事例の収集や勉強をし、関係機関に対策の検討をお願いしています。もっとも力を入れているのは、登山者の方々への情報提供と啓発活動です。山に入る前にはトイレに行こう！、できるだけトイレで用を足そう！、トイレにゴミを捨てないで！、使用済みの紙は必ず持ち帰ろう！、携帯トイレも使ってみよう！を、様々な機会にお願いをしています。トイレのある場所を知っていただくための「北海道山のトイレマップ」の作成・配布、ホームページでの情報提供、年に1回の関係者が集まり議論するフォーラムの開催、9月の第一日曜日を主に行う啓発キャンペーン「山のトイレデー」などを実施しています。北海道の山がいつまでも美しくあり、次の世代も登山を楽しむために、活動へのご協力とご参加をお願いいたします。

美瑛富士清掃登山



くみ取り作業のようす（黒岳）



## 山のトイレを考える会

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目 北海道大学農学部内 愛甲  
 電話 / FAX : 011-706-2452

【ホームページ】 <http://www.yamatoilet.jp>

【電子メール】 [hokkaido@yamatoilet.jp](mailto:hokkaido@yamatoilet.jp)

## 文献書誌の分類にあたって

文献書誌の分類については、専門家である清水敏一さん（岩見沢在住）にお願いしました。

本に関する基本的な情報は、①著者、編集者②発行者（社）③発行年④本の分類記号⑤内容の要約文（要約文中の人名敬称は略しました）ーを基本としました。分類記号は、日本図書館協会が採用する「日本十進分類法（NDC）」です。図書や資料を収集、管理するときの基本的な分類記号で、図書の貸し出しや、目的の本を探すときに図書館の書棚のどこにあるかが分かり易くなります。分類記号を付ける作業にあたっては「文化交流館」のスタッフに協力いただきました。

なお、大雪山に関する本の収集の充実は継続していきますので、ご意見、情報を東川町へお寄せください。

## ご協力いただいた方たち

東川町がふるさとの山、大雪山に関する本を集め、目録作りを進めていることに多くの方から賛同とお力添えをいただきました。貴重な本、研究書の情報をお寄せいただき、また、書籍、資料の寄贈もいただきました。お名前を書き残し、お礼とします。

愛甲哲也さん、石原誠さん、市川利美さん、大塚友記憲さん、大橋弘一さん、柏澄子さん、久保田優一さん、笹川良江さん、鮫島惇一郎さん、塩谷秀和さん、清水敏一さん、高澤光雄さん、中谷良弘さん、中西敏貴さん、那須敦志さん、花島徳夫さん、林拓郎さん、春菜秀則さん、本村勝伯さん、保田信紀さん、山崎猛さん、和田恵治さん

## 大雪山から育まれる文献書誌集 第2集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

編集・発行／写真文化首都「写真の町」東川町

〒071-1492 北海道上川郡東川町東町1丁目16番1号

TEL 0166-82-2111

<http://town.higashikawa.hokkaido.jp>

企画・制作／株式会社 総合企画

発行日／平成27年3月



# われらの大雪山 (愛山溪新聞社歌)

作詞 小野寺 与吉  
作曲 大須賀 羊一



1. しんせつ ふか い オ ブ ジェ の た に を こ も れ び う け て  
 2. ふんえん しろ いろ オ す が ー た み が た い け に ザ ー ッ ク お ろ し て  
 3. はな き き そ う い ち む ー の が は ら に ゆ き み ず く ん で  
 4. に し き と も え る も み ー じ の な か を え だ か き わ け



ラ ッ セ ル す れ ば ア ー ア ー は ら か に せ つ え ん な び ー く  
 ひ た い を ふ け ば ー ー は ら か に せ さん て ん た か ー く  
 テ ン ト を は れ ば ー ー は ら か に せ オ プ タ テ シ ケ ー の  
 さ わ つ め ゆ け ば ー ー は ら か に し ん せ つ ひ か ー る



い た だ き は よ ぶ ヤ ッ ホ ー ヤ ッ ホ ー わ れ ら の あ い ぎ ん け い  
 こ だ ま な み は ま く れ ぶ ヤ ッ ホ ー わ れ ら の あ あ ト ム だ ー シ  
 や ま ね み ね は よ ね ぶ ヤ ッ ホ ー わ れ ら の あ あ ト ム だ ー シ

1、新雪深い オブジェの谷を  
しんせう かく オブジェの たに

木洩れ日受けて ラッセルすれば  
こも びう 受けて ラッセルすれば

ああ 遙かに  
ああ 遙かに

雪煙なびく頂きは呼ぶ  
せつえん なびく いただき 呼ぶ

ヤッホー 我等の愛山溪  
ヤッホー 我等の 愛山溪

2、噴煙白い 姿見池に  
ふんえん しろい 姿見池に

ザック降ろして 額をふけば  
ザック 降ろして 額をふけば

ああ 遙かに  
ああ 遙かに

山巔高く 罈は招く  
さんてん 高く 罈は招く

ヤッホー 我等の旭岳  
ヤッホー 我等の 旭岳

3、花咲き競う 銀杏が原に  
はな 咲き 競う 銀杏が原に

雪水汲んで テントを張れば  
ゆきみず 汲んで テントを張れば

ああ 遙かに  
ああ 遙かに

オプタテシケの 山脈昏れる  
オプタテシケの 山脈昏れる

ヤッホー 我等のトムラウシ  
ヤッホー 我等の トムラウシ

4、錦と燃える 紅葉の中を  
にしき と 燃える 紅葉の中を

枝掻き分けて 沢つめゆけば  
えだ かき 分けて 沢つめゆけば

ああ 遙かに  
ああ 遙かに

新雪光る峰々は呼ぶ  
しんせう 光る 峰々は呼ぶ

ヤッホー 我等の大雪山  
ヤッホー 我等の 大雪山

定価：1,000円（税込）

当冊子の売上金は「大雪山から育まれる文献書誌集 第3集」の制作費として使用されます。